女鑑臨時増刊

第拾六年第五號

家事節用

近刊豫告

文部省體操遊戲取調委員 坪井玄道、井口あくり、可兒德、川瀨元九郎、高島平三郎諸先生共著

體育の理論及實際

菊判 三百餘頁
洋裝 全一册
定價 未定

本書は本年一月十五日文部省より官報を以て發表せられたる體操遊戲取調報告に基き同取調委員高島平三郎川瀨元九郎可兒德井口あくり坪井玄道諸先生が其各條項を教育、生理、及實地上より一々詳細に説明せられたるものにして設備、動作等は詳密なる挿畫によりて懇切叮嚀に示しあれば此書を繙くものは親しく諸先生に就て指導を受くるの思あるべし、而して新式體育要項は全體網羅して遺す所なし故に學校に於ては勿論一般體育に志す人士は必缺ぐ可らざる要書なり

發行所
東京築地貳丁目
株式會社 國光社

女鑑臨時增刊
第十六年第五號

家事節用目次

家事心得

家事實用

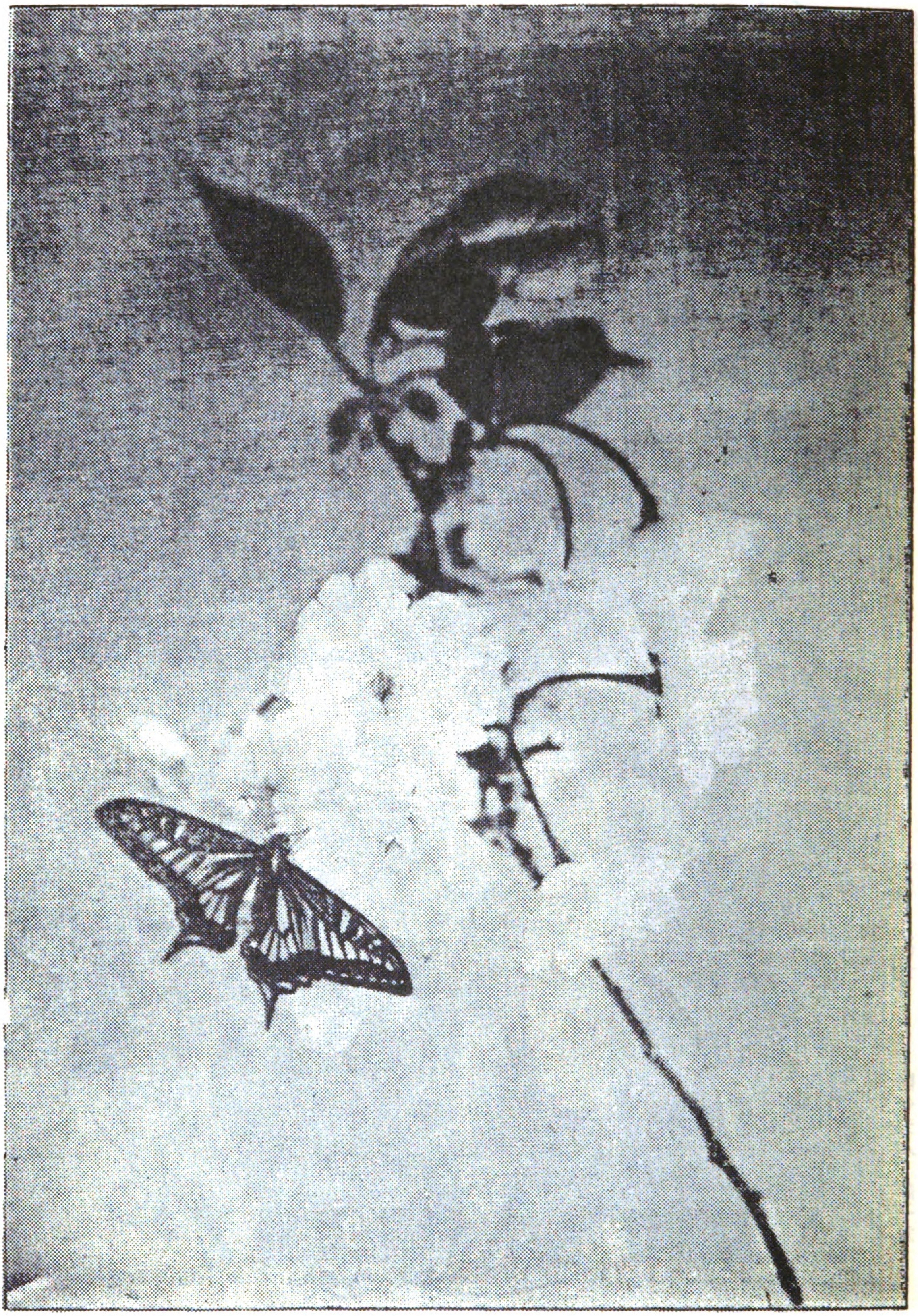
女子の鑑

表紙と挿畫

寫眞版

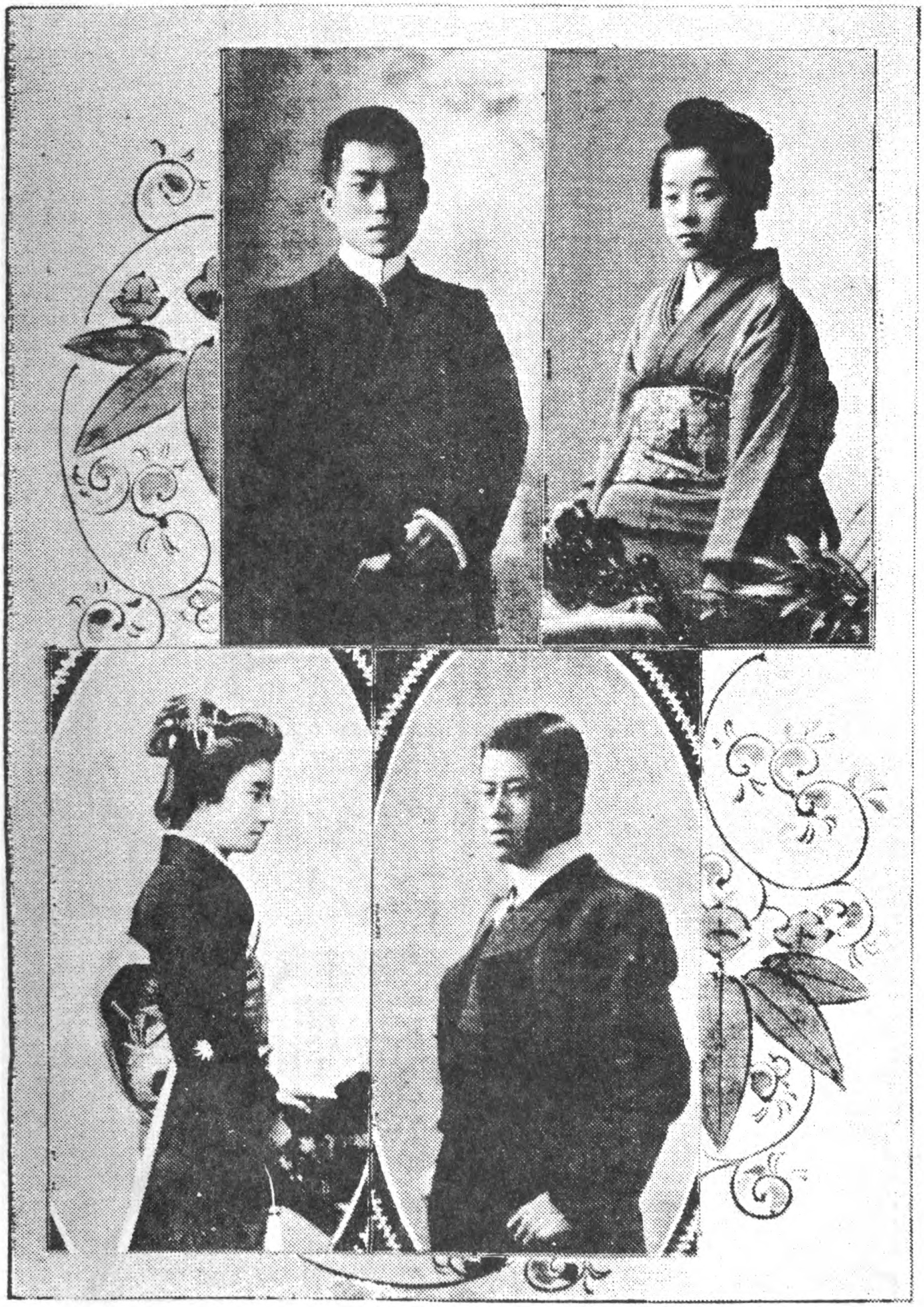
▽花前の蝶▽岩倉公爵の家庭▽鍋島侯爵の家庭▽前田侯同令夫人▽樂しき庭園▽隅田川の櫻▽小金井の花▽手風琴▽かぐや姫

花前の蝶



ＭＨ君撮影

岩倉公爵の家庭（一）



上　公爵世嗣　具張君　同令夫人・櫻子君

下　令息　具幸君　同令夫人　尚子君

岩倉公爵の家庭 (二)



右より斜に令息 具高君
同 具顯君

左 公爵 次 同令夫人
令孫 具榮君
同 具實君

令孃 米子君　令孃 季子君

鍋島侯爵の家庭

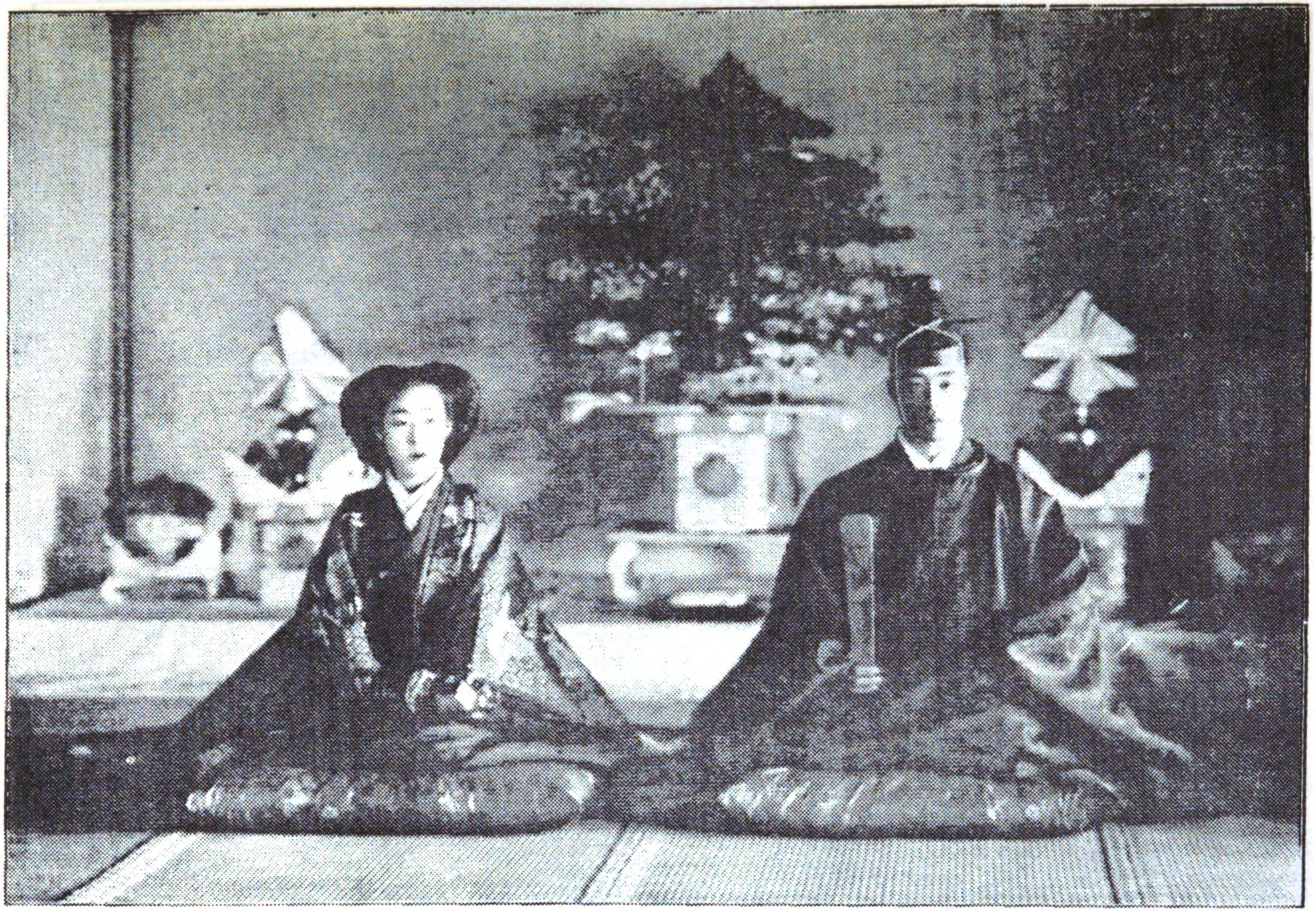


令孃　俊子君
令息　孝三郎君
侯爵世嗣令夫人　禎子君
令息　俊雄君

侯爵　令孃信子君　令夫人

侯爵世嗣　直映君
鍋島子爵養子　直縄君
令孃　尚子君
令孃　茂子君

前田侯と同令夫人



右前田利爲君

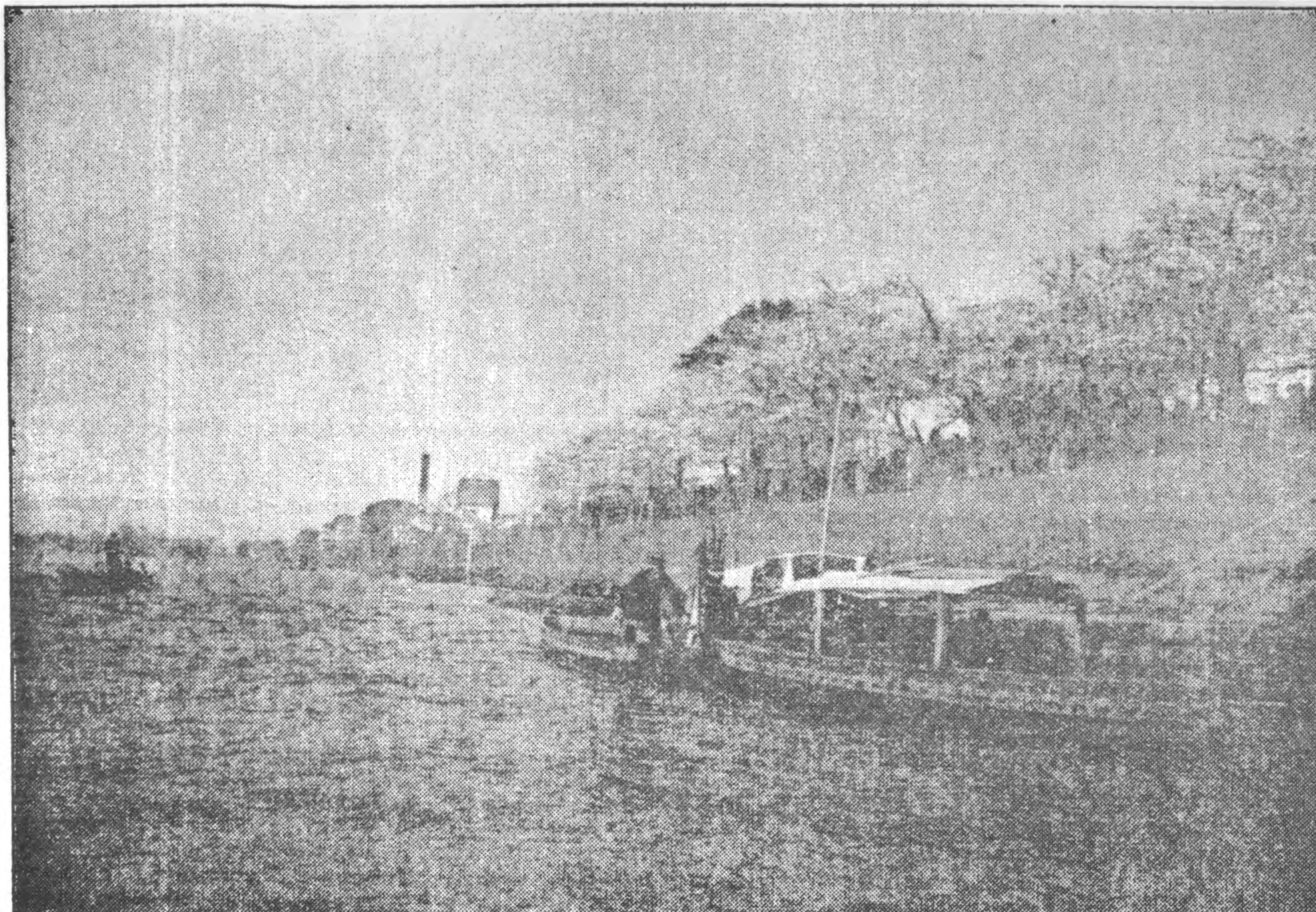
左同令夫人漾子君

樂しき庭園



井伊直方君撮影

隅田川の櫻



ＭＨ君撮影

手風琴

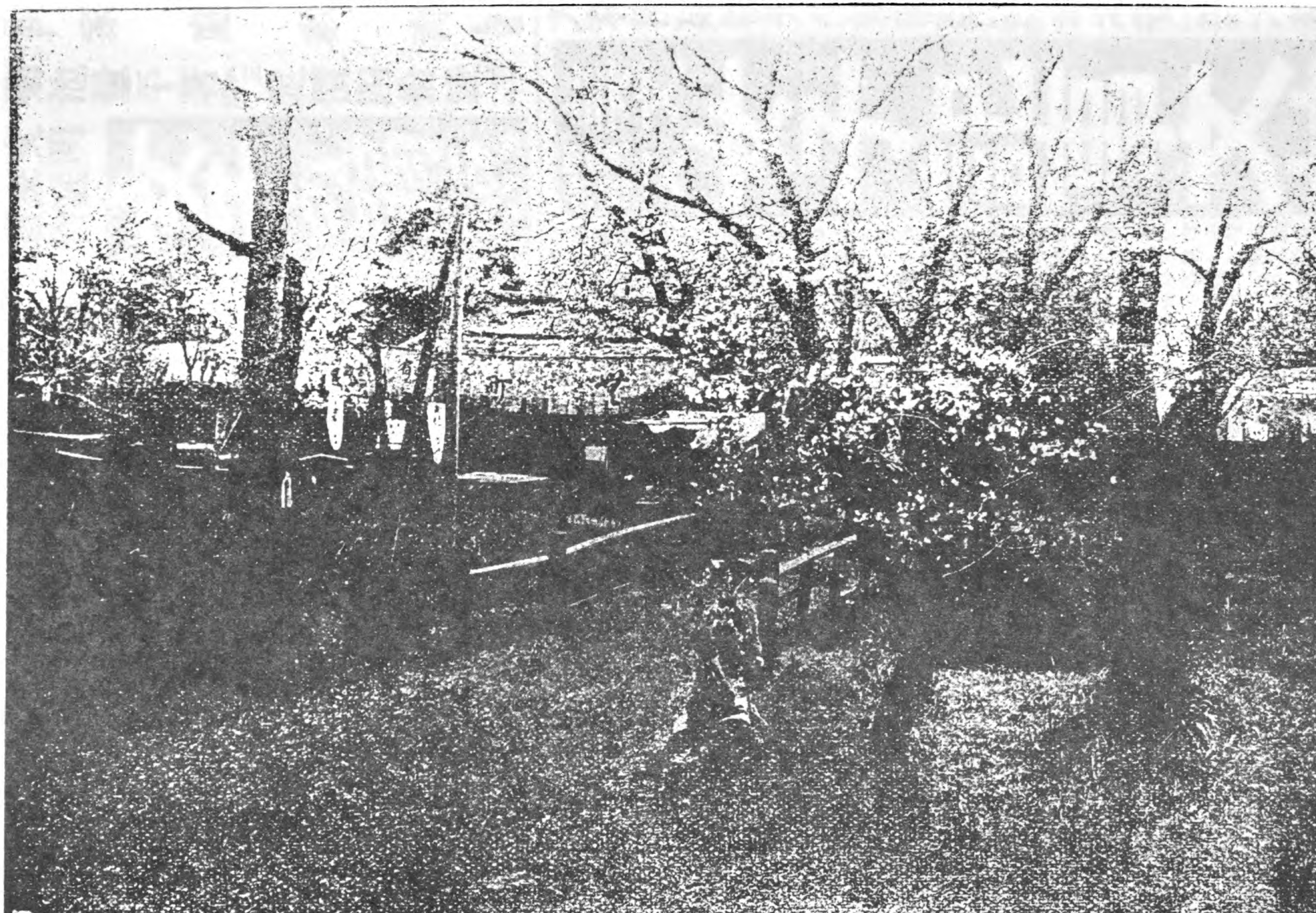


井伊直方君撮影

かぐや姫



小金井の花



MH君撮影

廣文堂發行圖書目錄

◇(東京市京橋區桶町廿壹番地)◇

家庭教育

菊池量平著 第三版 定價四拾錢 郵税六錢

文明家庭讀物 **女子の弱點**

女子の長所と弱點とを示して世の婦人を戒め將來處すべき方針を親切に説明せり本書は世の婦人界の賜物也

山崎彌榮著 洋行實談 定價四拾錢 郵税六錢

珍聞奇觀 **洋行土產 ハイカラ婦人**

本書は東西ハイカラ婦人の眞相を實見したるもの面白お可笑き上に比類なき近來流行ハイカラ家庭の好讀物

帝國婦人會 高評廿版 定價四拾錢 郵税六錢

家事實用 **婦女子の本分**

婦女子の本分として家庭上必要の事柄一切を詳説教示し一生涯日常實際に應用する實に好家庭教師の心得也

修學寶益

大和田建樹先生新著 高等女學校及各女學校參考書 美製本一册金六拾錢 郵税六錢

美文韻文 **女子記事文林**

大和田建樹先生は國文學者中の大家也先生多年の實驗に徴し未だ完全なる記事文美文の手引となれるものあらざるを遺憾とす本書は作文の資料として筆を執らば優美なる國文體の記事文美文組文は燦爛たる大和錦を織りなす事を得べく作例は數篇を掲げ組織完全にして自由に應用し得らるべく篇頭には先生獨特の國語新辭典を載せ記事文美文作文を作るには最も必用の新辭典也此書を座右に置けば如何なる難題の文と雖も立どころに作成せらる可有益の書也尚記事文を研究するには男子も必讀の參書也

文學博士 日本女子大學講師 小杉榲邨先生校訂 全一册 金參拾五錢 郵税六錢

記事消息 **女子文のはやし**

女子記事文略目次〔春之部 夏之部 秋之部 冬之部 雜之部〕

日用書簡文種類略目次〔祝ひの文 慰問の文 招待の文 依賴の文 請求の文 報知の文 誘引の文 音物の文 謝禮の文 羇旅の文 哀悼の文 忠告の文〕▲以上の文數百二十餘題也

女子の文範として良書に乏しきは女子敎育の缺陷と謂はざるべからず本書は曾て高等女學校に從事せらるゝ多年の實驗に徴し文章の秀逸をもつて稱せられ最文藻に富み最文才に長じたる齋藤梅子女史が手に成り多年の間篋底に祕せられし中につき其華を拔き其秀を採りたるものにして加ふるに小杉文學博士が親しく筆を採りて詳細なる校訂に日子を費されたれば玉益々光を添へぬ實に本書は其事項の適切なるのみならず敍述の流麗なる一度之を繙かば興味津々卷を掩ふ事を忘るゝに至らん殊に現今普通に行はるゝ所の日用書翰往復通信の文を書くときは實用簡明に何人にも能くわかりやすし特に女子記事文の如きは目下高等女學校にて敎授せらるゝ度に當て巧妙佳絶美文を以て作り品位を高め世の才媛女學の徒が一日も座右を缺くべからざるの珍書たるを疑がはず本書出版以來世上の大高評を得六萬部を賣り盡す

兩書各女學校參考書

發行所 東京市京橋區桶町廿一番地 內外書圖出版發賣 廣文堂書店



阿多廣介先生
園田竹熊先生 編纂◎明治卅八年二月 文部省檢定濟

再刊 女子補習讀本

菊判大和綴美本
定價 上金廿五錢 下金參拾錢
郵税 壹冊金四錢
郵券代用壹割增

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二個年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

重要目次

上卷 ●わが國●養蠶●京染●色●衣服の取扱●衣服着用の注意●思ひやり●萩山直女●心のまゝになるならず●親こゝろ●佐藤つろ●娘送りし手紙●十本の米作●畜産果樹の栽培●若菜●勤儉貯蓄●甘藷●砂糖●食餌●衛生に關する心得●運動●勉むべき事●飲食を節すべき事●清潔を保つべき事●西洋洗濯法●空氣●住居の撰擇●ナイチンゲール●赤十字●慈善を行ふべき事

下卷 ●國土と生業●商業の發達●主人の眼識●古今交通の變遷●電氣世界●四季の次々●加賀千代女●都と田舍●森林海路の女子の經濟●女子の長所短所●髮の飾身の飾●風俗變遷●維新後織物の進歩●陶器磁器●工女のかゞみ●英國人の勤務●田舍の夕ぞら●看病●母のつとめ●樂しき家庭●國家に對する心得●出征軍の妻に送る手紙●右返事●歐米人の公共心(以上)

發兌元 東京築地二丁目 株式會社 國光社

阪本四方太
高濱虚子 共著

寫生文集 帆立貝

▽△口繪彩色密畫二葉……淺井默語筆
▽△挿繪木版二十四葉……中村不折筆

クロース菊判 二百五十三頁

正價金壹圓 郵稅金八錢

▲本書は近時滔々として行はるゝ淫靡文學に反對す。
▲本書は淫靡文學に惱める人に最良の慰安なり、最大の福音なり。
▲本書は家庭の讀物として子女の健全なる文學趣味と品性とを涵養するに足る。
▲本書は清新なる寫生文を作らんとする人には唯一の模範なり。
▲淺井先生の口繪は輕妙にして雅馴なり。不折先生の挿繪は奇縱佚宕なり。
▲繪畫の多き其の數廿七葉に上ぼる、此の書を以て淺井中村兩先生の書帖とし見るも亦可なり。

伊藤佐千夫作

小說 野菊の墓

○○○○
表紙……木村淡香畫 中村不折畫
口繪……中村不折畫

增補訂正

總振假名付 百二十七頁

正價金參拾錢 郵稅金四錢

▲野菊の墓は曩に雜誌ホトトギス新年號の卷頭を飾れる小說にして、時流を拔きたる傑作として歡迎せられ、エノックアーデンの俤ありと推稱せられたる出色の文字なり。茲に更に增補訂正せられて一冊子をなすに至れり。
▲野菊の墓は其の名の示す如く、可憐なる、清新なる、田園趣味に富みたる物語にして、著者の悲しき實歷談なり。其の一字一句皆淚を以てものせらる。民子の哀れなる一生に何人も同情を禁じ得ざるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十五番地 俳書堂 (電話新橋二八八番)

(書籍目錄)(石膏十種目錄)無代進呈致候



女鑑臨時增刊

第十六年第五號

家事節用

朝とく起出て、窓をひらけば、日漸く出でんとして。大氣塵を收め。小鳥は歌ひて迎へ顔なる。誰の心か清まざらん。誰の心か勵まざらん。淸き心もて事に勵まば。世はいと安らかなるものなり。一家の幕は此時よりぞ開かる。外に出づるもの。家に在るもの。皆それぞれに勵め。いそしめ。働きてこそ樂しき世の中なれ。而して一日の幕を樂しく閉ぢよ。日は平和ある家庭に向つて長閑に。花の色。鳥の聲も。働ける家庭を慰めんとてなり。(愛氷)



家庭の觀念

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子

そも／＼文學經濟あるは工業など、種々の人事は悉く人類の踏むべき道を開き便益をはかり、害毒を去りもて幸福を享けんために外ならず、蓋し有形の事物は人目にふれ易ければにや、水を渡らん爲に舟筏を作り陸を行かん爲に車馬を用ひ、あるは日月星辰をながめて四季を便にせんとて曆を作り、禽獸草木をしらべて生命を保たんとて食を調ふるなどのことは、いと進歩すめるも、無形の心術に至りては、その影響を目のあたり感ぜざればにや、おのづから進歩の氣色なきのみならず、反て退歩さへするあり、まことに宇内の物相はなべてもろもろの因縁あつまりて成るものなるに、かくなん物質上のとのみは進歩するも、精神上のことゝも退歩せんには、さながら暗夜玉の臺に坐する如くものたらぬ心地ぞする、あはれ人生の不幸こよなかるべし、



徳川伯爵令孃　艶子

さて心術をみがく工夫は家庭てふ觀念を進歩せしむるこそよけれ、元來心術を修むるには哲學、あるは、宗教などさま〲の道あらむも、これらは各自の信向に委ぬべきものぞかし、さればその自ら好むところに僻するは免れじ、甚しき隱遁もて世を送り、放逸もて生を終ふるあり、あるは危言を吐き不平を鳴らしその一身ばかりは滿足して、幸福と思ふめれど、そが爲め家族の貧困をまねき、遂には邦家の盛衰に關することあり、獨り家庭には人生最大の幸福ひそむのみならず、家族とゝもに事を遂ぐべきをもていみじき極端に流るゝことなし、然かも慈悲恩愛あるは忍耐等一切の徳行を磨く因縁となるべし故に今日の如く人情日に薄く、さるに國運月に煩はしき時は家庭の觀念を國民に普からしめ、以て國家の元氣及び個人の幸福を増さしむることこそ急務なれ、蓋しおのれは家庭とは決して單に家屋もしくは家族につきて言ふにあらずかし、勿論家族なければ家庭なき理なるを以て、家族は家庭をつくるに必要なれど、唯に家族の集合を見て完全なる意味の家庭とは名け難し、そは家庭には人類の生活に伴ふべき自然の法則存し、人類の人類たる所以の道たり、氣充つべきを以てなり、されば獨身にて深山に住む樵夫も家庭を作り、なき人の後を弔ふ寡婦も家庭を有ち得るなり、又金殿玉樓に住むべき人にのみ家庭あるにはあらず、あやしき草の庵を結ぶものも家庭あり、などか家族



德川伯爵令孃 繡子

の數と住宅の品とを問はん、唯無形ながらも家族の生活のまに〳〵一種の小天地を作り、從ひて一種の制度行はれおのづから人類の道明かなれば可なり、されば苟も家庭と云ふには左の如き條項を備ふべきなり

第一主義　いでや家庭とし言はむには一種の主義定まりて家族の行爲は悉くその主義によりて是非を定めでやはわるべき、さればわが如き國體の國にては、家族擧りて祖先の遺德を思ひ親は親たり子は子たり、夫婦別あり、上下順あり、且つ他人との交際は如何にすべきか、國家に對する報恩は如何にすべきやと、人生のこと悉く主義定まりて家族その方針に進みてこそ家庭の家庭たる所以存するなれ、さるに世の實際を見るに、かゝる主義定まる家は少きのみならず、甚しきは父と母と信向を異にし、兄と弟と風儀を別にするあるを以て、家庭に於て子孫を教育せんも主義なきを以て、決して一定の方針に感化すること難し、あはれ家に一定の主義なきときは、單に家族の集合とは云ひ得んも、完全の家庭とは言ふべからず、これぞこよなう人生の不幸なる、



德川伯爵令孃　喜美子

第二和樂　人は一日だに快樂なからんには生存する望みは絶ゆべし、凡そ快樂に二種あり、肉體上のものと心靈上のものとなり、さるに食前方丈の奢りも一たび口に飽けば、その樂はつき、綾羅錦繡の飾も既に身を掩へばその樂は足ることとぞうたてけれ、かく肉體上の快樂は移り易きのみならず、この種の快樂

には必ず苦痛の伴ふものぞかし、獨り家族團欒和氣靄然たる家庭の快樂は、いつもながらつきず、衰へず財の有無に關せず、身の貴賤に拘はらず、何人にも享けうるものなり、見よ可愛の兒は、父母刀自と呼びつゝ、そが袖をひき、夫は妻を憐み、妻は夫を恃み、老者は子孫の長へに榮え行くらむとほゝゑむ、家庭の快樂は、なか〱言の葉をもてうつしがたし、况して霞たなびく春のあした、月すみわたる秋のゆふべ、家族うち和して、天然の光景を樂むばかり、ゆかしきものはあらじ、うべなり古歌に『埋火のあたりのどかに兄弟の、まとゐせしよぞこひしかりける』とあるは、

第三家風　既に人あれば從ひて氣質あり、家あれば從ひて習慣あり、而して人はその氣質によりて家風定まるものぞかし、もし家に家風なきときは、家庭たるを得ざること、さながら人に氣風なければ人と言ひ難きが如し、蓋し家風にもよきものあり惡しきものあり、能くえらぶべきものにこそ、

先づ家風は高尚及び廉潔なるべし、されば平生の娛樂にも必ず人爲のものに心を用ゐて、天然のものをもてえらふべし、おのれ常にかく思ふものから、子供を育てしころも決して有害の玩弄品をあたへず、有益の戯具にあらざる限りは必ず天然の事物をもて樂ましめ、おのれ嘗て『朝ねする兒らのためにとしめ結ひし、垣ねに匂ふあさがほの花』とよみしことありけり、世の親にてあるもの俗曲をうたひ、子にてあるものこれに應じて舞ふ如き家風は、卑俗の甚だしき例ならむ、亦私利のみ貪ぼり、少しも廉耻を知らざる家庭の家風に生るゝものは、居は氣を移す理によりて、遂には渇せんも、盜泉の水を飮まじといふごとき氣節の人物となるを得ざらむ、もし憂國の君子これを思はざれば、賄賂公行の社會となりて、このしき島の大和の國風を害することもやあらむ呼、

次には節儉及勤勉のことな忘れそ、凡そ人間の富貴は風前の燈火、雨前の花にもたとふべし、實にたのし

むにたらず、故に如何なる地位の人なりとも、つね〲節儉を守るべし、むかし松下の禪尼は、家庭に於て節儉を守り、施いてその子北條時賴をして善政を天下に布かしめけり、今や奢侈の風いよ〲盛れり、この時に際して禪尼のごとき主婦いでざれば、邦家の前途危きかな、將た人は自力もて生存するこそ尊けれ他力を賴みて生涯を送るぞ本意なきわざなる、されば、勤勉なる家風を作り、おの〲應分の天職を盡さでやはあるべき、

要するにおのれは家庭と云ふことにはかく種々の意味を含むものと信じはべるなり、ゆゑに今日の急務は世人をして家庭を乾燥無味なるものと思はしめで、眞に人生に最も必要なる恩愛の源、快樂の基、はた亦國民氣質の根本は悉く玆にあることの觀念を知らしむるにあるらむ。

空想と勤勉

東京高等女學校長　棚橋絢子

人の希望は兎角其實力と相對せざるもの多く、別して青年時代の男子が希望する所を察するに、兎角大に過ぐるの傾向あり、一足飛に英雄豪傑たらむことを希望し、賢人君子の實踐躬行をもどかしく思ひ、大功は細瑾を顧りみずなどゝいふ言葉を利用して、我身の才不才をも考へず、只其望みのみ大きくして、現在我爲すべき業を粗略にし、其結果面白からぬ事出來れば、忽彼是と其目的を變更し、度々の詰り五里夢中に彷徨して、一生を誤るもの甚少しとせず、女子に於てもひたすら高等の學問だにすれば、獨立自營の道を得べきものと思ひ、男子と拮抗し得るを以て高尙なりと考へ、其本分たる家政の道に至りては、更に實行を務むる者なく甚しきは、獨身生活をなさんと企つる者さへありて、其結果中途に事情起り其方向を替ん

とするに當りては、業に已に其嫁期を失へるのみならず、會〻恰好の配遇を得るも、本分の家政の實踐躬行にうときがために、圓滿なる家庭を作り出すこと能はず、折角の學問も之を死物にして、終には世の人に女子には學問は無益なりといはしむるに至るは嘆はしきことゝいふべし、是れ皆實力と希望とが、相添はざるの結果に外ならざるなり、

憶ふに男女とも血氣の未だ定まらざる時代は、是れ所謂希望の時代にして、兎角空想に驅られ易き際なれば、年長識見ある人の説を聽き、時には其人に就きて我希望を吐露し、其可否の判斷を請ひて我方向を定め、一意專心に其方向に進むを以て過を少なくし、成功を得べき最捷徑となすべき者なり、特に女子は常識に乏しき者なれば、猶更尊長の指揮をうけて其常識を養成し、過分の望みを立てず、實踐躬行を本旨とし、孜々として家政の主宰者たらんことを力め、享得たる學問を以て、圓滿なる家庭を造り出すの助としたらんには、一家の幸福は、勿論小にしては一身の幸福となり、大にしては國家社會の幸福ともなるべければ、ゆめ此邊の考慮を怠るべからず、

茲に宋尙宮女論語の營家之章を摘記して、女の學問は應用を第一とし、實力を養成するを主とすべく、斯くして始めて望外の滿足も自ら得らるゝものなる事を諸子に知らしめんとす曰く、

營家之女、惟儉、惟勤、勤　則　家　起、懶　則　家　傾、儉　則　家　富、

かく細密に渡り勤儉を以て其家を經營すれば、大富は命なれば俄に致すべからずとするも、小富は必らず之を致すことを得べく、斯くて一家ゆたかになれば、其家庭の歡笑欣々たらんこと亦疑ひなかるべし、愼むべきは無益の空望、勉むべきは勤儉なるかな。

――春雨のはれたるけさもおく露の匂ひこぼるゝ花のいろ哉――

家事の注意

華族女學校學監　下田歌子

世に、實驗ほど、常識を增すものはなし、されば、妙齡の時分より、雪白の髮になるまで、家の內に居て數十年の經驗を積みし姑母の多數は、學理を、實地に應用する力こそ無けれ、改善の方法を、考究せんの思想にこそ缺けたれ、飯の水加減、香の物の漬け方より、汚れたる衣服の手がへし、破れたる陶器の繼ぎやうまで、數回失敗して、幾度か實地に試みたる末は、遂に、確乎と、理屈にも合ふやうなる、方法さへ案じ出して、存外、一家の經濟も上手にやる事と成りたるなるべし、殊に、昔の姑母は、嫁に小言いふは一つの役目の如き習慣となりたる、家庭にしてまれて、長き年月を經過したるなれば、其若き時の苦勞は知らず〳〵、其人物を磨き上げて、能く行屆く內室殊に貞實な妻女とも稱せらるゝやうに、しあげたる婦人も、世間には少からず、然るに、今の少婦は、學問こそ、幼時からなしたれ、家政學こそ、學校にて修めたれ、昔ならば、嫁入盛とて、人の一人も使ふ程の分限より以上の家にては、滅多に戶外へも、出さゞりし十七八の少女も、今は大抵、猶通學して、其運動時間には鞦韆やら、テニスやら、繩飛、綱引さへも爲兼ぬ、活潑なる遊嬉に、餘念も無く、日を重ぬめり、家に還りても、復習や宿題やで忙がしい、母は知らぬこと、ア、爲方が無い、學校の事はわからぬからとて、ありし世ならば、最早十三の染齒も濟みたれば、是からは、ちと、母の手つだひでもさせ、家事の見習でもと、曲げつけしものが、何時迄も幼兒にして置く間に、されども、猶婚嫁の期節は、存外に早く、高等女學校を卒はるや、卒はらぬに、既に、良緣あればとて、强ひて、人の妻と呼ばるゝ身となるに至りては、昨日までの、生活の有樣とは、がらりと變りて、俄かに、大人あしらひにせらるゝも、心苦しく、さりとて、今は如何はせん、妻と呼ばれし以上は

妻の行爲をせねばならぬ故、學校生活時代には、外國語や、數學の半分も骨折れざりし、否寧ろ、輕々に附し居りし、家政の書物を、急に繰り擴げて、杓子定木に行ひて見る家事經濟も、家内衛生も、思ひしよりもむつかしく、中には、其が、今の敎育受けた人のしかたか、さてさて痴鈍ましや、無學の我等よりもさりとは餘りに拙しと、姑母に小言いはるゝ口惜しさ、其でも、書物にある、斯う習ふたもの、私の方が無理ではあるまじとて、强ひて、實地に行ひて、見れば、矢張、姑母の言はるゝが定にて、此れ御覽成れと冷笑せられ、さては、師は僞りを敎へ給ひしか、書物は誠を書かぬものかとの疑ひも生ずるこそ笑止なれ、是ぞ、所謂、琴柱に膠するの過ちを追ふものにて、師の惡きにもあらず、書物の誠ならぬにもあらねど、其學ぶ人の拙きが故に、能く物事に的中せぬなり、彼の兵書を讀むもの、若し、兵書の儘を、戰時毎に行ひたらば、敵は、必らず、戰はざるに、其策を知りて、必定、大敗を取ることとなるべし、法は權を講ず可からず、機に臨みて、變に應ずるは、人其者の活動によるのみ、少婦の、學問を杓子定木に、實地に取り行ひて失敗するは、必竟、其注意の足らざると、經驗に乏しきとの過ちなり、されば、新たに、人の家に嫁ぎたる女子は、先づ『注意』と云ふ事を勉むるが肝要なり、注意、極めて周到なる時は、たとへ、不經驗にして、一度は過つことありとも、此度の過ちは、何によりて來たりしかと云ふことを、懇ろに熟慮して、其過ちを決して、再びせざるやうにし、人の爲して、惡かりしあとを戒め、營々として勉め孜々として、怠らざれば、他の三年にして積むべき經驗は、一年にして、必ず積るべし、さて、學問と實地と相應用して、違ふこと無くば、其學理にのみ、敏くて、實驗の乏しき者、實驗にのみたけて、學理を知らざる者どもの、片輪車の、行路難を歎くと異なりて、優に樂しみ行ひつゝも、其室家に宜しくてふ善名を得るに至らんこと難からじ、世に、猶經驗少なき少婦達が、最も勉むべきは、『注意』と『勤勉』との二つぞ

かし、ゆめ忽にして、學無きの老媼たちに笑はれ給ひそ。

女子の職分

女子商業學校學監　嘉悦孝子

年若うして都に出で、某女學校にて學ぶこと三年、卒業以後田舍なる故郷に歸りて、靜に家事にたづさはれる人の此頃の手紙に『かうあきらめましてからは、先生の常におつしやつた一人前のはたらきといふ事を繰返しまして、皆樣は華々しい活舞臺でのお働き、私は森蔭での働き、それもこれも道理は一つだとつまらない理屈をつけながら、番頭もしますし、書記もしますし、おかみさんにもなる、女中がはりもするといふ始末』と云ふことがありました、

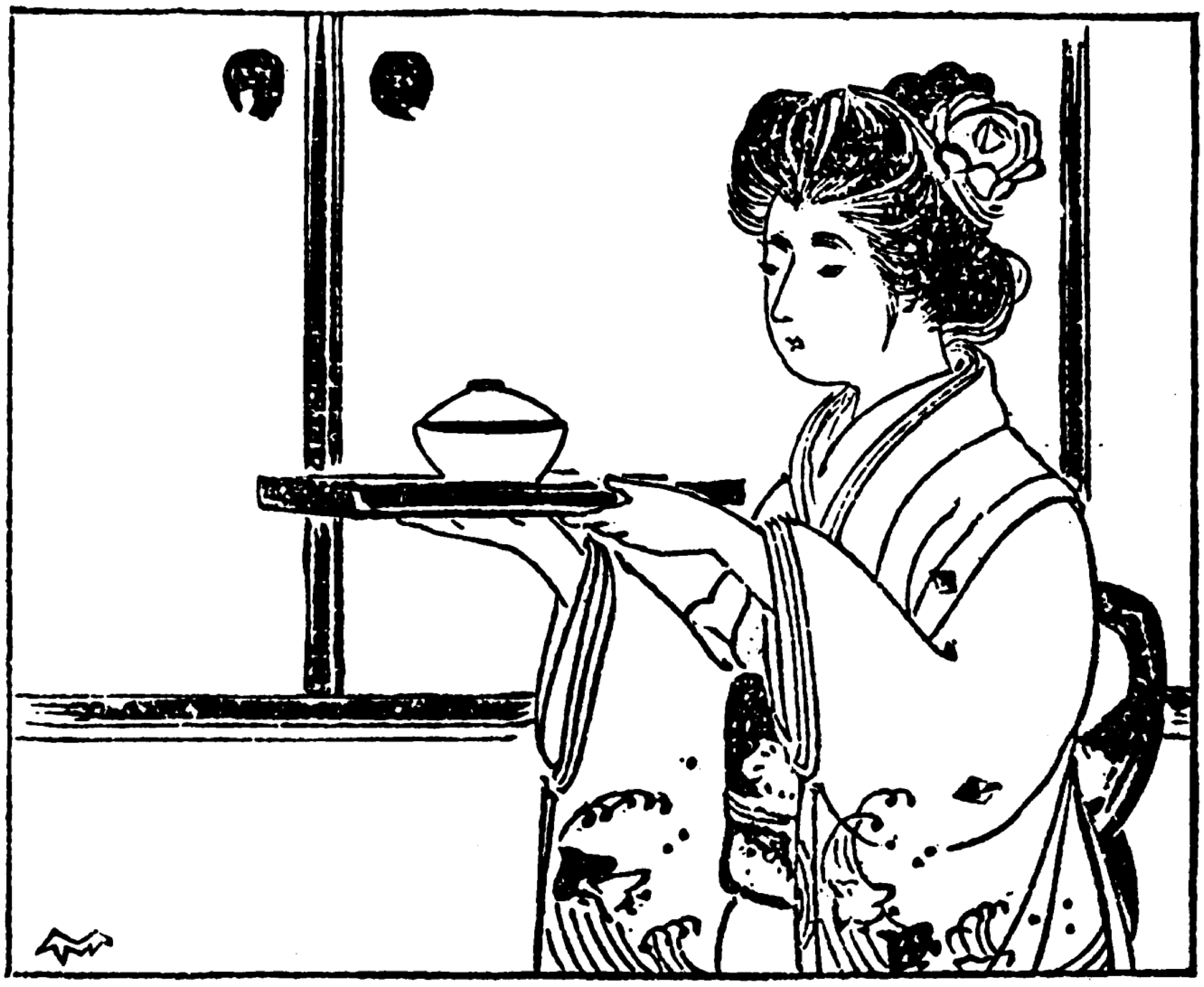
心には高尚なる理想をもちながら、身を一商店頭におくといふことが、すでに非凡の克己心に富めるものと云はなければなりませぬのに、まして安んじて森蔭の働き、それもこれも世に盡す人間の道はおなじだと決心して、自らの現在の業務を執るといふことが實に大に尊敬すべき事實であらうと信じます、

世には女學校を卒業して、意おごり、心たかぶるものが少くありません、先づ一般の傾向を考へて見ますれば、第一に少し學問すると家の事をするのがいやになる、第二に老人の云ふ事、することが氣にくはぬやうになる、第三に田舍の人は東京に住ひたがる、第四に自由結婚を主張する、第五に勞働を厭ふやうになる、等世人が所謂生意氣なる女子と變化してしまふものがあります、此る傾向は、實にふかく相戒めて行かねばならないと云ふのは無論のことであります、まして自分の地位に滿足して、日々の事を完うしやうとするものに至つては、曉天の星もたゞならぬありさまであります、

人の此世にある義務として、その責任を完うするといふより外はありません、その責任を完うするには、その地位に安んじて、自らの力のあらむ限りをつくして働くといふ意味であります、如何に天の寵児といへども、働かずして生活するほどの特權は與へられてゐません、もし働かずして生活するものありとすれば、人生の此上もない罪悪である以上は、顧みて無上の耻辱と云ふ事を自覺して、早晩皇天の冥罰を受くべきものたるを覺悟せねばなりませぬ、

既に人が働かねばならぬからは、其働は如何なる種類のものたるを選ぶの要なくたゞ働けば宜しい、働かば必ず酬ゐらるべきものであります、しかしながら、その働きは自己の地位に相應して、授けられたる業務を働くべきことであつて、その他のことは顧る必要はないのであります、此意味よりして、學者は學者たる職分教育家は教育家たるの職分、商人は商人たるの業務、職工でも八百屋でも肴屋でも、人各々授けられたる職責は、眞面目に働くといふことが肝要であつて、其職に高下はいさゝかもないものであることを知らねばなりませぬ、女

女藝十圖（其の一）饗膳



子ひとり職の高下があらう筈は更にないのです、

しかるに徒らに安樂の地位を求めんとして、女子がつねに金のある、姑のない、それで馬車があつてなどゝ、橫着極る考へをして、事行はれざるとき、失望の極、厭世家とやらになつてしまうものがあるのは眞に氣の毒な次第と云はねばなりませぬ、

なるほど安樂の位地は求めたいものである、その慾望はたれしもある事で、其慾望が必ずしも罪惡と云ふのではありませぬ、また苦痛の境をのがれて、安樂の境に入らうとするのも決して惡いことではありませぬ、しかし自らの責任をよそにして、自ら業務を怠りて安樂の境に入らうとするに至つては、極めて橫着なる仕打と云はねばなりませぬ、即ちそれが罪惡であることは申すまでもありますまい、

諸子は、安樂の境を求めるのでありませう、大にお求めなさい、たゞしかし今申すやうな自己の職分をまで打ちすてゝ、その境を求めやうとするのは罪惡でありますからは、他に更に安樂の境に入る順路を選ばねばなりませぬ、

其順路とは何か、大に苦痛をお嘗めなさい、正直にその苦境にゐて、其苦痛に服從しなさい、しからば安樂の境に入るのはもうすぐです、古人が云つた、若い時の苦勞は買つてもせよと云ふ言葉は、即ち安樂境に入るべき順路を敎へたものであります、

徒に名譽を追ひ、空想のとりことなつて晝夜煩悶の人とならうより、着實に森陰に居てお働きなさい、咲誇れる櫻の花は、春風にはかなく散りますが、ま芝がくれの菫の花は、靜にのどかなる生涯を送るのでは有ませんか、菫と此世に咲きいでたからは、ま芝隠れに其えならぬ香を世の人に匂はせておやりなさい。

来て見れば櫻かされのおのづから時にあひたる花の下陰

風なぎてかすめる海をゆく舟の帆はあげ乍動くともなし

家政に就て

戸板裁縫女學校々長　戸板關子

お話いたす前に、一寸お斷りして置きたいことは、元來家持に極下手な私が、家政に就て碌な事の言へる道理もなし、無論皆樣の御參考となる程の立派な意見のあるべき筈はございませんが。中川先生に挑撥られたと思ひまして、何か下らぬ事を申上るのでございます、決して人を敎へる積りでは無く、大方の敎を乞はんがためであります、

昔も今も東洋風の豪傑は、家人の生産を事とせずなど、家内の事は其方退けにし、妻子餓に泣くとも、一向頓着せぬといふ風でして、歷史家も暗に之を稱揚する樣な調子でありましたから、自ら英雄豪傑の候補者だと思つて居る人は、若い時から豪放不羈を故らに裝ひ、起居擧動も荒々しく、師父の訓戒に耳を傾けず、終には放蕩無賴となる者も數多いのであります、婦人にはまさか斯んな突飛な磊落家もありますまいが、併し封建時代のお大名風とか、文久錢を十で幾ら乎一寸勘定が分りにくいと云ふ樣子をしたり、又『宅の事はモー頓と人任せでございますよ』など云ふ人あれば、マアあなたはお仕合せだといふお追從者もある世の中ですから、まだ〳〵家政と云つて、其程大切に思はない人が澤山あらうと思ひます、尤も當今の學校では家政學として嚴かに敎へますから、此節の方は大概家政の何物たるを御存じ無い者はありますまいが、併し學校の家政學は、ほんの家持の案内に過ぎませんので、實地に當つて見ると、其は〳〵難しいことが不意に湧き出る者です、其を旨く處置するのが、立派な婦人と云ふのでせう、

全體家政の要旨は、家内の幸福を得んが爲と云ふことには、初から極つたことで、委しく言へば一家内の夫婦も年寄りも、子供も、下女も、下男も、殘らず無事息災で、衝突も無く、不平もなく、和樂して且樂

しく其日を送るやうにしたいのでありますから、其が爲には、思想も錬り、工夫もしなければなりますまい別に新しい事ではございませんが、先づ其二三を述べますれば、

第一　經濟

之は誰でも能く知つて居ることでありまして、放蕩家も經濟論は出來ますが、サア實際はとなると十中の七八までは旨く行きません、有りさうで無いのは金、無ささうで有るのは借金、皆是れ收支其道を誤り、其分を守らぬ所からでありませう、金森さんのお説が無くとも、勤儉貯蓄は誠に結構の事と思つて居りますが、今の我邦の驕奢の潮流に卷込まれて、不知不識物事が華美になりますのは、如何にも口惜いことであります、幾ら使つても竭きないと云ふ身代ならば何うかと云へば、收支の事は却つて嚴密で、之は事業費、之は生活費と、公私の區別を明かにし、釐毛錙銖も疎かにいたしません、恐れ多くも天下を知しめす一天萬乘の君でさへ、御儉素に渡らせられ、一年の御費用も豫算を超過せぬ樣になさると承る、其他皇族方でも妄りに金をお使ひなさることはなりません、況して中以下の者に至つては、能く〳〵心せねばならぬことでございます、一家の榮ゆるも衰ふるも、其主婦たるものゝ經濟の取り方、匙加減に因るものですから、入るを計つて出すことを考へ、又其上には不慮の出來事にも備へざるべからず、然らざる時は忽ち負債を生じ、一家機關の運轉忽ち止り、一歩滑ると一家破滅となることもある、油斷のならぬことであります、子女に對しても、多く與へれば贅澤となり、細か過ぎれば陋しくなる、出すべき金は多額でも喜んで出し、出すべからざる金は少くとも出さぬ樣にすべきである、其を少しだと譯も無く出し、多いと立派な事にも澁々する、斯樣な風を子供に見習しては惡いと思ひます、私も努めて奢侈に流れず、吝嗇に陷らぬやうにして居りますが、どうも難儀でございます、

第二　衛生

家内打揃つて健全で、今年は醫者の藥一服も飲まなかつたといふ樣なことは誠に目出度ことです、私方一同は貧血性に生れて居りますやうですが、身體は仕合せに達者でござゐます、私が斯う云ふぞんざいな性分ですから、衛生の何のとそれ程氣附きませんし、喧しくも申しませんでも、可成出來るだけ自然即ち放任主義を取つて居ります、此は單り衛生ばかりでは無く、大概の事は此主義で押通して居ります、之が善か惡いか知りませんが、子供の體も丈夫に發育し、顏色なども赤黑く、女子としては見つとも無い位です衣服なども年寄がありますと、冬季には無闇に厚着をさせ、丸で綿や眞綿で包んでしまいますが、之も困ります、餘り大切にし過ぎては害になります、と云ふて粗末には何出來ません、中庸宜きを得て行くことが必要です、マア家事衛生の主なる所は、家屋敷を能く掃除し、身體衣服を清淨にし、取分臺所の如き、表立たぬ汚れ易き場所を清潔にするが肝要です、其に附ては屋敷の位置、家屋の建築に最も注意が入ります、又飲食物も三度三度の事だからと云ふて、粗略には出來ません、世間には酒を飲み過ぎて苦しみ、甘い物に中てられて胃を煩ふ醫者もある、又衣食住に裕かな人が却て多病なのも、一は不規律でもありませうが、其實身體の持方を知らぬからのことです、畏くも我が　皇帝陛下が、朝早く御寐所を出でさせられ御學問所に於て萬機を知し召し給ふことを思ふごとに、我等臣民の遊惰極まつて居ることを耻かしく存じます、夜は遲く寐ね、朝は日三竿の高さに昇るまで眠り、旨い物を喰べて樂をして居る、之でどうして身體の健全が保たれませう、人は働くべく生れて居ります、樂な仕事の人は充分運動するが善いのです、貴婦人令孃の色青ざめて弱々しいのも、適度の運動が無いからです、一家の夫婦、兒童の母は此の好習慣を家庭に滲込ませなければなりません、

第三　家風

他家の門前を過ぎて、其の家の中に怒罵る聲が聞え、女子の高笑ひの聲が聞えたりしますと、其丈で其家庭の猥らなことが分ります、又三味線の音がすると、何だか下等の樣に感じ、琴を調べて居れば奥ゆかしく、ピアノなれば一層高尚に人の耳朶に觸れます、猶進んで其門を跨ぎ、其家に入りて見る時は、其家風其主婦の意氣腕前、あらましは分るものです、ですから人の妻となり、兒童の母となり、僕婢の主人となることは隨分困難なものです、私などは此點にも暢氣で、例の放任主義で遣つて居りまして、家の者にも子供にも可成干渉しませんが、別に惡い厭な癖も着きませんやうです、誰と申す譯ではありませんが、人の噂さを聞いて見ますと、宗教家の息子に放蕩者が出來、嬌風家の娘に道樂者が出來たりするのは、之は餘りいぢ／＼と世話を燒き嚴密すぎるから、其反動の結果親の面皮に泥を塗り、他人をも困らす樣なことになるだらうと思ひます、私は其だから惡いこととまでも捨置くのではありませんが、箸の上げ下しにまでも世話を燒くことは致しません、其方が結句善いやうです、朝家族一團となつて、聖書を讀んでも又はお經を讀んでも　神に祈りを献げても佛を念じても、親が苛々しては何にもなりませぬ、

第四　娯樂

一家の中に老幼男女打混じて居りますが、之が各自に片附いて澄し込んで居ては、家庭は如何にも寂寥たる者ですから、家内中の娯樂と云ふことを考へ出さなければなりません、之も家政を取る者の忘れてならぬことゝ思ひます、其所で子供を大人とすることは出來ませんから、大人が子供と成つて偕に連れ立つて遊び戯れるのです、西洋人の家庭には家族遊戯の機械が完備して居りまして、殊に晩餐後などは皆な面白さうに遊びます、日本の中以上では主人は外で晩餐を喰べるに極つて居る、たまさか家に在つても妻子と

食卓を共にしない、之が第一善くない事、一家内は止むを得ざる事の外は、可成揃つて食事をすること。妻は多少割烹の心得もあつて家族の口に適した物を具へる、之は良人の足を止める策ともなり、老幼を喜ばす策ともなる、家庭の樂の多くは食卓に在るものです、それを地震、雷、火事阿爺と、阿爺は怒鳴つたり叱つたりするが商賣、母親は愚痴を溢すが稼業の如く、子供に思はれるのも實に辛いことではありませんか、今日の所ではトテモ妻や眷族と遊び戯るゝなどは思ひも寄らぬことの如くであるが、斯樣な家庭には温き愛情が働いて居りませんから、自然と家内中がいら／＼してまいります、故に兩親は子供に對して巡査や裁判官の如く怖れられるのでは無く、其慈愛に懷く樣にしなければなりますまい、家内の長者は皆な一致して幼者を樂ませる義務がありますが、主婦たる者は特に此等に付いての好趣味を以て、愉快なる美しき家庭に子供を養育しなければなりますまい、是家道長久の基であります

家事經濟

星常子

人並の生活をしたいと云ふ事は、誰も望むところであります、さうして其目的を達する爲には、いろ／＼の方法を求めねばなりません、かゝる方法を求める事を、家事經濟と申します、言を換へて申しますれば一家族の日常の需要を滿足させることが、家事經濟の要であります、

其需要といふは如何なるものであるかといふと、

第一は其家族が生活をするに、一日もなくてならぬもので、これが無ければ死んでしまはねばならぬものであります、即ち食物は其最も必要のものでありまして、之に次いでは衣服、次は住居であります、

いろは金言

美しき言葉は斯の如く多し、せめては其一つにても行へ、

◎い　一度話さんと欲せば二度考ふべし、
如何に廉なるも無用の物は高價なり、
◎ろ　勞苦多なければ希望なし、
勞働を除けば天車空し、
◎は　早寢早起は人を健康に、富貴に、賢明に成す、
馬鹿の眞似を爲し能ふものは、怜悧物也、
◎に　人を見て法を說け、
二兎を追ふものは一兎を得ず、
◎ほ　庖厨を小くすれば家產を大きくす、
◎へ　勉強は幸福の母なり、
◎と　友は年上を擇べ、
時を使用するに人ならば時に缺乏せず、
頓智は心の電光なり、
富爲金を蓄ゐるも、一圓の身代の時を忘るゝ勿れ、
富は之を所持するものに屬せず、寧ろ之を樂むものに歸着す、
貪慾を思はんより足る事を知れ、
◎ち　珍膳も每日食へば飽、

癡人は賢人が七年も考へずば答ふること能はざる事を半時の間に問ひ得、
◎り　立身を成さんと欲せば、苟も無常の心を起す勿れ、
◎ぬ　盜人に鑰、
◎る　類を以てあつまる、
◎を　女の顏は女の運命なり、
◎わ　我家は我城なり、
◎か　艱難に逢はざれば自己を知らず、
考へ過さば事を成さず、
金は身體の鏡なり、
佳妻は良夫をつくる、
川に從つて行けば海に達せん、
學問は何時にても遲しといふ事勿れ、
◎よ　世には純樂もなし、又純苦もなし、
◎た　大才は大忍耐なり、
貨逆つて入るものは逆つて出づ、
多忙なる讀者は善讀者にあらず、
◎れ　良藥は口に苦し、
◎そ　孫は笛をふく、

◎つ　夙に起き早く眠るは、人をして富と健康と智識とを得せしむる所以なり、
◎ね　年功は書籍よりも知ること多し、
熱愛は冷淡となる、
熱誠を笑ふは熱誠を失ひたるなり、
猫去りて鼠あらず、
◎な　波靜かなる海にては、誰も水先になることを得、
何事に限らず反覆して又反覆すべし、
怠惰物は呼吸すれども生活せず、
汝若し自己の欲する忠僕を得んと欲せば、先づ汝自ら忠實ならざるべからず、
◎ら　懶惰なるものは緩漫に步行し遂に貧乏神に追付かる、
◎む　無益の事には決して財囊の口を開くべからず、
◎う　運命に乘ずるを知る者は必ず榮ゆ、
運命を笑ふ時には利益をとれ、
◎ゐ　爲政者は民の心を知れ、
◎の　登らざる人は落つることなし、

◎お　行ふに遠かなるべく約するに遲かるべし、

己れの技倆を隱し得るは、大なる技倆なり

己れの慾望に向つて拒絶せよ、

己れを知れ、

◎く　過去におもんばかり、現在に働き、未來にたのしむ、

空虛なる器は大響を發す、

悔悟は人間の美德なり、

◎や　約束は守らざれば役に立たず、

◎ま　蒔かぬ種は生へぬ、

◎け　賢人に助言し得る者は痴人のみ、

決心の乏しきは才智のなきものと同樣也、

言論を以て人に勝たんと欲せば、名辯なるべからず、

儉約は安靜の基にして、又仁惠の根元也、

教育ある人は將來の爲に活く、

◎ふ　淵に臨んで魚を羨まんより、退いて網を結ぶに如かず、

不良の安逸は死よりも耻なり、

分に安んじて福を養へ、

◎こ　今日の中に勤勞せよ、盖し汝は明日如何なる障害に接するや計り難し、

◎こ　今日の一日は明日の二日に價す、

功名の道は才能の人に用ひるべし、

事を先にして得ることを後にせよ、

好運命は少くとも一度は人を訪ふ物也、

乞はるゝまでは助言を與ふる事勿れ、

◎え　英才は一種の才にあらず、普通の才の奮發したるものなり、

◎て　點滴も間斷なく落つる時は遂に石を穿つ、

天は萬物を人に與へずして其働きに與ふ、

敵なきものは味方もなし、

◎あ　闇黑の日も翌日たなれば變ず、

當つて碎けよ、

暗記は智識にあらず、

暗夜の中には無神論者少し、

愛嬌は多辯にあらず、

◎き　危險は人を富まさゞれども賢くす、

希望なければ熱心なし、

逆境は人を玉にす、

金錢を愛する心は金錢を增すに從つていよ〳〵增す、

◎ゆ　弓に二條の弦を備ふべし、

◎め　名聞を求むるよりは實用を養へ、

◎み　耳を廣くして舌をみぢかくせよ、

濫りに親む勿れ、

◎し　失望は愚者の斷案なり、

時間は資本なり、

書状は成るべく短く書け、返事は成るべく早く出せ、

慈愛の罪は白葉ほどに大ならず、

◎ゑ　笑の中に劍あり、

◎ひ　美名は暗中に光輝を放つ、

貧者には近親なし、

人の運の善惡は妻にあり、

貧する時の友人は眞の友人なり、

久しき時を費して得たる物は久しく保つ、

人は寡言に悔ひず多辯に悔ゆ、

火と水とはよき從僕なれども惡き主人也、

◎も　尤美なる果實は熟すると尤遲し、

目的は手段を正當にす、

◎せ　拙劣の交際は無沙汰なり、

節儉を守らんよりは寧ろ奢侈の心を節儉の

一錢は儲けたる一錢なり、

世界は各個人の教養する爲に存す、

◎す　鋤を取るものは野人にあらず、萬事を野卑ならしむるもの野人なり、

此需要は人と生れた以上は、身分の高下貧富の區別に拘はらず、なければならぬものでありまして、必要缺くべからざる需要であります、

第二其家の品位を相當に維持する爲に必要の需要で、第一の需要ほど、各人にとつて必要のものではありませんが、第一の需要を充して餘りある人は、此需要も亦必要のものであります、假令衣服にしても、第一の需要を充すだけならば、たゞ寒暑を防ぐ事の出來るものでさへあればよろしいけれども、品位を保つ爲には、禮服も一通は備へて置かねばなりません、其他食物にしても、住居にしても、相應の身分ある人は、それ相應にして、社會に擯斥される事もなく、人情に悖る事もない様にせねばなりません、世間では隨分富んで居る人でも、貧しい時に住んで居つた其儘の家に、粗衣粗食に甘んじて、人と交をもせず、たゞ金錢を溜めるばかりを能事とする人が往々ありますが、之は實に金錢の何物たるかを知らぬ人と云つてよろしいのであります、又之に反して、第一の需要を後廻しにして、第二の需要を先にする人も亦中々多くあります、世に所謂外觀家が隨分ありまして、此等の人は身體の營養を缺いでも、美しい衣服を着たいとか、立派な家に住みたいとか、又借金をしてまでも、己より身分の高い人と對等の交際をしたりする人は隨分ありますが、之は守錢奴よりは、更に一層宜しくない人であります、

第三家族の快樂や、奢侈の爲に入用のもので、遊覽の費用とか、裝飾品購入の費用の様なものであります此種の需要は、生活に必要のものでありませんけれども、娯樂費の様なものは、ある程度までは生活を完全にする爲には、あつた方が宜しいのであります、併しこれは最も必要の急でないものでありまして、第一第二の需要を充す事が出來て、餘裕あるものゝみに限られるもので、生活向も不十分勝であるのに、無暗に此種の需要を充す事は、決してしてはならぬ事であります、

以上述べました需要を充たし、完全な生活をするには、何事もせずして居ては出來ません、力の能ふ限り勞働をして財を得る工夫をしなければなりません、而して普通此財を得ることは、一家の中にありて、主人が專らする事でありますが、併し一家の内のものは、唯主人に依賴して、老人はまだ體力も衰へないのに、隱居してしまつて、佛いぢりや茶を飲む事にのみ毎日を暮したり、主婦は終日箱火鉢の前に座つて、小說に耽つたりするのは、實に宜しくない事で、力の能ふ限りは、老人と雖、主婦と雖、財を得る事をつとめねばなりません、主人にのみ依賴するは、道德上から申しても宜しくない事ですが、實際利害の上から申しても不利であります、世には往々主人の歿後俄に收入の道を失つて、周章狼狽貧困に陷つて、如何ともする事の出來ないものがありますが、これは實に自業自得といはなければなりません、

かくして一家の收入になつた財は、一家の需要を充す爲に、早晩支出せられ、消費せられるものであります、此支出を主るものは、專ら主婦でありますから、主婦は其消費の方法をよく研究せねばなりません、消費の方法の良否は、實に其家をして富有ならしめ、又貧窮ならしめるものであります、

消費の種類は二あります、一は生產的消費と申して、財を費した代りに其に相當した新しい財が出來る事でありまして、假令ば財を費して肉を買ふ時、よく其肉の質をしらべてよき物を買へば、其によつて多くの滋養分を家族の體に取る事が出來、即ち其費した財は其價を損せずして他の財を購ひ得ましたから、即ち生產的消費でありますが、同じ價を拂つて腐敗した肉を買ふ時は、食用とならず、全く其財を捨たと同じで、此樣な消費の方法を不生產的消費と申します、消費は生產的でなければなりません事は申すまでもないことですが、前例の如きは少しく注意すれば、誰にも分りますから、其損害を受ることもありませんが、不知不識の間に不生產的消費をして居ることは、實に度々あることで、殊に婦人にはあり勝のことで

あります、假令ば買物をする時にも、其物の必要を幾度も感じて、さて其物がどうしてもなければ用が辨じないといふ事になつて、初めてそれを買入たる時は、其物は實に其家にとつて重寶な必要の品でありますから、此の樣な消費の仕方は、生産的でありますが、呉服店の賣出などの時は、實に立錐の地もない程に、夫人や令孃が集りまして、敢て其必要もないのに、これは安いから買つて置くとか、これは柄がよいから買て置く、却つて持ち切れぬ程も買ひ込んで、さあ歸つて見ると、其時の用をするものは殆んどなく徒に簞笥の中に藏ひ置き、二年も三年も立て、柄のよかつたと思つたものも其時分には流行おくれと成り、安いと思つたものも金利を積れば却つて正價よりも高くなつたりして居ることも往々ありますが、これは不生産的消費に屬した消費の方法ですから、こんな買ひ方はよろしくないことであります、又來客の爲に、五人前の座蒲團を備へて置いた所が、ある時偶々五人の來客があつて困つたから、直ぐに又五人前の座蒲團を增した、しかし其後絕て五人以上の御客が一度にあつた事はないといふやうな場合には、やはり不生産的消費に屬した消費の方法であります、一年の中に幾度も〱同樣の不足を感じたらば、そこで初めて買入ますれば、生産的消費の方法であるといつて宜しいのであります、

前に申ましたのは消費の方法でありますが、一般に支出は收入に伴はなければならぬといふ事は、經濟の要點で、支出には必ず一定の制限を與へなければなりません、若し浪費過多に失する時は、一家は貧困に陷り、家族は悲慘の境遇に沈まねばなりません、さうして其制限は衣食住等の必要の需要を減じて、其身體の健康を害するに至らず、又各人地位相當の裝飾を缺き、以て社會から擯斥されることもなく、人情にも悖らず、交際の禮も缺かず、必要の諸道具を備へ、心身發達の道を塞がぬ樣にしなければなりません、それ故に常に收入と支出との釣合を計つて、前に申しました生命を保つに、必要な需要を充すことを先に

し、次に地位を保つ爲にする需要、次に愉快の爲に使用する支出に及ぼす樣にし、力めて浪費を省いて貯蓄をしなければなりません、貯蓄は實に家事經濟を巧にする爲に必要の條件で、貯蓄をして置けば、第一に其家族の地位を安全確乎たらしめ、第二家族の幸福を益增進せしめ、第三には放逸を防止して、風俗を醇良にします、此樣に貯蓄は唯一家の爲ばかりでなく、社會の爲にもなるものであります、卽ち各人の餘財は、積で社會の富を增さしめるもので、銀行は其餘財を預つて、社會の經濟を進め、又は確實な公債を買入れて、政府に其事業をする資本を供給します、

節儉貯蓄は善事でありますけれども、世には所謂吝嗇といふものがあつて、義理を辨へず、情誼を顧みず、唯一身の爲に金錢を愛する人がありますが、これは大に經濟の趣旨に反するものであります、よく將來に於て利益を納め得る支出ならば、元より之を出すことを惜んではなりません、又人と交際し、人を救ひ、慈善事業、公共事業などには、身分相當の支出をしなければなりません、これをせぬものは唯金錢ばかり重んじて、貯蓄するものであります、然しこれでも、また多少は社會に利益を與へて居ります、卽ち其貯蓄した金錢は、社會に流通して、有用のものになり、又公債證書の樣なものになつて、有用な事業費にあてられて居ますから、其人の目的は貯蓄にありますけれども、間接には社會に利益を與へて居るものであります、之に反して貯蓄もせず、猥りに浪費する人は、經濟上排斥すべきもので、收支償はぬ樣になつて負債をし、段々其が增して、遂に其家の滅亡を招くは勿論の事社會の風俗を惡くしたり、物價を高くしたりして、一も取る所がありません、

かにかくに物は思はず飛騨人のうつ墨繩の唯一みちに

花紅葉あだ比べして過る世に衒はぬ松そのどけかりける

日常の信義

遠山稲子

近頃世間で、大に家庭教育に注意する様に成つたのは、誠に悦ぶべきことでありますが、未だ〳〵能く穿鑿して見ると、人の心付かぬ所に、大いに注意を要する點がありはせぬかと思ひます、夫れは何であるかと云ふと、日常の信義であつて、隨分世間には、家庭教育などに心を用ひて居る人でも、動もすると、信義に缺げた事を子供の前で云つたり爲たりする事がある、此は知らず識らずなすのもありませうが、兒童教育に容易ならぬ影響を及ぼすものであります、其一例を擧げて見ますれば、

先づ或家に小供がある、其所へ又他から小供の來客などがあつた時分に、其客分たる小供の容貌が、實は佳くなくても、其目前では、マア好いお子さんだとか、美麗しいとか云つて、お世辭に褒めておきながら其小供が還つたあとで、彼の子は容貌の惡い子だとか、醜い子だなど丶云ふ様な事を親が申したなら、其家の小供は何と思ふでありませうか、曩には好いと云つて褒めて置きながら、今更其人の還つた後で、之を醜いと云つたなら、忽ち其小供は『ア丶世の中と云ふものは、斯く表裏が無ければならぬものであるか』と云ふ事を感ずるであらふと思ふ、其他他家から物を貰つた時などにも、先方の人の前では、これは結構な品であると云つて悦で見せて置きながら、後から、斯んな嫌なものを呉れたなど丶云つたり、又人の來訪を受けた場合に實は休息して居るのでも、只今己むを得ない用を仕掛けて居るから會はれないなど丶云ふ樣な事は、隨分世間には致して居る家庭も有るさうで御座います、尤も今日では、社會の有樣が皆斯うなつて居るのであるから、或る場合には、どうしても、空しきお世辭を云はなければ、工合の惡いやうな事が往々あるのですから、仕方が無いと云へば、夫れ迄であるが、併しこれを、相互ひに勉めて正直

に言ひ合ふやうにしたら却つて、互ひに心地も宜しからふと思ふ、斯う云ふ事も、一人が心付、二人が申合せて行つて行くうちには、必ず社會の風習を變更させる事が出來ない事はあるまいと思ひます、西洋諸國では、文明に赴くに從つて、愈々信義を重んずる樣に成つて行くにも拘はらず、吾が國では、開けるに從つて、益々輕薄に赴く樣であると云ふ事を、或人が申されましたが、之はつまり、未だ眞の文明では無い證據であらふと思ひます、其例を擧げますれば、文明の民は、假ひ、土方人足の樣な下等な人間でも、信義と云ふ事を重んじて居るから、決して監督者が無く止ても何でも、惰けると云ふ樣な事は無い、つまり自分は、何程の金を貰つて居るから、其金に對する丈の仕事は必ず仕なければ成らぬと云ふ覺悟をちやんと持つて居る、然るに、此信義と云ふ事を重んじない國の人は、相當な學問のある人でも、つまらぬちいさな利己心から、人の信用を失つて、夫が爲に、仕掛けた仕事も成就せぬやうになつて、切角の計畫も畫餠に歸して仕舞ふやうな事になるのであります、つまり其原因は、前申した樣な、親の言行を見習ひ、聞覺えて、自然に夫が天性に成つて居るから、遂には表裏な人間に成つて、人の信用を落すやうに成るのです、夫故どうか、小供をお育に成る家では、家内中の者の頭の中から虛僞と云ふ事を全然去て仕舞つて、内々では猶更の事、他人に對しても、苟くも虛言は吐かぬと云ふ覺悟を持たれん事を希望いたします、

俚諺對照

人は一代名は末代　大行は小謹を顧みず　人の口おそろし　大海を手にてせく

人に一癖　大海は細流を擇ばず　人を鏡とせよ　太陽輝く所に月見えず

人の口には戸がたてられぬ　大は小を兼ぬ　人の噂も七十五日　大事の前の小事

裁縫に就て

東京裁縫女學校教頭 渡邊 薫

近頃は餘程、女子の實業といふことが重視せらるゝやうになりまして、年々文部省の裁縫科檢定試驗に應ずるものが、幾百といふ多人數の樣に聞いて居りますが、中に少し位、讀書が出來る爲に合格をして實地裁縫の技術が一向に出來ないのがあるし、又技術が出來ても敎授法の一向出來ないのもあるやうです、裁縫は他の學科と違つて、實地に重きを置かないと、敎授することが出來ません、

裁縫と申しまするは、布帛類を裁斷り、縫合せて衣服の體裁を備へしむる仕事でありまして、昔は敎授法の發達して居りませぬ所から、袴、帶、羽織などの裁縫は、すべて男子の手によつて出來たもので、女子はたゞ通常着の仕立に補綴位のことでありましたが、近來は袴羽織はもとより、洋服に至る迄、女子の手に引受けられるやうになりましたのは、一家經濟の爲に誠に欣ぶべきことであります、さればよく斯道を研究會得して、大に家政の助けとなるやうにしたいものであります、

裁縫の基本は運針でありまして、この運針の如何によつて、遲速は申すまでもなく、仕立上りの出來不出來も一に運針の手際によるのであります、さればまづこの運針法を熟練せねばなりませぬ、それには先づ二三尺の木綿切を求め、幅を二つに折り、指環を嵌め、針を持ち、兩手にて切を目八分に捧げ、指先のみを動かさず、兩手を肩より上下しながら、初のうちは針の出し方、針道の行き方などに構はず、片ばしより縫ひ行き、一線終れば、また一線といふやうに、次第々々、縱線橫線と縫うて居るうちに、針を持つ事が樂になる、それから針の目を密かにし

針道を正しくすることに注意して、それを古今集千篇歌千首といふやうに、縫返し〳〵して、段々運針に申分がないやうに成つて、初めて實物に取かゝるのであります、併し唯雜巾を拵へるばかりの運針では飽きが來ますが、それに糸の色をかへて、種々の模様を縫ふ等の興味をも考へ、成るべくこの運針の熟練に多く忍耐を要したいと思ひます、

それから縫方が、實物に當つて參りますと、縫ふ物縫ふ形、それが單純なやうでなか〳〵さうでありません、用具も針、指輪、尺度、箆、糸巻、掛針又は桁臺、裁板、裁庖丁、鏝、火熨斗、袂形、褄形、針箱等ありますが、その中の針にしても絹布と綿布とで大差があり、縫ふ場所によつて數種ありまして、隨つて縫方もいろ〳〵工夫があるのであります、返し縫であるとか、千鳥縫であるとか、種々手際を要することがあります、それから補綴の注意、衣服の糸止め、寸尺の取方、縫方の順序、解方の順序等大いに研究を要することがあります、それを一々お話すれば限りある紙面に其の一部分をも盡すことが出來ませぬ、茲にはたゞ運針の基本を多く作らんことを注文するに止めて置きます、

編物に就て

共立女子職業學校教師　豐原繁尾

日本で編物が流行し初めたのは、明治八九年の頃と思ひます、毛糸細工と稱して、帽子でありますとか手ぶくろでありますとか、ほんの三四品位のものでありました、私は十四年頃に、別に編物を學んで、それで教師をしやうの、職業にしやうのと云ふやうな考もなく、たゞ〳〵子供等の爲にも覺えて居れば便利であらうと思ひましたから、見やう見まねの自己流で、編物といふものに、初めて手を出して見ました、所がその時は編棒などの完全なものが東京には來て居りませぬので、横濱から取寄せたものでありましたが、價は今の五倍もしました、そして舶來

製のでも今のに比べると甚だ劣つたものでありました、さて段々に自已流にもせよ、一つ二つ編めるやうになりましたから、そこには趣味も出來て、これは家政を治める上にも、大に覺えて置いて宜しいものであるといふ考が起りましたから、十九年に、今度は本式に研究したいと思ひまして、獨逸人の山崎ラウラといふ人に就て稽古をしました、獨逸といふ國は手仕事の發達した所でありますから、編物は獨逸が世界中第一の手際を示して居ります、それで編物には、獨逸流などいふ流名さへある位であります

この當時はこの編物が非常に流行しましたが、飽易い日本人の事でありますから、廿四五年の頃には、この編物が一時下火になりました、職業學校の生徒でも編物科の生徒が五六十名に過ぎない位でありました、越えて二三年いたしますると、日清の戰役が起りましたので、清國に從軍する方々が、同地の寒い所から毛糸細工の肌着胴着などが入用になる、隨つて此等の細工、即ち編物がそれにつれて發達し初め、種々の工夫も始まりまして、今では女子に編物の出來ぬのは、何でありますか物を忘れたやうな氣がするやうになりました、自然職業學校の生徒も、此科の生徒が二百二三十名もある有樣となりました

編物は五本の金屬製の編棒で編みますのが正式で、ヘーケルも使用しますが、ヘーケルを主として用うるのは變則であります、金屬製の編棒も英吉利などでは四本のを用ひまして、自然糸の掛けやうも違ひます、併し競爭の場合などには、英國流より獨逸式の方が勝利を占めて居るやうであります、

一寸考へますと、五本の金屬製の編棒より、ヘーケルの方が使ひよいやうでありますが、馴れては矢張本式だけありまして、五本の編棒の方が仕事も早く手際もよろしいのであります、新聞をよみながら又話しながらでも、靴下の一足や、手袋の一つ位は造作なく出來上ります、

そこで稽古の順序はと申せば、はじめは靴下位を精出して熟練し、手が利くやうになりまして手袋など

を編み、その外よだれ掛でありますとか、財布のやうなものでありますとか、種々それに似よつたものを覺え、次に編上つたものに形の出るもの、模樣の現はるゝもの等、飾りをつける事を覺えるのでありますが、かういふ細工になりますとヘーケルをも用ひるのであります、いよ／＼上達して參りますと、種々の器械を用ひて、手數のかゝる仕事になるのであります、

編物に用ゐる材料は、何の糸でも差支ないのでありますが、通例毛糸、スコッチ、絹糸、レース、木綿糸、アイスール、ダチヨウ糸等であります、

十藝十圖（其の二）繪畫



アイスール、ダチヨウ糸は帽子、肩掛などに用ひまして、肉につける物には使ひませぬ、アイスールは春先のすこし溫くなりかけた時の肩掛に編む糸で、當今は和製のもありますが、舶來品のやうに質がよくないので手奇麗にあがりませぬ、又ダチヨウ糸は近來大流行でありまして、寒さの時分には、この肩掛が目に付くやうでありますが、これは近來和製の糸が出來るやうになつたからでおらうと思ひます、舶來のは十五六年頃日本に參り初めました、これも舶來品のは、糸の性質がよろしう

ございますから、フーワリと奇麗に手際よく、出來榮が和製のとは兎ても比べ物にはなりません、

造花に就て

共立女子職業學校教師　金子支江子

造花の術は、いつ頃始まつたか、茶道など〻同じやうに足利時代に始まり、徳川時代に發達したものと思ひます、これを學校の科目として授けるやうになりましたのは、明治十九年、職業學校に設けられたのが始まりであらうと思ひます、

それから廿五六年頃には造花が盛んに行はれて、どし〳〵海外に輸出するやうになりました、そこで此造花を致しまするのは、高貴の人の慰みとしても、趣味もあり、奇麗な仕事でありますから、その品格を下げるといふこともなく脳のわるい人には、常住四季の花を手の先で拵へるのでありますから、愉快に感じられまするし、亦身分の卑い人は内職にもなりますから、これは女子の必ず學んで置くべきものとも思はれます、故に近來は學校でも此志願者が多く、世間一般に發達するやうになり、需用も次第に多くなるやうであります、

造花は、實物なり、畫なりがすぐ手本になるのでありますから、大體に就て造花の方式を覺えますればその人々の趣向によつて、なか〳〵面白いものが出來ます、

材料は、絖、天鵞絨、寒冷紗、絹、おや絹、竹紙等でありまして、牡丹の如く實物に艶のあるものは絖を用ひ、花にあつみのあるなでしこの如きものは天鵞絨、薔薇の如く艶のないものは寒冷紗、薄くて艶のある柘榴の如きものは絹、椿などは竹紙、帽子の飾りに用ふる薔薇の如きものは綾絹を用ひます、

又葉は西洋花は天鵞絨や絖を用うるものもございますが、日本の草花のは寒冷紗に限つて居ります、葉に艶の出ぬには困りますが、これは外國から器械を取よせさへすれば出來ることであります、

造花の術の發達しました國は佛蘭西で、次は英吉利獨逸等でありますが、亞米利加などでも大に發達はして居りますが、技術として稽古をしまするには、少し考へ物であります、それは日本の方が進んで居りますからで、この亞米利加は、日本より輸出する第一の顧客地であります、

造花に使ひまする色は十七種ばかりあり、花の蕋にはカタン糸、レース糸、又毛糸の時もあります、花粉は、たとへば切島には鍋炭に糠を交せて拵へるといふ風に、いろ〳〵拵へ方がありますが、今ではチャンと世話のないやうに、造花屋に何の花にはどれときまつて出來て居ります、

稽古の順序は單瓣の見易いものから始まりまして、きりしまのやうなものを五十種ばかり拵へ、大分熟練して來まして、忘れな草、薔薇のやうなものになり、それをまた五十種ばかり拵へられるやうになりますと、南天、松、牡丹のやうなむつかしいものになるのであります、

刺繍に就て

共立女子職業學校教師　木村仲子

刺繍は最も優美な技術で、婦人の手業には至極適してゐるものと思ひます。刺繍と離るゝことの出來ない關係を持つてゐますのは繪畫で、運筆の法は固より彩色は最も肝要であります。早い比喩が、光琳なり應擧なりの繪を下繪として刺繍いたします場合に繪畫の素養がある人と、ない人とは、餘程の相違で素養のある人のは何處となく落付きがあつて一點批難する處がありません、夫れ故に刺繍を學ばんと志す人は先づ繪畫に着眼なさるのが宜しうございます夫れで先づ下繪を寫します、此下繪を寫すことは、刺繍を學ぶ初歩で、充分なる習得を要します。

繡方の種類は、紋繡、平繡、松葉ざし、相良繡、鹿子繡、星繡、絽金繡、金糸繡、毛刺繡、肉入繡、より糸刺繡、すがら繡、さし繡、兩面繡、金糸肉入繡

牛鳥肉と魚介の含蓄要素

品名	水分	蛋白質	脂肪	鹽類
牛肉	七一、六〇	二〇、六二	六、四四	一、三九
馬肉	七三、六〇	二四、四九	〇、七二	一、一七
豚肉	五九、七九	一七、二三	二三、〇五	〇、九一
鷄肉	七三、一四	一九、一〇	五、三八	一、一四
鯛	七七、九〇	一七、六七	三、〇七	一、三八
鰹	七二、七三	二五、〇六	一、二一	一、〇〇
鰹節	一四、二七	七五、六〇	五、一一	五、〇二
鮪	七一、七五	一五、七九	一〇、六四	一、八二
鰯	七〇、二五	二一、三九	六、七二	一、六四
鯖	七二、五〇	二一、一〇	四、四八	一、五二
比目魚	七九、二五	一九、一六	〇、四七	一、一二
鰤	七五、四三	二一、九六	一、四五	一、一六
鰈	七五、八八	二一、九三	〇、七四	一、四五
鯵	七六、七二	二一、〇〇	〇、七五	一、五三
鰆	七七、七八	一九、二一	一、六六	一、五三
魴鮄	七七、三八	一八、一一	三、三〇	一、二〇
白魚	七九、三九	一八、七四	〇、三〇	一、五八
鱸	七七、七〇	一八、六二	二、五九	一、〇九
鰶	七三、三四	二〇、四三	四、七八	一、四五
鱚	七九、九九	一八、〇九	〇、六〇	一、三二
針魚	七一、七七	一九、八四	七、〇六	一、三二
黒鯛	七四、七四	二二、一一	一、七二	一、四〇
鮟鱇	八五、八六	一三、〇七	〇、一二	〇、九五
鯊	七九、一三	一八、三五	〇、五〇	二、〇二
鱈	七二、六〇	二一、九七	四、二六	一、一七
いなだ	七六、七五	二〇、九〇	一、一〇	一、二五
こち	七八、八九	一九、六五	〇、三四	一、一二
鮫	七三、五九	二四、八二	〇、五〇	一、〇九
鹽鮭	六一、五六	二六、一〇	三、一四	九、二〇
鱒	六六、六七	一八、七八	一三、六七	〇、八八
にしん	七二、一〇	一八、一九	八、〇二	一、六九
鰻	六九、二四	一八、〇九	一一、五三	一、一四
鯉	七八、八六	一八、九四	〇、八三	一、三七
鮎	七八、九〇	一七、六六	一、八九	一、五五
鯰	七九、〇四	一八、三五	二、四一	一、二〇
どぜう	七七、三二	一八、四三	二、六九	一、五六
むつ	七四、七一	一七、九五	六、二〇	一、一四
烏賊	七八、九一	一九、一二	〇、五六	一、四一
蛤	八四、一二	一三、一九	〇、八一	一、八八
蜊	八四、〇七	一三、二〇	〇、七七	一、九六
牡蠣	八八、八九	八、四五	〇、八九	〇、七七
あはび	七三、〇〇	二四、五八	〇、四四	一、九八
蜆	七九、五七	一八、四〇	〇、八四	一、一九
赤貝	八二、〇四	一五、七九	〇、四七	一、七二
ばか貝	八六、一六	一一、〇八	〇、五六	二、二〇

穀類と野菜の含蓄要素

品名	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	繊維	塩類
白米	一〇、六〇	五、八〇	〇、五〇	七三、五〇	〇、四七	〇、三三
糯米	一四、三〇	八、五〇	三、二〇	七三、一〇	一、〇〇	〇、九〇
大麦	一四、三〇	一〇、〇〇	二、五〇	六五、五〇	七、一〇	二、二〇
小麦	一四、四〇	一三、〇〇	一、五〇	六六、六〇	三、〇〇	一、七〇
饂飩	一四、〇五	一一、一五	〇、八八	六七、四七	……	六、五一
生麩	七二、四六	一三、三一	〇、一七	一四、三五	〇、一五	〇、三八
粟	一三、〇五	一五、〇四	三、〇三	五七、四三	一〇、四〇	三、〇五
黍	一四、七〇	一〇、八九	二、九五	六〇、九五	五、九五	四、五六
白大豆	一三、四六	三六、七一	一七、四五	二四、九五	二、四七	五、〇〇
赤味噌	五〇、四〇	一〇、〇八	……	一八、八二	八、二〇	一三、五〇
醤油	六六、九四	八、七一	一、七五	五、八〇	……	一九、四五
豆腐	八八、七九	六、五五	二、九五	一、〇五	〇、〇二	〇、六四
小豆	一三、七〇	一三、〇一	〇、四〇	五五、五九	六、四四	三、〇六
豌豆	一四、五〇	二三、四〇	二、〇〇	五三、五〇	六、四〇	二、四〇
蚕豆	一五、七五	二六、八八	一、二九	四九、七四	一、一三	三、一一
菜豆	一四、〇〇	二三、〇〇	二、三〇	五二、三〇	五、五〇	二、九〇
胡豆	九二、一六	三、三六	〇、一五	二、三五	二、四六	〇、六三
大根	九三、四五	〇、八〇	〇、〇六	四、九三	〇、七〇	〇、四〇
沢庵	八二、七三	一三、八〇	〇、〇六	六、〇二	一、五三	八、三〇
蕪	九三、〇六	〇、〇七	一、六六	三、三一	〇、九四	〇、九七
胡蘿蔔	八七、〇〇	一三、〇〇	〇、二〇	六、三〇	四、三〇	一、〇〇
牛蒡	七三、八〇	三、五〇	〇、〇一	一九、七〇	二、一〇	〇、八〇
蒟蒻	九二、七六	一、〇〇	〇、七九	五、七五	〇、五五	〇、五五
百合	六九、六五	三、五四	〇、一一	二四、一五	一、四三	一、三五
慈姑	六九、二八	四、二七	〇、二〇	二五、二六	一、四五	〇、四四
蓮根	八五、八〇	一、一〇	〇、二〇	一一、二〇	一、〇〇	〇、七〇
里芋	八一、二〇	二、〇〇	〇、二〇	一五、一〇	〇、七〇	〇、八〇
薯蕷	八〇、七四	二、四〇	二、一六	一三、〇九	〇、九七	〇、四六
佛掌薯	八〇、三三	二、八五	〇、一一	一四、七一	〇、七五	〇、二六
馬鈴薯	七五、〇〇	二、一〇	〇、二〇	二〇、七〇	一、一〇	〇、九〇
小松菜	九二、六三	二、五一	〇、五三	一、一八	一、七九	一、五六
芹	九三、六〇	二、〇一	〇、一五	三、三三	……	一、〇四
三つ葉	九三、九六	〇、八六	〇、一三	二、四六	一、二八	一、三三
蕗	九五、六〇	〇、〇四	〇、〇四	二、七三	〇、七一	〇、五三
うど	九五、一〇	一、〇六	〇、一〇	二、四七	〇、七〇	〇、五七
蕨	九一、一八	二、八三	〇、一五	一、四一	三、二七	一、一八
葱	九一、〇〇	一、五〇	〇、二〇	四、八〇	二、〇〇	〇、五〇
筍	九〇、三三	二、二八	〇、一五	四、四七	〇、九〇	一、〇一
茄子	九三、五〇	〇、八〇	〇、二〇	四、〇〇	一、一〇	〇、四〇
胡瓜	九六、六四	〇、八五	〇、〇八	一、九六	……	〇、四七
冬瓜	九七、四三	〇、二六	〇、〇三	一、七三	〇、三五	〇、三三
南瓜	九〇、二四	〇、六五	〇、一五	六、〇八	二、一五	〇、七五
干瓢	二〇、三五	八、一九	一、五四	五四、三三	一〇、六八	四、九二
松茸	八一、七三	三、七七	〇、七六	一三、七四	……	一、〇〇
甜瓜	九二、四四	一、一五	〇、四八	四、一〇	一、二四	〇、五九

すが繍等がありまして、この内で相良繍と云ふのは又の名をいぼ繍とも申します。此繍方は此道に心得のない人でも容易く出來るのでありまして、釜糸を弛るく縒り合せて、針留しました後は、糸を切地の裏から表の方に拔き出し、其糸に結び玉をつくりまして、裏に針を拔き通すのですが、馴れない中は、兎角結び玉が揃はぬものでありますから、糸の引き方だの、より方などに能く〳〵氣を付けなければ不可ません。夫れから又心得のない人が繍ひますのは平繍（一名平糸繍）も宜しうございます。これは釜糸で、花などを平に繍ふので、夫れから起つた名稱であります。次に金糸繍といふのは、花鳥などの模樣を、金糸で繍ふので、毛金とか、又は一筋金は針で繍ひますけれど、太いものになりますと、金糸卷に卷くのでございます。夫れから肉入繍は、木綿糸や、綿や、厚紙などで肉を作りまして、其上を適宜の絹糸で繍ひ取りをするので、尙又すから繍と申すのは、皆さんが常に御覽になつてゐる半巾や、皿敷きの縁などを繍つてある遣り方でございます。これに用ゐます糸は、俗に半巾糸と申しまして、染分けの糸を買つて居りますが、何うもこれは變色し易いのであります。御承知の通り半巾などは度々洗濯をしなければならぬものでありますから、成るべく色の變はらぬ糸を用ゐるが宜しい。兩面繍といふのも又半巾なり、窓掛などに能くある繍ひ方で、即ち兩面に施したもので、別段裏も表もない遣り方であります。すから繍とは總て刺繍せんとする布帛の布目を拾ふて、下繪の形を繍ひ、然うしてから引いた糸と同じ色の糸を細く割いて、五厘程に先きの糸を綴づるのであります、其綴ぢ方は、互ひ違ひにして、餘り強くないやうにするのです。これは半襟や裾模樣などに多く用ゐてあります。金糸肉入と申すのは其名稱の通りで、即ち金糸繍と同じものでありますが、只々肉を入れるところだけが違つて居ります、これは重々しく繍ふ爲めに肉を入れるので、即ち岩や、山のやうな豪壯なものを繍ふに用ゐられます。

それで肉には綿を入れるのです。松葉ざしは是れも其名の通り、松の葉を並べたやうに繍うのでゐ鳥の翼などに用ゐてゐます。絽金繍は、繍はんと思ふ切地に下繪を寫し、程の好い糸を太くより合せて、丁度すが繍のやうに布目を拾ふて繍うので、其繍方はすが繍と同じでありますが、糸の太さに相違があるのです。刺し繍はどんなものでも疊の目のやうに順序よく刺して行くもので、濃淡を表はすには此繍ひ方に限ります、併し隨分六ケしい繍ひ方で熟練した人でなければ容易く出來ません。毛刺繍は毛のやうな細かい糸で繍ふので、人物の毛髪などの場合に用ゐられてあります。鹿子絞は一寸見たところが鹿の子絞りに似た繍方で、星繍と相良繍とで出來たやうなものであります。紋繍は多く旗印に用ゐられたもので、別段至難かしいといふのではありませんが、紋劃りの遣り方から習はねば、立派には出來ません。此繍方は別段六ケしくないとは申すもの丶、刺繍術の奥の手として容易く敎へぬものであります

先づ雑とこれ等が繍ひ方の大要でありまして、次に刺繍に用ゆる器具は、刺繍臺、丸輪、桛、糸卷器、針箱、糸卷竹、金糸卷、目打、鋏、針、おもり、糸、布帛、等の外に、下繪用として形紙、白粉、砥粉、畫筆、羽箒などが入り用でございます。

割烹に就て

女子美術學校敎師　土岐えひ子

割烹のお話を盡すことは、其數が多くありまして一寸座談で申し上ぐることは出來ません、例令ば竹の子の割烹に致しましても、煮るとか汁に入れるとか其方法は數種ありますからです、で單に大要を申すことに致しませう。

料理といふ文字を考へますと、是は決して食物に就限りませず、何でも取計ひ調へる事を意味した文字で、其解釋は實に廣いのであります。さて此料理なるものは未開の時には決してない、夫は現に歴史が

證明して居ります、又野蠻人は料理の方法を知らずに、木の實なり、肉類なり其まゝ食して居るではありませぬか、未開の人間は興味配合の思想がないのと、衛生上の感念が更にないからでありますが、世が進んで來ると共に、是等の必要を感ずるので、今日の如く我國が泰西の文明國にも劣らぬ位置になつて來ましたからは、興味配合上と衛生上割烹といふ事は是非とも必要であるのです。

自分の名聲を天下に轟すのも、黄金を眼前に山のやうに積むことも、又讀書を思ふまゝにするのも、又芝居寄席を見たり聞いたりするのも快樂に過ぎませぬが、吾々人間の精神上快樂といへば、希望の滿足でありませう。如何に芝居が面白いからといふて汚い衣服を着て腹を減らして見ては一向に面白うありますまい、底で衣食住足りて他の快樂が起るものであらうと考えます。然うして此衣食住の三つは動物界の生存要件でありまして、中にも食は上下動物の懸隔はない、衣と住とは下等動物には自然の給與がありますが、食に至つては上下相通じて居ります只上下の動物に區別されてあるのは衛生と料理とを知らないのです。上等動物に至りましては山海の産出物に作用を施して味を告け配合を好くして大に興味を與へるのです。茲に於て割烹の知見に大に關係するのであります。

人間は如何にして身體を保つて行けるかといへば、身體の變化即ち病氣には醫藥の力を假りるのでありまして、其外寒ければ暖を取る、雨露を凌ぐには家屋の補給とがありますが、これだけでは身體を保つことは出來ませず、底で營養物の必要が起るのです。此營養物には即ち割烹が與つて力あるので、夫れは各々體格によつて夫れ相應の滋養性を有してゐるものを補給せねばなりませぬ。

我國の習慣となつてゐますのは、家政は婦人が受持つことになつて、一家の財政の盛衰は主婦の實不實とにあるのですから、其樣な重い責任を持つてゐる婦人は、毎日々々の家計に就ては最も注意せねばな

りませぬ。然うしますと毎日の割烹は婦人の必ず執るべきところで、一家内に精神上の快樂を與へ、又は同額の金錢を費して好い物を選むことを心得ねばならぬことになります。其可不可は其任にあるところの婦人に料理の知見があるかないかに依るので、縦令ば其方法を下婢に一任するにしても、主婦たるものは其心得がなければ、遂に下婢の思ふまゝで爲に貴重な金錢を無駄に費すことになりませう。一家内ばかりでなく、來客でもあつた場合に、主婦たるものが割烹の心懸けがなかつたならば、仕方がなく料理屋に命ぜねばなりませぬ、これは時間等の遅延があつて間に合はぬことがあり、客が歸つて了ふたあとに料理が出來てくるなど、無駄の費用と客に自分の厚意を空しくすることがありまして、不經濟不便は此上なからうと思ひます。これ等の道理から上等動物たる人間には料理の必要があることゝ、我か國の習慣上婦人に料理の心得があることは一大必要と感じます、

それでたゞ料理をすると卑しくも見ゆる物でありますが、これは一家を料理する積りに願ひたいものであります



池田侯爵令孃　嚴子

音樂に就て

中川雪枝

音樂は人の心を樂しましむるのが、第一の功能でありまして、よく働いて活氣のある家庭には、是非こ

の音樂を入れたいものであります、音樂は鳥の聲、虫の音にかへて賞翫するものでありますから苟も人としては、音樂をたしなむ位な風雅心がなくてはなりませぬ、よく働く家庭の滋養として音樂を入れるといふことでありますれば、三味線でも胡弓でも一向さし支はありますまい、否玄關で鳴らしても不都合はないのであります、併し心を樂しましむると云うて、いやしい歌の相伴をさせたり、浮華な曲を奏しては困ります、それは賭博をして樂しいと云ふと同じことで、決して立派な樂しみではありませぬ、どうか自分の心に耻ぢない樂しみにして貰ひたいものであります、否それを以て不潔な心をも洗ふやうにして貰ひたいものであります、さて立派不立派といふことでありますが、此樂器は惡所で弄ばれるから、よい音聲を有つて居るが遠けねばならぬ、といふ如きは、決して立派な言種ではありませぬ、と申しまするのは、現今ヴアイオリンなどは上流社會にも用ひられて居りますが、又花柳社會でもぼつ〳〵初めたやうであります、たゞ花柳社會で用ひるから、それで排斥せらるるとなりますと、花柳社會に咒はれましたら、學校にも家庭にも音樂がなくなる譯であります、君子は其罪を憎んで其人を憎まずと云はれてあります、偶ま聞くに堪へぬ音聲を發した所が、それは之を用ふる人の罪で、決して樂器の罪ではありません、然るに三味線胡弓の如きは、



小笠原伯爵令妹　照子

多方面の音聲を持ち、兎角浮華の人種に弄ばれる所から、誠に不評判でありますが、風雅人の手にかゝりますと、なか〳〵美妙な上品な音聲を發しまする、この風雅人と申しまするは、世の廢物たる乞食宗匠の如きものを云ふのではありません、眞に文字に示す如き人を云ふのであります、でありますから、心を洗ふほどの歌曲であれば、樂器は三味線でも胡弓でも差支はありません、堂々と鳴らして樂んで貰ひたいのであります、必ずしも全部外國の眞似をして、オルガンやピヤノでなければならぬといふ道理はありません、然るになさけないことには、日本の音樂を學びまするには、今の所魔窟へ出入せねばなりませぬ、自然惡い垢が身に染みるといふことになります、それに反して西洋の音樂を習ふには、斯の如き心配は少しも入りません、否西洋音樂が日本の風俗を紊した度合も決して尠少ではありませんが、世間は表面上それを大目に見て居りますから自分さへ用心してかゝれば、素より音樂其物に罪があるのではありませんから、まづ差支はありません、どうか日本音樂を學ぶにも、此心配の入らぬやうにして貰ひたいものであります、と同時に此心配の種を蒔かぬやうにして希くは索然として趣味少き家庭を、面白く上品に賑はして、家庭をよく働く活氣あるものにしたいと思ひます、



宍戸子爵令孃　織子

繪畫に就て

園田森江子

今更私が彼是と申す迄もありませんが、人は何事をするにも繪畫程必要なものはありますまい早い例として女子が刺繡を致しますにも、最も肝要なのは繪畫でありまして、其外繪畫の必要を申したら數限りもありますまい、近頃は日本でもこれが必要を認めまして、其處此處に美術學校が立ち學ばれつゝある、女子も多くありますが、西洋に比較しますると、まだ〳〵盛んとは申されませぬ、私が西洋に參りまして、女子の繪畫習學の盛んな事は實に、一驚を喫しました。英國の女子では、ピヤノと佛蘭西語と繪畫が出來ぬものは殆どない位で、此二藝術と一語學は、日本で申せば嫁入道具ともいふ位になつて居りまして、何々孃は繪畫の素養がないと申せば、直ぐにもお嫁入りに關係するといふ有樣は何んと盛んなことではありませぬか、夫で英國の婦人に佛語で話をすれば、ドンナ人でも解りますし、又繪の話をすれば、又ドンナ人でも繪畫眼を備へて居るのです。ですから如何なる女學校でも繪畫の課目が備へてない處はない位で、夕方の奇麗な雲を見ても、樹木の鬱蒼としたのも、鳥の奇麗なのを見ても、繪畫上の色彩を以て觀察しない婦人はない位で、然して公園などに參りまして、若い婦人達の談話を聞きますと、誰



井伊子爵令孫　八重子

憚らず堂々と繪畫の品評をしてゐるのです、第一誰々の繪は何時も雲の彩色が黄に過ぎるとか、赤過ぎるとか、又は誰の人物畫は實に巧い、骨格が好いとか、肉色が好いとか云ふて居るのでございます。夫れが繪畫の展覽會にでも入場した場合ならば、こんな品評もある筈ですが、然うではなく鳥渡した公園の散歩にも繪畫の話で持ち切ッて居ますのは、如何に婦人界に繪畫が持て囃やされてゐるかを窺ひ知ることが出來ませう。夫れから米國へ往つて又驚きましたには、南の方の或學校では、繪畫と習字とを同じ程度にして學ばせてゐるには驚きました。美術學校で繪畫を專門として學ばせることは言ふ迄もありませんが、米國の此學校は美術學校ではなく家政などを專門に敎えてゐるのでして、繪畫は文字と同じく人には、必要缺くことの出來ぬものだといふ主旨に外ならぬと思ひました。日本では前申した通り、繪畫は却々盛んになッて來てゐるやうですが、文字と同じ程度に進んでゐるとは見受けられませぬ。

日本へ歸つて見ますと、繪畫の流行が盛んになりましたと共に水彩畫が大さうな流行になッて居りますが西洋では繪畫と申せば先づ油繪を指していふらしくあります、元より水彩畫だからと申して、繪畫の圈外にあるに相違ありませぬが、西洋の人は何うも水彩畫を輕く見てゐるやうに觀察いたしました。何故かと申せば名畫といへば重もに油繪に限られてあるやうで、水彩畫は畫家の餘技に過ぎぬやうです、でありますから專門畫家は餘り水彩畫を描きませんで、婦人が重もに娛樂としてやッてゐるやうでございました。底で私か考へましたには、油繪は如何にも西洋の繪畫でありませうと、何故なれば西洋は總てが濃厚でありまして、一寸した食物でも油こくて何うも萬事が油繪的であるやうです。それに反して水彩畫は淡泊で、西洋の人の濃厚好きには何うも調和いたしませんやうに思はれます、底で西洋では水彩畫を好まないで輕く見てゐるのではあるまいかと考へたのでございます。

水彩畫が果して西洋の人から好まれぬとしますと、これは繪畫としての價値がないものかと申せば、決して然うではなく、充分に繪畫として見るべきものであらうと存じます。然うして見ますると、水彩畫が油繪に比して淡泊なものと致せば、元來日本の人は淡泊を好むのでありますから、水彩畫は日本の繪畫として適當な畫風であらうかと考へました。底で只今日本で水彩畫の大流行は、煎じ詰ますと、其嗜好が水彩畫に向つて接近して來たのであらうと思ひます。何うか此上ともに日本の女子方は繪畫を學ばれて、萬事にこれを應用なされるやうに願ひます。これが私が英國と米國で見ました繪畫の觀察でございます。

急がぬことを急いでせよ
朝早く起きざれば事務に渋滞を生ず
寧ろ仕事は少くとも注意多ければ米櫃常に充滿す
仕事の面白味を知らぬものは愉快の趣味を解せず
勞働と辛抱とは桑の葉を繻子とす

燒繪に就て

跡見玉枝

燒繪といふものは如何ものか、御承知ない方もあらうと思ひますから、最初燒繪なるものゝ說明を致しませう。今御話するのは西洋の燒繪のことですが、燒繪は西洋ばかりでなく吾が日本にもありまして、小さな箱、重に菓子箱などに施したのがありますがこれは燒け火箸とか、燒鏝とかで燒いたもので、燒いてゐる內に冷えますから、長く燒き續けることが出來ませんで實に不完全極つたものであります。併し西洋でやるのは那麼迂遠なことではなく、機械は充分に完備して居ります。夫で西洋では單に木の箱ばかりでなく、革や天鵞絨などにも燒き付けるのでございます。偖其やり方は、筆を火にして書くのでこれに名を付けますならば燒筆とでも申しませうかそれは鋼鐵で拵へてありまして、內部はポンプのやうに出來てゐて、護謨の管が通つて、其中にアルコ

ールか揮發油が送られるやうな搆造であります。然うして筆の根元には穴がありまして、夫れから空氣が出入するやうになつて、右の手で筆の軸を持ちまして、左手ので護謨管の端に付いてゐる護謨球を加減好く押しますと、火が強く又は弱く思ふやうになります。底で木なり、革なり、天鵞絨なりに、思ふ繪を燒付けて行くのです。夫で最初はアルコールランプで筆を燒いて置きまして、夫から前申した通り左の手で加減しますから、筆は何時までも燒けてゐて決して冷えることがありません。

此機械は亞米利加で出來たもので、筆ばかりでも七種程もありますから、何を描くにも差支なく、花鳥人物山水好み次第に出來ます。此燒繪は亞米利加ばかりでなく、獨逸でもやりましたが、米國程に發達して居りません、獨逸で最初發明しましたのは只一本の針でしたから、何でも描くといふ譯に行かず、ほんの模樣位の單純なものでありました。

西洋の人が日本繪の趣味あることを知りましてからは日本繪を燒繪にしたらば嘸かし面白からうと考へた人もありますが、如何にも日本繪は燒繪として至極うつりの好いものであります。米國のクラーク大學のミセス、ポータといふ人は、最も此燒繪に熱心で、從つて燒繪を專門として居られまして、日本の繪畫のことを知りたいと言はれますから、私は燒繪を研究したいところから、互に交換することに致しました。私がポータの家に滯在してゐたことは一ケ月半ばかりでしたが、ポータが日本の繪を燒付けて見たいと言はれますから、其好みによりて櫻花に籠を描いて置ッたことがありました。

此燒繪は、米國では立派な婦人の職業として盛んに行はれて居りまして、ポータの家には燒繪研究として現に二人の女學生が居り、其一人はウスタ州の高等女學校の燒繪の教師に出て居りました、此ポータの家で見ました燒繪は、山の半腹にライオンが寐てゐる圖で、毛の工合などは實に巧みなもので何うしても實物としか見えませんでした、此燒繪の大きさ

は、高さ五尺位の巾が三尺程もあつたと覺えてゐます。夫れで大きな燒繪をやりますには、前に申した護謨球は足で踏むのでございます。燒繪をいたします板は朴の木が最も適して居ります朴の樹は質が硬いので筆の運びの工合が好いのですが、之に反して桐の板は柔かいので、燒くのに火が立過ぎて面白くありません。天鵞絨になりますと、毛だけを燒くのでございまして、出來上りを見ると宛るで織出したものゝ樣に見えるのです。近頃は燒繪をやッて見たいといふ婦人方が隨分澤山居られますが器械がないので廣く教授することも出來ませんで困ッてゐるのでございます。何うか此器械を拵えて見たいと色々と工夫をして居ります。

繪畫の發達に就て

繪畫は藝術として女性に最も適當なるものの一なり、而も又娛樂としては温雅に優美に、且つ刺繡押繪さては、着物の見立など、女性に必要なる仕事に、多くの關係を有せり、故に今日小學校にても、高等女學校にても、繪畫を教へざるは無けれど、其時間は餘りに僅少にて、英語數學心理等他の學科の餘りに多きが爲め、腦を一度に使用して、繪畫は充分に進歩をなすことなく、半端の繪師を造れり女生徒の教師は、多く女子たるが善し、然るに東京美術學校に、女子部の存置せざる結果、各地方の高等女學校にては、繪畫科に餘儀なく、男子教員を使用せり、女性の繪師にして多からば、男性の繪師を傭はざるや勿論なり、近來の問題たる女子の職業も、繪畫教師の如きは、最も適當たるものゝ一つなるべきに、女子の繪畫教師は目下極めて少し、是れ今日の勇氣に富める靑年女子が、今後大に發展し得べき新方面なるべし、扨之迄は何故に女子の畫家の少かりしと、云ふに、元來繪畫に圓山、四條派等の如き寫生的のものにても、入り易くして進み難きものなるに、女子の之を學ぶ者は、多くは高等女學校の餘暇か、家事の餘暇（近來は女子美術學校も出來たれど）なるを以て、思ひし程に進歩發達せず、稍や畫き得る見込の付く頃には、他家に嫁し嫁したる後は、良人が許さゞればとて廢止し、偶々良人が許すも子供が出來れば、途に止むるが故に、教ふる方にても、折角力を盡して半端の者のみを作り居る次第なり、併し前にも云へる如く、各女學校も繪畫科に女子の、教師を要求し居れば、將來好望の女子職業として、こゝに新生面を開くべきなり。

野口小蘋女史談

海邊春興　　園祥子

芝うらや汐の干潟に漁人ならぬ
袖こそ見ゆれ貝ひろふらし

樂焼に就て

松田澄子

和歌で有名な蓮月尼は、自分で茶器を拵え、夫れに自分の和歌を彫りつけて娯んで居りましたことは隠れない話で、唯今でも數寄者の間に其茶器が珍重されて居りまして、尚ほ京都では其寫しを拵らえて賣つてゐる位でございますが、和歌なり俳句なり御詠みになります御婦人が、鳥渡一筆茶器に御書きになりましたならば、如何にも趣味の多い高尚閑雅の娯樂であらうと存じます。それで茶器を拵えますには樂焼が至極簡便に出來るもので、これは豊臣秀吉が千利休に意匠をさせて、吾が邦に歸化した朝鮮人に焼かたた歴史などがありまして、一名をノンコとも申して居ります。夫竹幀が先年から此樂焼に熱中致しまして、大袈裟に釜を拵えるなんといふ騒ぎをいたして居りますから、常に手傳ひをさせられて一と通りのことは見聞きして覺えたのでございます。

偖薄茶々碗でも拵えやうと致しますには、素人では鳥渡出來惡いものでございます、何故出來惡いかと申せば、これ等を拵えますには轆轤を廻はしながら造るので其吸呼が如何にも至難しいもので素人では尚ほ御婦人のことであれば、こんなことをなさらずとも、單に素焼のものに和歌や俳句をお書きになる位で、お娯みは充分あらうと存じます。夫れで素焼までを、陶器を製造するところに御頼みになりますと、御好みに依つて湯呑なり、薄茶々碗なり拵えてくれますから、夫れに和歌でも俳句でも、又繪の御心懸けのある方は、繪をお描きになつて、再び陶器製造所に御遣はしになりますと、藥をかけて再び釜に入れますと、一個の樂焼が出來上るのでございます。前に申した通り原形と素焼とは素人には出來ませんから、黒人に御頼みになる方が宜しいのですが字なり繪なり書いてから、藥をかけて釜に入れるのは造作もないことで、容易に素人にも出來るのでございます。

陶器を作ります土は、東京にはありませんで、京都や尾州から取寄せて、夫れに隅田川土を入れるのであります。これ等の土は東京で賣つてゐる所がありまして、泥を買うといへば何となく可笑しいやうでございますが、何うしても東京の土では不可ませぬ尤も隅田川から出は出ますが、磁器は愚か樂燒も出來ません、併し瓦鉢即ち朝顔鉢として用ゐてゐますのは、純隅田川土で燒いてゐるので、この燒方は今戸燒と唱へてゐるのでございます。さて素人がやりますには座敷釜といふて、一寸見たところ西洋竈のやうな形狀をしたものへ、炭火で以て簡便に燒けます。夫れは字なり繪なり書いて、藥をかけて即座に出來ますから、御歌の會でもわッて和歌を即席に燒付けやうとなさるには此座敷釜を椽の端にでもお置きになつて、素燒のものへ其和歌をお書きになりますと、一時間と經たぬ内にそれが出來上るのでございます。こんな有樣でありますから、御婦人方の御座興には上品なお遊びだらうと存じます。



園藝に就て

竹島糸子

人として美の感念がないものはありますまい、若しも美の感念がないものがあるとすれば、夫は禽獸に均しき人と云はねばなりませぬ。無神の蝶や鳥でさへ紅紫黄白と咲き亂れた花には、浮かれて飛びつ歌ひつゝあるではありませぬか、さすれば美の感念がない人は寧ろ蝶や鳥よりも劣等なものと云つても差支ないでせう。

上は高位顯官のやんごとなき人より、下は裏屋住居の八公熊公に至る迄恐らく美の感念を有せぬ者はありますまい。高貴な方の邸内には、花苑廣く種々の草花を栽培して娯んで居られまして、又裏屋住居の者は、縱令一錢二錢にしろ、緣日で草花の一株買も

も買つて來て、缺けた擂鉢に植ゑ込んで、九尺二間の棟割長屋の、庭もない癖に並べて娯んで居るのを能く見受けますが貧富の別があッて、其栽培の程度こそ相違してゐますが、花を見て娯むといふ意志に至つては毛頭の違ひもあるまいと思ひます。

小兒が野に出て遊んでゐるのを見ますと、屹と野生のげんげや公蒲英や菫などの花を摘んで花束にしたり、又は飯事の材料として遊んで居りますが、是は全く頑是ない小兒ながらも、野にある美しい花を空しく見過すに忍びず、語を換へて云へば花の美を愛する意志に外ならぬのであります。

女藝十圖（其の三）彈箏



母親が泣く小兒を脊負ッた場合に道端に草花でも咲いてゐるのを見ますと指さして敎へ、其泣くのを宥めることがありまして、小兒は是等美しき草花に依つて泣き止みますが、憶ふにこれは花の美を覺知して自己の心を慰めるので、又母親は知らず〳〵暗々裏に、花の美を敎へつゝあるのであらうと思ひます。

今私が喋々と說明するまでもありませぬが、小兒は宛で植物のやうなもので、其成長するに從ひ、枝を撓め葉を透かせつゝ栽

培するのと同じく善美な教育を與へねばなりませぬ小兒は實に教育の善惡に依つて、善人にも惡人にもなるもので、善人に育て上ぐることは親たるものゝ最大義務なのであります、人は決して殺伐な亂暴では不可ませぬ、優美な心があつて、其中に凛として侵すことの出來ぬ氣性がなければなりませぬが、其優美な心を養成するには、自然の美即ち花に如くものはありますまい、花の美を感ずる人には決して殺伐な亂暴な人はありませぬ、花は吾等人類に優美な心を養成せしめんが爲に造物者が拵へた賜物ではありますまいか、小兒に向つては花の美を知らしめて常に美といふ感念が頭腦から脱出せぬやうにすることが肝要であらうと思ひます。

『花に對しては怒なし』といふ語がありますが、花に向つては怒れる心を取り直す人はありませうが、何人も花に向つて怒る人はありますまい。人は感情の動物でありますから四邊の光景に依つて喜怒哀樂の情が起るものであります。去れば周圍の光景は直に人の氣性品格に及ぼすもので、常に美麗高雅な花に接してゐれば、心は常に娯しく些の煩悶もありますまい。縦令或る煩悶があつたにしろ、花に接したならば、端麗な爲に其煩悶を打消すことが出來やうと思ひます。

監獄の統計を見ますと、植木師に刑事上の犯罪人が少數でありますが、これは如何なる現象でありませうかと申せば、常に花卉草木の高雅なるに接してゐますから、其心も何時しか高尚温雅になつて、刑事上の犯罪など厭はしき恐しい心が起らないのであります。又感化院での成蹟を聞きますと、農業部の者が極めて感化し易く、又性質も至極温順でありますとこれは常に其耳目に觸れつゝある自然の美、即ち花卉草木に依つて、自ら感化を受けた好個の例證であります。花卉草木即ち自然の美が夫れ程までに感化に大効顯あるものとすれば、園藝は實に忽諸に附す可からざるものではありませぬか、されば之れを一般の少年に實行させることは、教育の良法として論

ずるまでもなく、又女子に應用しましたならば、科學上の研究に多大の利益を得ることは申す迄もなく高尚優美な精神を養成することが出來るのであります、其花に對する温雅の心を以て舅姑良人に接しましたならば、花の如き芳ばしき美くしき圓滿な家庭を造り加ふるに、花に對する温雅な同情を以て愛兒を育成しましたならば立派な人を造り得て充分に女子の本分を盡すことが出來ませう。

併しながら花の美を愛する心から、往々穿き違へた思慮を起す人がありますのは如何にも痛歎の至りです。先達のことでした私宅の庭苑の植込の中でボキ〱と何か樹の枝を折るやうな音が頻りとしますので、竊に近よつて見ますと、八九才程の小兒が、杉垣に昇つて庭の乙女椿の枝を折りつゝあつたのでありました。私が不意に植込の中から現はれ、夫が咄嗟の間でありましたから、彼の小兒は逃げる機會を失つて泣出さんとしましたが、私は彼の小兒を捉へて申しましたには、椿の花が欲しければ幾らでも上げるから、默つて折つては不可ないと、ところが小兒の答に、彼處の庭に椿が咲いてゐるから、取つて來いと兄さんが云ひましたと、此兄さんなる人が花を折つて來いといふたのは、花の美を愛する心から椿を得やうといふ慾心が起つたので、敢て惡むべき心ではあるまいと思ひます。併し小兒に折つて來いと命じましたのは、花を愛する熱情が遂に彼の小兒に偸盗を教唆することになつたのです、此兄さんなる人の思慮は如何にも淺墓と云はねばなりませぬ。

是等は先づ例外として、園藝は全く高尚優美の精神を養ふに足るべきものとしますと、あらゆる學校では園藝科を設けて、學課の餘暇に、生徒に培養せしむることにしたらば好からうと思ひます。中にも女學校では、觀賞的植物即ち花卉を佳いのですが、又蔬菜栽培も好からうと思ひます。蔬菜を自から栽培して、夫を俎上に上すなどは趣味の深いもので、其味は一層甘美を覺えるのであります。當時は女子

の料理學の研究も流行して居りまして、敢て八百屋の店のものばかりでなく、自分で栽培して蔬菜を調理するなどは、是非料理學に必要であらうと思ひます女子が手づから蔬菜を栽培するには、不潔な肥料を取扱つたり、又は土弄りをせねばなりませぬ、がこれは女子は品性を卑うすると云はるゝ人もありませうか、私は此意見には大反對であります。『先づ〳〵姫君樣には入らせられませう』といふやうな芝居的の悠長な時代なら兎も角ですが、今は那麽世の中ではなく、實に生存競爭の激甚な世の中で、縱令女子とは云へ、夫れ相應に働かねばならぬのです。女子だからといふて土弄りをせぬなど、贅澤を云つては居られませぬ殊に土弄りをするのは身體を強固ならしめ健康を保つことが出來るのです、又肥料を弄るといつたところが、肥料は決して掃除屋が汲み取る下肥に限つたものではありませぬ。燐酸肥料とか人造肥料とか、油粕だとか手を着けても不潔でないものが澤山あるのです。一家の主婦たるものは家事の餘暇に學生たるものは勉學

長壽の基本

自殺しても、食過ぎて死んでも、何もかも一切壽命たと天命たと一山百文のあきらめ方は別問題として、この方面から考へても人間各々に或與へられたる長壽の基本、生命の法則あるは毫も疑はれない、素より遺傳も境遇もいろ〳〵ありて、生れながら強いものも弱いものもあらうが、弱い者が注意と養生とて終に強いものに成り、元氣も出で、心身共に達者になりて大に長命を保ちし話は確固たる事實であるから左に掲げるフーフイランドの長壽基本八則も甚だ大切である、

其一　消化器の全部は常に健全にして整然たる構造を保たしむべし胃不健全なれは、長壽を得難し、

其二　呼吸器及び胸膈の完全を要す、胸膈廣く、音聲強く、咳嗽稀れに、能く長時間を一呼吸にて續くるを好とす、

其三　精神に過度の運動と刺戟を與ふべからず、凡そ身體内部の消耗は斷へず血液の循行あるによる、一分間百回の脈搏あるものは五十回のものより消耗大なる理にて、精神常に刺戟を受け脈搏の昂進を來たさばいはゞ常に熱病に冒さるゝと等しく長壽の資格なきこと明かなり、

の餘暇に、前栽に培ひ水遣ることは、實に樂みが多いことであります。

吾が日本では婦人での園藝家は殆ど皆無でありますが有繋に泰西各國は學術の進歩して居るだけに、婦人の園藝家が多いのです、然かも是等の婦人園藝家は、自己の庭園では慊らず、普ねく山川溪谷を跋渉して、然かも危險さへ冒して植物の實地研究を爲るのですが、其勇氣には到底日本婦人が足元にも寄り付けない、日本婦人は活地がないといつても差支はなからうと思ひます。

亞米利加のナイルスといふのは、未だ妙齢な處女ではありますが、早くも志を園藝に注いで樵夫さへ踏み込まぬやうな山中に這入ッて植物を採收するのです、嘗て此イナルスが申しましたには妾が跋渉する山も谷も崖も又森も、丁度書籍のやうなもので一度から二度、二度から三度と、幾度も繰返して讀みますと夫だけ其書籍の總てを解することが出來又一字一字に就いても其意のあるところが、解ります、山とても其通りで、跋渉することが度重なりますと、彼方の山、此

其四　性癖、慾情の均衡大切なり、沈着、嚴正、和合等は長壽に缺ぐべからざる性質にて、必竟身體の刺戟感覺に歸す、殊に刺戟感覺は其權衡を保つ樣に心掛くべし、若し然らずして或は甚だ強く、或は甚だ弱く、爲に其調和を破るときは、終に此例を失ひ、大に健康を傷ふ

其五　自然の回復力強大なるべし、されば一度びは失はんとせしものも之が爲に修理せらるゝのみならず、却て舊に倍して健全なるを得其には消化力も充分あり、血液循環も平靜均一なるべし、又吸收器分泌器の働作も至極活潑なるべし、

其六　身體の構造は一樣の發育をなさしめむるべからず、構造一樣ならざれば力と運動の一樣を缺ぎて老年を期すること能はず、其不完全なる個所より病魔の襲擊を受くるや論なし、故に餘り成長せば却て短命なり、之れ何れかに必ず弱點のひそむに歸因す、

其七　內臟の右部は凡て強壯なるべし、虛弱の部分より身體を害する種子は蒔かれていつか吾は枯死す、恐るべきなり、

其八　組織は適當なる分量を要し、且つ強くして持續するに足り、甚しき乾燥若くは硬固なるを避くべし、長壽の爲には機械的強靱性の多からざるを利ありとす

方の谷と、仔細に山中の樣子を知ることが出來まして從ッて趣味深く覺えますと。ナイルスの此言葉を嚼味しますと、園藝家の採收に就て最も有益な金言であらうと思ひます。

隴を得て蜀を望むといふことは、慾望のある人としては宛もあるべき事でありまして、庭苑の草花を栽培して娯しんで居ります內には、次第々々に草木の名が解つて來まして、道端に生へてゐる雜草迄に注意するやうになります。然うなると緣日の植木では慊らず、アレも欲しい、是も欲しいといふ氣が出まして、遂に植物採收に出懸けることになります、山と野には誰が栽培したとなく、自然の雨露に芽組んで、種々の植物が時折々の氣候に適れて美しく咲いてゐますが、晴々とした山や野の新鮮な空氣を吸うて美しい自然の花に接して胡蝶と共に飛び歩行いて採收する娯しさは、何んとも云はれないのです。夫れに採收したものは腊葉にしたり又は根ながら堀り採つて庭に植えて置きますと、每年美しい花を開いて娯しませてくれるのです。植木師が仕立てたのを買つて來て眺めるのは、單に花を見て娯むだけで、自分が培養して咲かせた花を見るよりか餘程趣味が薄からうと思ひます、縱令植木師から買つて眺むるにしろ、全然花を見ぬ優美な心がないに比べては結構なことですが、元來園藝の娯樂といふものは培養と花を見るとの二ツから、成立つたものだと思ひます。然うすると植木師のものでは充分でなく殊に花ばかりを見るよりも、培養するのが又格別に娯しみがあるのです。植物を培養するのは其目的とするところは、花を觀やうとか、結實を見やうとかいふのでありまして、先づ最初花壇を拵へる、續いて苗床を拵へ、其處へ種を播下きますと程なく發芽する、日を經るに從ひ、次第々々に成長しまして蕾が出ます、サア然うなると甚麼花が咲くか、甚麼果實が結ぶかと夫を待つのは實に娯しいものです、何事によらず待つ間に娯しみのあるもので、園藝の娯樂も又茲にあるだらうと思ひます。

植物採收の効力は、植物を得るばかりでなく、山野を歩行きまはることは如何に吾々人間に健康を與へますか、第一新鮮な空氣を呼吸することを始めとして、自然の風色を眺むること、歩行力を强めることなど其効力を數へましたならば、十指を折るも、尙ほ足らずでありませう。

其邊にある雜草だからといふて決して、一顧の價値がないとは限られませぬ、何れも夫れ相應に花が咲きまして、優に庭園の一隅を飾るに足るのです。根本はと云へば舶來植物の外は概ね野生に過ぎませぬが、瓦礫中に光輝燦然たる金剛石が交つてゐるやうなもので、何うかする雜草の中に珍種がないとも限らぬのです、植木師が賣ッてゐるものでも舶來品を除いて珍とすべきものは、何れも野や山から採收したもので、先づ野州の日光などは餘程珍葩奇蘤に富んでゐて、植木師は好い仕入れ場所として同地に出懸けて居ります、夫れから武州の高雄山も中々變つたものがあるのです。

植物を仔細に研究することになりますと、既に植物學としての專門學もあります程で、其蘊奧を究めますには並大體のことではなく家計の餘暇だとか、勉學の餘暇とかに培養する位では、却々其入口を覗くことも出來ないのでありますから、單に娛樂的園藝としては、夫れ程までに珍種を蒐集しなくても、舶來品ならば種屋から仕入れ、其外のものならば附近の郊外を漁れば優に前栽を飾ることが出來て、眼を樂ませ、心を慰めることが得られるのです。

一家の子弟に自然の美を感納させ、高尙優美の精神を養成させますに、其敎育保護の任にある父母兄たるものは、斯道に淺くとも攻めては觀賞的植物の名位は覺えて置かねばなりますまい。當時の父母兄たる人達は、普通多く見馴れた梅だとか櫻、乃至牡丹、躑躅、菊、菖蒲、位ならば其名を知つてゐませうが、此外の變つたものになりますと、ア、妙な花だと云ふ位で、實際に其名を知つた人は恐らく十人の中二人とはないでせう。小兒を連れて郊外散步な

どに出懸けた場合に、或る花の名を聞かれて、若し知らなかつたならば、其保護者たる者は何と答へます、正可出鱈目に嘘の名を云ふ譯にもゆきますまいし、知らぬと答へるより、外なからうと思ひます。若しも此時花の名を知つてゐて敎えましたならば、花の美と共に彼の小さい頭腦に夫だけの智識を與へるので、其小兒は一ツの植物の名を覺えることになるのです。猶ほ雜草中には果して藥料として効能があるかないかは知りませぬが、狼把草のやうなものがあり。又近頃獨逸で發明したといふ胃癌の特効藥白屈菜幾斯の原料たる白屈菜のやうなものがあるに、一方には草烏頭とか、金鳳花などの毒草があるのです。是等は毒草とはいへ却々奇麗な花でありまして草烏頭の如きは兜菊と稱して切花屋が持つて來ますし、又金鳳花は其處らあたりに雜草と交つて能くあるものでありますが、小兒が草花を摘んで遊びます時には、兎角摘んだ花を口に啣へるもので、毒草だらうが藥草だらうが、那麼ことには一向無頓着でして、所謂知らぬが佛で口に入れるのです。固より口に啣へた位で、忽ち滿身に感染するやうな劇毒ではありますまいが、何にせよ毒草と名の付いてゐるものですから、全然害がないとは限りませぬ。先づ有害のものとして注意するに如くはなしです。去れば其保護者たるものは、是等毒草の種類も覺えて置いて、其恐るべきことを、常々子弟に說き聞かせて置くが必要であります。

點茶に就て

田畑夏子

兎角今の世の中はなか〳〵に昔とは事變りまして、御婦人方といへども、お修めなさる學びの道は、年增し多くなります故、身に一寸の御暇もあらせられぬことは申すまでもありません、「たとへ數多の奴婢を使召ひなさる一家の主婦たる御身分でも、猶更多忙になつてまゐります。斯様に學問の道や家業に從

事なさるのみにては中々人間の脳力はつゞきません従つて長命永壽の幸福を得ることも難くなります、そこで心氣舒暢の娯樂と申すものが、是非必要になつてまゐるのです。さて娯樂の道と申さば種々雑多のものがあります、中に殊に女子の道として修めなければならぬ茶の道こそ至極恰當のものと考へられますゆゑ、世の婦女子達には是非勸め申しておきたいのです、本紙上を借りてお話しいたしたう存じますことも此の一事であります。

それ茶道は、紅塵紫埃の中に靜座し主客相對して一椀のお茶を喫せば、身心自ら清寂として仙境に入るの心地せらるゝといふことは、これ偏に茶の湯の一德と申さねばなりません、しかも茶の湯は清潔の二字を以て旨といたして居ります、然るに世の心なき人は、茶の湯に用ふる茶碗は一個で數多の人の用にあてることからして不潔も甚しきことに思ひなさる方もありますが、決して左様のことはありませぬ、なぜと申せば釜の湯は松風、岸波、魚目、無聲と云ふ清き音を發して煮立て居ります、一々其湯でそゝぎ清き茶巾で清め式法もて茶をつぎ又湯をつぎ茶筌もてたてまして上客に參らすのでありますから、極めて清淨のものといはねばなりません、古人の言にも茶は清きを以て心とすと申されました、又古歌に

身も奇麗心も清くなるぞかし
茶の湯の道のふかくなるほど

など、申しております、其他茶の湯につきましては色々と有益なる詞歌や來歷のおもしろきお話も澤山に御座いますが、皆様方の中には既に御了知の方もあることゝぞんじます、

世の人の中には茶式茶の湯とさへ申せば一途に六ケ敷く窮屈なものと思し召さるゝ方が多く、席に招じて一服振舞ひ申さんと進めせば、矢鱈に畏氣を生じて震ひ戰き、或は病氣に言葉をまぎらして、之を避くることをいたします、折角の主人の厚意が何にもなりません、誠に笑止千萬の至りです、而してお茶の効能は種々なる方面に向つて有益であります、其

令孃の旅行演習

『余が家の憲法は、子供の通學は單身に限り、汽車は三等の外は乘らしめず、雨天で無ければ電車にも乘しめぬことゝして居る、日本の女子も單獨にて、歐米漫遊を試みる位な勇氣が無ければいけぬ……』と云ふ主旨の下に、加納子爵夫妻（府下荏原郡井新村）は、先づ其の第一回近縣旅行演習として、先年來華族女學校に通ひ居らるゝ十五歲を頭の令孃四名を　千葉縣下大原方面に旅行せしめられしは、昨年四月の始めにて、本年は其の第二回を實行さるゝ由なるが、其の模樣を聞きしに、一行四名の少女姉國子孃(十六)が總指揮官となり、亞ぎに八重子孃春子孃末に夏子孃(十三)が尾をなし、旅行の準備は一種の加納式改良服を纏ひ、一種の大黑頭巾を冠り、柳行李の手提縱二尺二寸各一個づゝを携へ、其中には一枚の寢衣、襦袢、足袋、靴下、手拭、石鹼ブラシ、郵便ハガキ三枚、洗面具、筆墨紙の類等を入れ旅行道筋、日程等は未定なれども、第一回の時は往復四日間を豫算して、宿泊料、晝飯料、電車代、汽車代、茶代、雜費、豫備金等を合せて一人前六圓づゝと定め、而して總指揮官の國子孃が、他三女より一回に五十錢乃至壹圓宛の小使を預り置き是を共同金囊の中に投じ、都度國子孃會計の任に當りて、可成不共通の經濟法をとらしむ、斯くて父なる子爵は、旅行中の要件訓示として、左記の如きを少女等に含ましむ、

一旅行と散步を取違へること勿れ、

二途中の事物に留意して、各自の感を手帳に記し、歸宅後これを演說するの資料とせよ、

三四人ばら〳〵になりて行く可からず、旅行中は殊に中能くして、互に忘れ物などせぬせう氣をつけ合ふ可し、

四汽車の停まるに注意し、且つ乘り降りの地點を誤ること勿れ、

五勝手に買物などなす勿れ、

六旅中の經費は、各手帳に書き留め計算に間違ひなきやう注意す可し、

七宿屋に着きたる後外出する時は、荷物を宿屋に托し、四人一緒に出掛く可し、又入浴の時は二人づゝ交代す可し、

八途中萬一道に迷ひ又は當惑することが出來たならば、巡査に尋ねて保護を乞ふ可し、若し巡査が見當らぬ時は、風俗賤しからぬ年寄に依賴せよ、

倘子爵は自身の名刺に左の如き文を書して各少女に一枚づゝ渡さるゝ筈なりと

子女四人獨立旅行習修の爲め貴地方面差遣致し候に付、萬一途中にて不意に出來事に遭遇候はゞ、何卒相當の御保護被成下度候、

食品月令

月	食品
一月	白魚、鯉、鮒、はぜ、大口魚、鯛、芝えび、伊勢えび、烏賊、章魚、牡蠣、蜆、雁、鴨、家鴨、菜、陸芹、若海布、蜜柑、からすみ、
二月	鰆、ほしかれひ、いか、春菊、土筆、蕗の薹、鶯菜、ほうれん草、三ツ葉菜、其他は一月に同じ、
三月	若鮎、さば、鰆、飯だこ、かれひ、かながしら、きす、こち、鱒、鯉、鮒、鮎、蛤、あさり、栄螺、赤貝、雉子、山鳥、小鳥、三葉、芹、花柚、生椎茸、鹿角菜
四月	鱒、めばる、櫻鯛、ひらめ、鰻、鰈、竹の子、うど、莢豌豆、初茄子、じゅんさい、莢隠元豆、鯖、あんかう、
五月	鯉、あなご、どぜう、鰻、いな、年魚、鮑、しじめ、百合根、茗荷の子、蓮芋、青蕃椒、摘み菜、水芹、そら豆、せうが、白瓜、ぜんまい、
六月	いはし、こはだ、鯵、家鴨、牛蒡、人参、枝豆、夏蕨、百合根、冬瓜、藤豆、新芋、蕪、早松茸、あらめ、茘果、杏子、夏蜜柑、
七月	きはだまぐろ、黒鯛、紫蘇實、生椎茸、茄子、隠元豆、もやし獨活、干瓢、夏ねぎ、玉蜀黍、芭蕉實、鳳梨、心太、
八月	鮭腹子、海鼠、さはら、いなだ、蕃藷、なた豆、しめじ茸、西瓜、まくは瓜、素麺、葡、梨、グスベリ、
九月	ぼら、かじき、生鮭、かます、きす、くはゐ、蓮根、桃、梨子、なつめ、銀杏、くるみ、葡萄、
十月	ほうぼう、さんま、松茸、初茸、しめじ茸、新蕃蔘、芋、細根大根、柚子、栗、柿、
十一月	目鯛、むつ、伊勢えび、たいらぎ、松露、大根、はうれん草、黒くはゐ、生海苔、蜜柑、林檎、
十二月	ひらめ、うごひ、はも、白魚、大口魚、鮟鱇、かに、新鹽鮭、干海苔、根芋、菜、大根、ねぎ、蕪、鳥獸肉、

例は古今此の途の來歴に多く見受くることで御座いまして、一服の茶よく病を醫することが出來るのであります、茶の法式としまして客たる人は止むなき事故の外は主人の厚意を無氣に之を避くることが出來ぬことになつて居ります、古歌に次の如きものがあります、

酒はたゞ計りなきもの下戸上戸
　茶の湯の時は亂に及ばし

又茶道は世人が思ひなさる樣に決して至難なものでもなく、厭ふべきものでもありませぬ、唯世の俗塵を避けて單座長時に渉るまでのことにて、寧ろ學び易く最も興味の深き有益なる娯樂と申さねばなりませぬ、加之ならず茶道は座作進退の禮及び障子の開閉の法より、普通の禮式は悉く此内の骨髓となつて居りますゆゑ古へより上下貴賤の別なく盛に行はれし道ですから、之を一通り修めなされば從つて品位も自然に備はり、社會よりは敬慕を受くるに至ります、

昔豐臣秀吉公が千の利休を寵愛せられて、茶道をお好みになりましたが、こは大に御深慮あらせたまひしことに聞き及びました、皆樣方にも既に御了知のことですから重ねて申しませんが、何分當時は打ち續ける亂世に未だ人心は殺氣を脱する能はざる折柄自ら茶道を究めて此の法式を普及させて以て大に人心を鎭壓することを努め、萬民を塗炭の中より救ひ世は泰平の安きに計らはれしと云ふことでありますこれ公が古今絶無の大偉略を企てし其一つであります、斯の如く往昔兵馬倥偬の際にあつても此茶道を以て英雄豪傑の心を和らげました例も少なくありませぬ、

又茶道は朋友の交誼を親密ならしめ、起居禮節を失はず、談話の調を亂さず、質素を貴び驕奢を戒め、飲食度に適ひて主客共に清雅の娯樂を得るものは獨茶の道にありと申すことが出來ます、

心とはいかなるものをいふならん
　墨繪にかける松かぜの聲

生花に就て

水島芳子

さて花道と申しまするど、室内の装飾ばかりではありません、心を養ひ、道を悟るの良法でありまして若し閉室に坐して、花を執り瓶に向ひまするど、其心自ら風流になりまして、いつしか塵事を忘れ、花も我も天地自然の精神になり、家事につかれたる心をいかばかり慰むるかもしれません、

花形は本勝手逆勝手とありまして、眞、添、體の三つの外は皆あしらひであります、松月堂古流などでは、正、令、通、體、留の五形より成立つて居りまして、流儀に依て一つには申されませんが、今一番廣く行はれて居りまする池坊に就て申しませう、第一嫌ひまするのは、添の下が體の下へ枝の出ますこと、又添體より外へ枝の出張りますること、又十文字切、胴切、窓切、丈くらべなど何れも嫌ひます、花法はどれを見ても同じやうでありますが、風情は草木の出生によつて千變萬化します、又花のなき草木でありましたら、體には必ず花のあるものを用ひたいものであります、本勝手と申しまするのは、向つた左に添の出ます花で、逆勝手とは、向つて右に添の出る花であります、又體の方を客位といひ、添の方を主居と申しまする、

草木は深山幽谷のと水陸に生ずるのとを、よく心得おきて取組まねばなりませぬ、山草と野草と一瓶に生けまする時は、山草は上で水草は下であります、水草と陸草とは一瓶に生けるものではありません、尤も水盤に根分にして生けまするには、石の置方によつて差支はありません、二重切へ上に草木、下に木を生けることは苦しからぬ事であります、これは山に草あり谷に木ありといふ意であります、

掛物に對して生花の位置は、掛物が横物でありますれば正面におき、一行物であれば脇に置きます、されば通例横物の時は掛花を用ひ、一行物であればおき花を用ひます、掛物の畫が人物でありますれば、

畫の十分見えるやうに活けねばなりませぬ、尤も床が狹くて花がさはりまする時は、落欵のみをよけて活けます、二幅對の時は、二幅の間へ花の眞を振込みました、掛物の畫と同じやうなもの、例へば花の畫の掛物の前には、梅の花を活けては不都合であります、之に反して梅といふ字の前に、梅の花を活けるといふやうに、文字でありますと差支はありません傳花としてむつかしく申しまするのは、松竹梅、紅葉、梅、實物、葉物、蔓物、萬年青、牡丹、朝顏、椿一輪、芭蕉、水仙、蓮のやうなものであります、花の根止は水盤の根留は觀世水を用ひて、薄端、廣口、細口、百度切、一節切、二重切等に花器に用ひまする、又花配りの木は、松葉配り、琴柱配りの二種あります、

長壽の方法

教授のボイド・レーナルドは次の如く長壽の方法を論じて居る、

其一　何によらず過度を戒むべし、特に飲食につきて然り、

其二　食はんが爲に生くるにあらず、生くるが爲に食ふと心得べし、故に食物は身體を養ふ滋養物に限り、之を傷ふもの決して取るべからず

其三　新鮮なる空氣を親友とせよ、日中は出來るだけ多く空氣中より酸素を吸入し、夜間と雖も寢室の窓の上部は四寸位必らず開き置くべし、冬の最中にても、之を忘るゝ勿れ、之れ長壽の一大法

其四　心身を共に清潔にすべし、清潔は敬神に近しといふにあらずや、病氣を防ぐには之に増す利益なし、

其五　惱む勿れ、悲しむ勿れ、一見之れ冷酷なる哲學に類し實行しがたき觀あれども決して然らず、惱み悲しむものは意志の力によりて自殺すると同じ、惱むは死を意味す、

其六　仕事を悦び怠惰を厭へ　爲すなくして暮す人に長壽者なし

其七　常に嗜好を有せよ、嗜好あらば心身に暇なく、浩々として元氣あり、早く老耄する恐れなし、

其八　規則正しく新鮮の空氣中に運動せよ、但し運動を過す勿れ

其九　熟睡し早起すべし、

其十　感情の刺戟を愼め、凡て情の亂るゝ短命の媒介となり、甚しきは死を招くに至る

其十一　必ず目的を持て、確固たる目的を持たずして長壽を望むは、木によりて魚を求むるより難し、

其十二　人生の好伴侶を求むべし、併し早年に於て妻を迎ふるは宜しからず、

此他大家名醫の唱ふる長壽方法はいろ〳〵あるが、何れを參考としても餘り大差はない歸着するところは、七情五慾を制し、高尚なる理想を持ち、平和の氣風を養ひ、日毎々々を最良に送り、萬事の眞相を看破して誤解を避け、身體を健全に保ちて精神の愉快を多くするにあるのだ、

いとし子

文學博士夫人　三宅花圃



黄金にもますとはいまだ大かたのことわざなりけるかな、天變地異のゆくりなくて、すわやと云ふまに歴しうたるゝもの數をしらずといふほど、我身危ふしとおもふより先に早くも、子供は抱きて懐にあるなりけり、生ける者誰かは生をゝしまざるべき、身を以てなどは口にも云へ、子の上にあらざりせば、いかでさは不識の間にかくのごとくあらめやは、天井をはしる鼠の騒がしきは夢にさはらぬ夜半もいとし子の乳さぐる氣勢にはやがてまばゆからず目もあくぞかし、まことに子持つ親のすき間の風も心せらるゝ冬すぎて、梅も散りがたになれば、着せたる物も一つはぬがせて朝夕心やすくおほゆなど、すきまなかるべき親心の、いつかひまもとめられて、ふと風などひかせて後、にはかにときめく心の、しづめあへぬこと春たけしこのほどにありがちのためしなるべし、我家の近くに小兒科を專門の醫師あり、日に六七十の患者ぞ門に出入すなる、生れ出でゝ十日ほど過ぬと見ゆるより十五位までぞ多き、いづれは母なり祖母なりかしづきて、眞玉と斗り抱きたるは、らうたき子よりも先づ其心ざまの甚美くしう見ゆるよ、うちひそめるは、重き病にもや有るべき、眉うちひらけたるははやつくろひがたなるべきものか、出るも入るも吾佛とかしづきたる他念なきさまぞ、人のまことのつゝみあへぬがうつくしきとはた、この子達のいづれも〳〵らうたくて、この門にはわれもしたしう出入る病もちの身とて、こゝにしあれば他人の子ともおぼえずして心ぞなぐさむ、子供のみの中に一人立交じれるも他所目おかしうおぼゆらむなれど、病めるが母らしきさまにて、近きを何よりの幸とこゝに藥をもとむる也けり、一日の事なりき、

七ッ八ッの我子のほど〻おぼゆるが、下女と見ゆる女の脊に負はれて來たりぬ、よく歩みても來べき年のほどを、足の痛にても、と見やるほどに、たゞキャ〳〵と脊の上にて叫ぶ、下女はたしなめて靜にしたまへ、下ろさばまたもいたづらのはげしからむをといふに、少しはしづまりぬ、しばしするほど、此女の髮をむしり脊を打ちて腰を蹴りてはねつをどりつ騷がしうキャ〳〵と又ぞいふ、いぶかしきはものは得いはねど耳は聽ゆる氣勢なり、さらば啞にもあらざるべし何の病にても例の心ぐせにさても見すぐさず、後に醫師にかれは如何にととひきけば、醫師はいかにもかれはあはれなる子なりとてひそめきていふやう、さても子をおほしたつるにいつを心してといふ限りはあらねども、胎敎こそは我等專門家の目より見ればゆるかせにならぬなりけれ、かの子の母の懷姙して六月七月の程、思ひがけなくも初孫見せて、とのみ樂しみし實母は病を得て死去せられき重き身をさりげもなき看病も、効を得ざりし恨みは三日三晩も泣きくらし、泣あかして、悲しみ給しが月みちて生れし子のおもひの外に事なかりしをよろこびしは、まだ心あさかりけり、ほどもなく腦膜炎に罹りて癒し後彼子はあの如きさまにて丈のみはほど〳〵に成長しぬ、耳は聞こゆれども物の辨別なく聲は獸物の發聲なり、五音のわかれぬは聞たまひし如し、父は長男なれば慈しみ深くて十にもならば口もきくべきかと問はる〻は、實に何とこたへむ術をしらず、彼の如き動作の人並ならぬは、親の目に入らで、たゞ男兒の荒き例とのみ思はる〻は氣の毒とも憐ともたとへがたなし、かほどまでに子と云ふもの〻愛深きをみても、いまだ目に見、形に觸れずとも、胎敎はいとゞ心してまし物を、ともすれば、こをなほざりにするかたむきの見ゆるぞうたてき、彼の子の如く偶然の出來事には誰をとがめむ、されども、同じ歎くにも身を忘る〻は慈母ならじ、其他何に寄らず心をひろく持ちて、今は身一つの憂ひならぬを、しかと思ひしめずはあらず、いまだ步行の出

來ぬ子の腦膜炎になるは、多く體内にありての神經感動の結果多きものぞと物がたる、あなあはれ、うれはしき彼子のうへや、ならぬ望みをかくる父の心の情なさよ、まことに胎教などいひて唐の聖賢の文にもいぬるにも形正しかれなどこそはいへ、精神のおだやかならずば何のかひあるべき、今年は丙午などいひていたづらに心なやます人々もありぞとよ、かまへて心たひらかに、體内の子にもわれにも長き一生の苦を殘さゞらむやう心がけまほしくてなむ

日記

醫學博士夫人　小金井　喜美子

日記と云ふものは書き置まほしきものなり、國文の模範とすべき土佐日記はいふも更なること、和泉のなまめかしき、更科の夢がたり多き、猶くさ／＼あるべけれど皆とり／＼に其人々のまことの性あらはれて面白し、こはふるき昔なれど、近き世となりても庚子道の記のざれたる、中空の日記の樂しげなる心つくしの、つゆけきなど、時につけ人によりてさま／＼にさま變りて見ゆるがいとをかし、されど此人々の時につけ折にふれたるのみならで、年月かけて倦まず書き置たまゐしもの殘りたらましかば、いかばかりか面白くもまた益あるべきにといつも思ひぬ、我知りたる大人ははや六十路にあまり給へど、若き時より一日もやめず書き置き給ふとぞ、定めて面白きこと多かるべし、馬琴など其名高き小説よりも其日記の中に亡き子の上を思ひ出たるふしなど、かへりて涙ぐまるゝものあるならずや、先つ年うせ給ひし女作者のなくなり給ひて後、其日記を燒捨つべく言ひ殘し給ひぬとか、いかになりにけむゆかしくこそ、又旅順の戰ひの折、露軍に從ひたる赤十字の看護人のものせる旅順陷落と題せる日記頃日世に出でぬとか聞つ、いかに耳新らしきことあるならむとにかくに日記は作り物語とは異なりて、思ひ出ともなり、又樂しみともなるものなれば、おのれも記

し見むと思ひ立ても、またいつしかやめて長く續かぬこそ耻しけれ、長き年月の中には嬉しく悲しく、旅行したる留守居したるまれ人の物語幼子の一言など、はかなきこともほど經て見れば其事柄はもとより、其文のかき樣も其頃好みてよめるものに知らず〳〵似かよひたる、繰返し見ればおのづから打笑まるゝものぞかし、幼なきはらからの娘等にも今よりかき習はせばやと、長き休の折などに美しきとぢ本もとめて與ふれば、喜びて夜々かきて見するがいと面白し、姉なるはともかくも文につゞり折には畵をさへいれ、又は摘取たる草花を押してはりなどす、幼きかたは初めはいろはのみなりしが、今は少しづつ字をまぜて記しぬ、休のころとてともなひて遊びに出などすれば、今日は書くこと多くていかにせんなどいふ、犬に追はれて泣たる日など『犬に追はれておそろしうございました』とのみかくを、泣たるをばなどかゝざると言へば耻しければといふ、耻しくば其折泣かねてこそよけれといへばしぶ〳〵書くなどいとをかし、よく取揃へ置きて年たちて後見せなばさこそ喜ぶならめと思はる、返す〳〵も日記は誰もかき置まほしきものなりけり、

日記のうち

文學博士夫人　大塚楠緒子

三月十八日

そら麗かに晴れたり、小學校に往く姉も幼稚園に通ふ妹も、今日は日曜日なれば、朝飯のすむやすまぬに、はや椽側に手まりのつきくら『孝行村のなかむらの、なかむら名主のいち娘』とうたふ、

食臺の上やうやくに片附く程、八百屋の御用うかゞひにまゐりたればと、下婢のけふの總菜をきゝに來る、さても毎日の事なれどいつも〳〵困ずるは一日の献立なり、一週間の表を作り見しこともあれど、小人數には却て不便を感じて止めたれば、毎日朝毎に晝と晩との献立を定むるを例とす、きのふはビー

フステーキに爲つればけふは、夕食は鳥肉と根芹、葉は鳥肉のつけ合せとし、根は別によく洗ひて油にいためて味をつけ置くべく、ほかに竹の子をと下婢にいひつく、

まもなく肴屋の來りつれば小鯛一尾晝の料に作らす、午後は子供等例の椎の木へと女中を連れて遊びに出でつれば、火鉢の間始めて少し靜かなり、此間に小川町へ御約束の心の花への續きしたゝむべくと、帳面と鉛筆とを前に置きて、あみかけの靴下あみながら、彼の華族の姫君を如何にすべき病みて死ぬことにせんか、死なせぬことにせぬことになさましかと考ふるほど、かた〲と妹の子の下駄の音先づきこえて姉と二人歸り來ける膝の元、再びにぎはしく想は散りて一行も書けざりき、夜に入りては雜誌などたゞ讀みちらしつ、

三月十九日

けふも天氣よし、蕾なりし庭の萬年靑、今朝小さき口にくちべにさしたるやうに開きたるいと嬉し、洗張もの爲さすべくと、洗濯したる切地の類を撰り分けて下婢に渡す、不漁にて魚類少なく價も高しとなれど、青肴は主人の好まざれば、今日もまた晝は鯛の鹽燒、なが芋

女藝十圖（其の四）點茶



の煮付にして、晩は牛肉のスチューに總菜は、わかめと、むきみのぬたと定む、姉の子の乳母久々にて、林檎のうづ高く籠に盛りたるを手土産にてたづね來る、相も變らぬ快濶なる調子の面白く、いつまでも〱忘れずに訪ひ來る心根の嬉しく、暇やりつる折に遣したる糸織を羽織にして今日も着て來る、それも憎からず、十一になる姉の子を今も乳呑ませし程のあしらひして、何かといたづくを、子はなか〱にきまりわるがれど、猶なつかしげに膝にのせられながら學校の事など語る、久々なれば歸ると云ふを强ちに夜深うひき止めて、さて名殘惜しげに歸りゆくを、名殘り惜しくかへしぬ、

この夜はかにかくとものにまぎれたれば、小川町へまゐらすもの一ふでも書けず、夢の内にも工夫せばやと、十一時過ぎてうち伏す、



母親の衞生十則

▽第一　母親は規則だちたる劇しき用事をなすべからず、唯其職務は哺乳兒のことを注意するにあり、

▽第二　食物は充分滋養ある柔らかき消化し易き物を用ひ、飲料には爽快物を撰み醱酵性又は身體に熱を起す樣なる物を用ゆ可らず、

▽第三　肉類のみを食すべからず必ず野菜魚類等あれこれと取混て食し、殊に澱粉質の物、米麥饂飩蕎麥葛粉芋藷類砂糖等を缺くべからず、尤も餘り焦げたる物或は辣きもの及び酸味は食す可らず、

▽第四　母親は常に清潔なる空氣の中に住居し、決して密閉たる室内にのみ居るべからず、且つ日々適宜の運動を爲すべし、去れど舞踏馬乘遠道力業等激しき運動は爲すべからず、尤も極端冷熱を豫防して衣服に注意すべし、

▽第五　乳房を大切にすべきは勿論にして、餘り堅く締め又は壓着すべからず、且つ戸外にて胸を披くは宜しからず、

▽第六　母親は夜分充分の安眠を要す、晝より夜にかけて夜より朝にかゝる如き仕事を爲すべからず、

▽第七　凡感情を動す事を愼み只夫婦の間の睦ましきを望むべし、

▽第八　憤怒驚愕非常の喜悦發熱等ありし時は、先づ一回乳を搾り出し而る後一二時間を經ざれば小兒に哺すべからず、

▽第九　常に己の健康に注意し、其强壯なること望むべきは勿論なるが、若し食慾進まず腹痛み酸液を吐き便秘或は下痢してチヨーズの色變じ、又は濃くなり心悸激しく下肢に痲痺を發し、又は水腫ある等の病氣あらば、直に醫者に診察を頼むべし、

▽第十　母親は小兒を管理する女主なれは、其子供に對して常に指揮者たる位置を保つべし、假令之を大切にする目的なりとも、一度自ら奴婢の如くなる擧動を爲したらんには己れ母親に權利を失ひて、終に小兒の輕蔑を受け後年、非常の障害となるべし、

家事實用

奥様の一日

（小間使日記の一節）

川田銑子

▼午前五時

曉の鷄の聲、戸の隙間漏る朝の光り、午前五時の時計が鳴るのを合圖に、奥様は今朝も疾く起き出で給ひて、奥座敷の雨戸繰らるゝ音するに、妾と今一人の小間使、共に目は覺ましながらも、春の曉の寢心地よさに、起き出て兼ねてゐるほどに、早くも奥様は雨戸殘らず開け給ひて、女中部屋にいぎたなう熟睡して、昨夜の夢まだ覺めやらぬ下婢ども起し給ひ、次ぎには襖の外より、既や夜の明けぬればと、妾等を呼び起し給ふこと常に變らず。

▼午前六時

奥の間、客間、應接間、朝の淸掃は奥様主宰となり姉様冠り、十字の襷甲斐〲しう、了れば既やくも朝の食卓は整ひあり、旦那様、奥様、坊様、孃様、妾どもまで同じ食卓に列らなりて、一日の樂しき團欒の序幕開らかるゝが常なり、食事了れば奥様は、坊様方を先きに、次ぎに孃様方のお髮を直し、お召物まで世話せられて、夫れ〲の學校へと出で立たせ給ふ。

▼午前七時

旦那様の御出勤時間なり、是れをも奥様何にから何まで世話せられて、妾等の手を煩はし給ふことなし この間に妾等は下婢を扶けて、臺所に立ち働らき、了れば奥様共々身粧して、朝の勤めは終る。

▼午前八時

奥様は例に依りて、妾二人を相手に、是れより裁縫

の業にかゝらる、奥樣は高等の女學校に通ひ、高等の敎育を受け給ひしと云ふにはあらねど、書籍共にうるはしう、生花、茶の湯、何に一つとして心得給はぬと云ふことなき中に、裁縫の業には殊に秀で給ふものから、平常着の單衣縫ふことさへ覺束なかりし妾も、御奉公に上がりてこゝに二年足らず、今は絹物さへ最と安らかに針運ぶことを覺えつるぞ嬉し。

▼午前九時

この頃よりぞ、出入の商人、御用伺ひにとて來る、奥樣は其の都度裁縫の傍ら是れを迎へて、何にくれと用を命じ給ふ、されど忙しとやうの御氣色微塵もなく、物優しう商人を遇し給へば、何れも懷きて、其の德高きと稱せざるはなし、軈ては人の妻たり、一家の主婦となる身の、妾等もまた斯くの如くありたきものと、露忘るゝ時とてはあらねども、不束なる身の末のことのみ案じらるゝこそ愚かなれ。

▼午前十時

十時より十一時までは、殊にお客樣の多き時なり、大方のお客樣は應接間、御懇意なるはお座敷に請せらるゝが常なり、お客樣のうちには、五分間で濟む用をも、二十分、三十分、軈ては一時間も長座さるゝ方あり、是れと云ふ大切の用もなきに、お門を通りたればと云ひて、芝居の噂などして歸へらるゝ呑氣な方あり、大廂に金縁眼鏡、東京パックの荒馬物語より拔け出したやうなハイカラの、厭らしい孃樣あり、聞けばこの孃樣方の奥樣を訪ね來らるゝは、學校卒業の上は如何なる處世の方針を執りたらば宜からんか、奥樣の御意見を叩くと云ふにある由、是れらは皆な奥樣の御迷惑なさるゝお客樣ばかりなれど、氣質優しき奥樣は、御病氣の外、唯の一度、忙がしければとて御面會を斷り、お客樣を失望させて歸し給ひたることなければ、素より不在を使ふなどの詐り云はれたることなく、如何なる人をも快よく迎へ給ひて、滿足を與へて歸し給ふが常なり、世に交際に長けたる夫人と云ふは、吾が奥樣の如き方をや云ふならん。

▼午前十一時

奥樣は臺所に、下婢を相手に午餐の仕度、妾等は裁縫、是れにては主從の役目反對なり、お臺所は妾等仕らん、奥樣是非にと再三請ひまつれど、否とよ、和主達は嫁入前の大切の身、習ひ覺ゆることの最と多ければ庖厨の事は晩餐の調理を日課として、吾が導く業にいそしめよとて許し給はず、如何に優しき御心ならずや

▼正午十二時

午砲合圖に食卓につく、日曜祭日を除くの外は、旦那樣在さず、坊樣、孃樣のおはさぬに、食卓の邊り物足らぬ心地すれど、三人の

れ。

女藝十圖（其の五）插花



下婢列なるを以て、さのみ淋しとも思はず、食後一時までは、奥樣も、妾等も、下婢も、共に休憩の時間なり。

▼午後一時

下婢は裁縫のお稽古、妾等は茶の湯、生花を一日替りに教はる、心おろかなる妾の、物覺へ惡しきも見捨て給はず、吾が子教養る丶如く懇に教へ導きて、些しの倦み厭き給ひたる御氣色なきに、妾の心おのづと勵み立ちて習へども習へども、思ふ萬分の一だに進まぬぞ、恥かしくも亦た口惜しけ

▼午後二時

再びお座敷、客間、應接間の淸掃をなし、夫れよりお庭園の草を引き、塵を掃く、善き運動なり、奥樣は、衞生、體育と云ふことを重んじ給ふものから、斯かることをも自らなし給ふなり、御親類の奥樣達のなかには、赤樣は乳母に托して人の子の如く、日髮日化粧、朝より夕まで、裝長く籐椅子に、絹の褥に身を凭せて、新刊の小說、婦人畫報に新聞雜誌を侶として、十日に一度は必ず何某の醫學博士迎へ、病身なればと慈善事業にも手を出し給はず、家にのみありて小間使、下婢を叱り給ふを樂しみの如くせらるゝ方あり、其れと此れとを較べては、白木屋の店頭の人形と、生きたる人との違ひあり、美くしけれども人形には魂なし、斯かる奥樣に仕ふる人こそ氣の毒なれ。

▼午後三時

旦那樣、坊樣、孃樣お歸りの時間なり、奥樣は旦那樣のお書齋へ、妾等は坊樣孃樣のお部屋を、夫れそれ取片附けて待ち參らすほどに、軈て皆樣歸り來給ふ、奥樣は旦那樣にお不在中來客のありしことやらお手紙のことなど落ちなく申上げたる後、坊樣孃樣のお召衣の汚れなど淸め給せて、いそ〳〵しう立ち働らき給ふ、妾等は坊樣、孃樣のお供して、お庭園にてテニスやら鞦韆の遊戲に時の經つを知らず。

▼午後四時

晩餐の調理とて、奥樣は襷掛け、妾等を指圖して、臺所に働らき給ふ、まこと妾御奉公に上がりし當時は、まだ十六の、御飯焚く竈の下の火加減さへ、能くは心得ざりしものを、今は奥樣の御敎へ受けて、日本料理の一通り、西洋料理も初歩丈けは習ひ覺えて、奥樣御病氣にて臺所に出でまさぬ時あるとも鹽の加減、火加減に心痛むることなきやうなりたる女の身として、嬉しき極みなり、一日の料理は、前日に極め置かるゝが常とて、料理にかゝりて後、不足のもの補はんとて、下婢を八百屋に走らするやうのことなし。

▼午後五時

旦那樣を正座に、妾下婢どもまで一同揃ひて食卓につく、賑はしき晩餐なり、食後は茶を啜りつゝ、坊樣孃樣の、今日學校にてありし面白き事、往復の途中目に觸れし珍らしきもの、お話を承はる、こは奥樣より晩餐後の食卓を賑はすべく、且ては觀察の智識を養ひ、談話の術を覺ゆる爲めにとて、坊樣孃樣に、特に爲させ給ふことなるが、坊樣も孃樣も、今夜の食卓の花役者には吾れならんとの御心より、道行かるゝ時とて他念あらざれば、時には旦那樣奥樣の、感じ入り、聽き給ふやうの談話の材料を持ち歸へらるゝことあり、坊樣孃樣に續きては、旦那樣先年洋行せられたる時のお話、蠶の糸を吐くやうに、今に至れど盡きず、妾等學淺きものも、每日每晩の食卓に、興深う語り聞かさるゝ旦那樣のお話にて、泰西の名婦が遺せし偉大なる事業や、名所舊跡や朧なからも覺へ行く、妾等の何時までも何時までも、斯かる優しき旦那樣奥樣、偖ては愛らしき坊樣孃樣の、お傍を放れたくなしと思ふ、また無理ならぬことぞかし。

▼午後六時

旦那樣を始めとし、奥樣お子樣達はお庭園の散步、妾等は下婢を扶けて、臺所の片附けす、お庭園の彼方には孃樣の優しく麗はしき唱歌の御聲、坊樣の駄々兒云ひ給ふ御聲、旦那樣奥樣の、笑ひ興じ給ふ御聲の聞ゆること常の如し。

▼午後七時

年上なる孃樣はピアノ、琴の温習、妾等は坊樣、年下なる孃樣方のお相手となり、ピンポン、投球盤等の遊戲に耽ける時もあり、旦那樣奥樣皆な打ち揃ふて、球突きをなさるゝ時もあり、五時の晩餐よりこの時に至たる三時間は、實に一日中の尤も樂しみ深く興淺からざる時間にして、他家樣の家庭にはまたと見らるべくもあらぬ團欒なり。

▼午後八時

旦那樣はお書齋に、孃樣、坊樣は夫れ〳〵お部屋に

入り給ふて、御勉强あり、妾等も亦たこの一時間を讀書と習字に費すなり、奧樣は一日の日記を誌され明日の献立をなさるゝが常なり。

▼午後九時

妾等は、坊樣孃樣のお床を布べ、夫れより雨戸を繰るを一日の仕事の納めとす、この間に奧樣は、下婢に習字、珠算など敎へ給ふ、軈て十時近き頃ともなれば、憊れつらんに關はず先きへと、妾等幷びに下婢を勦はりて臥床に入らしめ給ひしの後、火の元、戸締り等殘る隈なく見廻はり給ひて、臥床に入り給ふこと、一日として異ることなし、十年一日の如しとは、斯かる行ひを云ふにやあらん、實に奧樣は規律正しき方なり、されど世に云ふ嚴格一方の方にあらず、能く妾等召し仕ふるものを勦り導き給ひて、苟且にもお小言を云はれたることなし、されば妾等もまた其の德に酬い奉らばやと、心を籠めて仕ふるほどに、過失なくて、今日までは過し來たれり。

▼奧樣のお手本

奧樣は家庭のみにても充分のお勤めはあるものを、何々の婦人會、何々の慈善會と、御用はます／＼増し行くばかりなれど、少しも御迷惑なる御樣子なく會日には不在中のこと妾等に托し置かれて出で行かる、この外妾等の他に嫁がん時の準備にとて、貯金其他の方法を設けられ、今月は何程になりたり、今一月立てば日頃望みの帶購はるべしなどの給ひて、勵まさるゝ御親切、親にも增る御恩、山よりも高く海よりも深し、實に奧樣は、世上の奧樣の善きお手本なり。

▲郵便差出の心得

一、四匁を超過せる封書を四匁以内と誤認し、三錢切手を貼附して差出す時は、受取人不足料金の二倍即ち六錢を徴收せらる、受取人若しその郵便物を受取ることを拒む時は、再び差出人にかへり來りて、其不足料金を支拂はざるべからず。

二、取急ぎて全く切手を貼附せず投函することなきに非ず然る時受取人は未納料金の二倍を拂はざるを得ず。

三、切手を貼りたる後、その邊に文字を書き切手を汚す時は、その切手は無効となるべし、ハガキにありては此心配ことに甚し、何れも自己及び他人に損害ある事故、注意すべし。

來客と裝飾

稻波貞子

客來たりたる時の心得、客となりし時の心得、客をまつ爲の裝飾、之に對する心得等、世の中に廣く交際する人はつとめて覺え置くべき事なり、

主客の心得

自分と同じ程の人、或は珍らしき客など來りたる時は、自身に送り迎へをなし、座敷の上座に招すべし、客主人と同じ程の人ならば對座し、主人より目下のものは下座に座すべし又時機を見て、床の飾り、掛物などを見て奥床しき心掛さては、其器など賞美する心得あるべし、歸りざまに氣づきて見る如きは宜しからず

煙草盆の出し方

客の左へ火入、右へ灰吹とおくやうに兩手に持出で二膝ひきて立つなり、その出し方は、客の前凡そ三尺ばかりの所にて踏そろへて、右足を左足より半足あとの方へ引きて、右膝より跪づき、次に左も跪つきて、右膝を少し引て、爪立たる踵を平にし、左膝を少し引きて、爪立たる踵をおろし、坐りて煙草盆を下におきて兩手の掌を上にむけて、第二の指の横にて押すゝむ、退き方は大方の時のやうに倣ふべし、若し饗膳等持出たるに煙草盆眞中になりて据えがたきときは、先づ膳を上座の方において、煙草盆を少し引出し持て、脇の方



松平子爵令孃　たい子

に置直し膳に据うべし、

火鉢の出し様

兩手に持出て下におき、重きもの又大きなるものは兩人にて持出で、少し前に進むべし三足の火鉢は足二つを客にむけ、角形のは火鉢の曲らざるやう何れも火箸は客の方に寄せておくべし、又持出でやうは三足のものは右の手にて縁を持ち、左の手にて手前の方の足の中程などを持ち、角のものは左の手にて下をうけ、右の手にてはしをもち、丸きものは左の手にうけて、右の手を左の胴にそふ、



津田男爵令孃　信子

兩人して持出る時は左右にわかれて送り、足は横に歩み出るなり、

炭のおきやうは、炭取に火箸を添へて持出で、まづ火箸にて火を直すべし、因に云ふ古法は、炭は手にて置きたるよし、

湯水の出し様

湯は臺に据えて右の手に持ち、左の手を添へて、水は左に持ちて右の手を添へ持出づべし、そは湯は熱きものなれば取落さゞらんためにての心用ゐあり水を取落すも手足をそこなう事なきゆえに斯くするなりとぞ、

茶の出し様

煎茶は天目臺に据ゑ、それに蓋し、兩手の一二の指にて縁を持ち、殘る三指にて下より受け、かくして客の前に持出おき、左の手にて蓋を取り、そを臺の縁にかけてまゐらすべし、こぼれ物なれば體の据えやうなどに注意して、疎忽なきやうにすべし、やが

て客茶碗を取りて後、臺に蓋をおき持ちて立つなり又略儀にて蓋なきも、心得はすべて同じ、

茶の呑やう

同じ程の人の家にて茶を出されたらん時、まづ蓋を取つて進められたらんには、茶碗を取りて右に持ち左の掌にのせて、右の手をも其下にかさね兩手に持ちて、少し下座に向きて呑むべし茶碗のはしに指をかくるはわしゝさて呑み終らば其茶碗を右膝の前におくべし、又臺に据えて出され、茶碗大きければ臺と共に受取り、右の手に臺を持ち、左の手にて茶碗の下の方を持ちて、臺に据えながら呑み小茶碗ならば、臺と共に受取り、臺をはずして右の膝の前におき、左にて茶碗を持ちて呑むべし、

扇子の出し樣

地紙の上の方より三寸ばかり下の所を、右の手にて竪に左におや指、右に四指として持ち、左の手を仰け、右手より下の骨の所を受けて持出て、客の三尺ばかり前にて踏止まり左の足を半足跡の方へ引てまづ左より跪き、次に右をも跪き、爪立たる踵を平にして、兩肘を兩膝頭の邊までさぐるやうにし、謙みて客の手に取らるゝやう少しすじかひに右の手の方をさげ、左の手をあぐるやうにしてまゐらし頭を兩手とゝもに下ぐべし、



粟田口男爵令孃　能子

扇のつかい方

貴人の前にてはふつゝかに遣ふべからず、暑氣の頃

風を呼ぶには、四五間ひらきて左手をつき、うつむきてしづかにつかふべし、

水菓子出しやう

水菓子は先づ小刀を洗ひて、臺に据ゑたるまゝ持出で、客の前に一禮して、皮を剝くなり、柿は其大小によりて手にも餘らば皮をむかざる前に二つにわり、又頭の方より剝くものなり、又小なるは、先へ枝を取りえだの方よりむく、さて二つに割りて參らすなり、

梨は、先づ花留の方より剝きて折敷に押當て枝つきたる方は、竪に二つにも四つにも割きて半月の形に切り、さて皮をむくなり、

又瓜は六刀半に皮をむき、又竪に四つ割にしてさし出し猶大なるは幾つにも割るべく、土用中は輪切にして進らするもよし、

掛物の懸やう

右手に、掛物と、鶯竿を持添へて、右の腰のあたりに、竿の先を目通りにして、すこしさぐるほどに持ちいで、床より三尺あまり前にて左足を右足より半足、あとにひきて、左膝をつき、右膝をつき、右膝をすこしひきて、踵をすゑ、左膝に左手をそへてすこしひき合せて、踵をすゑてすわり、さて掛物を右手に取り、竿のみを右脇におきて、左手に掛物を持直し、横になして、右手にて卷緒を解き、右の方によせて下におき、少し拔き、上の重の風帶より展して、右脇の竿を右手にとりて、左手にて掛緒を



川田男爵令妹　静子

取りて、筈に挾み、しかして掛物の中程を左手にて下の方より持て、能き程に開きて、左の手を眞中より左によせ、右手にて竿と軸元とを持ちそへて立ち床前にすゝみて、右足を左足のつまさきに冠らせ、左にむきて左足より跪き、右足も跪きて、右足より床により、右膝をうかして右に體をひねりてむきなほり、たりあがり、進みて折釘に掛け、竿の先を掛物持たち左手の拇指に挾み、竿の中程を持ちて、右の方に立掛けおき、兩手を軸にかけて披くに隨ひて、左膝より跪き、開き畢りて、右手に竿を取り左膝をうかめて、右にむき直り、たちて右足左足右足と三足、又左を半足、三足半にかくひきて、横疊をへだてゝ、左足より跪きて居り、竿を脇におきて、兩手を膝脇につきて掛物のゆがみをうかゞひ、ゆがみあらば、幾度も直して、さてたちて退くべし、

二幅對、三幅對の時は、箱の蓋にのせて、竿もおきそへて、持出るなり、又掛かふる時も、新にかくるを、物にのせて出で、右脇におき、まづ前がたの掛物より扱ふなり、

二幅對かくる時は、先に客居、次に主居をかくるなり、又三幅對かくる時は、先に中尊、次に客居、次に主居と掛くるなり、もし中尊、神影、ある尊き人の畫像ならば、中尊を後にかくる事習なり、

さて之を收むる時は、竿を持出で、直に床前に進みよりて、左足に右足をかぶらせて、左に向きて、左足より跪き、右足より横ながら床に上り、右膝をうかめて、右にひねり、むきなほりて一進み膝にてすゝみ、竿を掛物の右の方に立かけおき、まづ兩手にて、軸をもちて、そろ〳〵と卷ながら、たちあがり中程まで卷きたる時、左手にて軸の眞中を持ち、右手にて竿を取り、左手の拇指にさきを挾み、右手にて竿の本をもち直し、折釘よりはづし、あとしざりして、左をむき、跪きて左膝より床をおり、右膝頭をうかめて、右にひねりますぐに、向きて立あがり右足左足右足と三足、又左足半足とひきて、左足より跪き、掛物を下におき、竿を緒にかけたるまゝ、

掛物をひきよせ、竿を筋違ひにして掛物をひきよせすこしまきて竿の所に至る時、又竿をおしながら掛物をひきよせて、竿をすぢかひによせて、緒よりはづして右脇におき、左の方の風帶を上に重ねて帖み卷き收め、右の手に取り、左の手にたてに持直して紐を結び、さて竿を取りそへて、腰のあたりにもちてたちてしりぞくべし、

附記　鶯竿といふは俗にいふ矢筈にして、軸元といふは軸の右の方をいひ、その左の方を軸先といふ、客居と云ふは床の左にて己が方より右の方をいひ、主居とは之と反對なり、中尊と云ふは床の眞中にあるを云ふ、

掛物の見やう

床の前に敷ける横疊をへだてゝ、正面に居直りて見必ず近よりて床ぶちなどに手をかくべからず、さて掛物二幅の時は客居、主居と見、三幅對なる時は中尊、客居、主居と見るべし、而して貴人の筆になりし書畫、又は神佛像などは、下の方より上へ、高山の繪は、麓より嶺の方へ見上げ、草木は根の方より見る等の心得あるべし、又詩歌などかきたるを、聲高らかに讀得顔なるは見にくし、

生花の見やう

瓶の花を見むとするときは、先づ掛物を見ての上にすべし、されど其花貴人の手に活けられたらんには花の方より先に見るべし、さて花の二瓶ならば上座の方より見るべし、すべて立花を見るには七所の目遣ひとて、一に心、二に心隱、三に受、四に添、五に見越、六に前寄、七に流、次に下草を見る、また假初に活けたる花も此心得ありて、一に心、二に流三に留と見るべし、かく花を見終らば花瓶花臺等の模樣に見移るべし、

附記　心は正眞に高く立たる幹、心隱は其前の枝受は心の右脇に挿たる枝（其の右と云へば花の右にて見たる方より左なり）添は心の左にて、受より聊か高く挿たる枝、見越は心に添て心の左の後にある枝、前寄は前置共いひ、心隱の前に低く立たる枝、流は心の右に有て下へ長く挿たる枝を云ふ、

着椅の作法

島安てる子

椅子の設けある席に臨みます時は、まづ主人の勸めに從ひ、その示されたる椅子の下座の側に立ちまして丁寧に御挨拶をいたし、主人の着椅を待ちて其椅子によりたる方の足より出て、三足目にて椅子の正面に兩足を揃へ、靜に腰をおろしますやう、此時よく注意いたしませんと、余程高く見えてありましても、腰を下ろしますとふわりと低くなるのがありますから、急におろすと誠に見惡うございます

また椅子に着きましたなら、腰と膝直角になりますやうに姿勢を正しく兩手を膝の上に置き、飲食の時とても體は餘り屈曲なりませんやうに、またあまり反身になり足を伸し、また足を交叉などし、或は椅子を動搖する等は無禮でございますから、長者の前にては分けて御注意を要します、

歸ります際には矢張前同樣に、靜かに椅子を離れまして下座に立ち椅子の側にて叮嚀に御挨拶をいたし、その時卓上に手をかけていたしますは宜敷ございません、また主人は來客目上の方ならば出迎ひをいたし、後に從ひ行き、上座の椅子などうぞこれに御召を願ひますと、靜かに下座に退き、改めて叮嚀に御挨拶し、後に一禮して倚りますは長者へ對しての禮で御座います、

また來客同輩ならば時宜により、取次の者をして客室に御案內いたさせ置き、後に出で面會することもまた出迎ひて導くも、何れにてもよろしうございますが、まづ客座の椅子を示し己もまた椅子の側ら、即ち下座の方に立ちて互に御挨拶し後、客にも進め己も會釋して着きますやう、

また卓上へ茶菓など進むるときは、室内の模樣にも卓の位置にもよりますが、總て西洋の禮によりますと進むるときは、客の左の方より、また退くときは右より致します、

卓椅子は西洋の風に習ひましたものでありますから、矢張彼地の禮によりますがよろしからうと存じます、私は至つて蟄弊者でございますから、遂に此頃まで日本の事柄もよく不辨して、西洋の事などは及ばぬことゝ思ひましたが、次第に世が開け從つて萬の進歩もなか／＼早く、當時は方々の御宅にても西洋室も御造りになりますしまた外國の方々とも交際を要する樣になりますから、少しは西洋のことも辨へませぬとたらなくなりましたから今までの考へを破り、近頃ある西洋の婦人に就きまして、食事のことや何かを少しばかり研究して居りますが、そのうち御噺も出來まするやうになるかも知れません、たゞ心得て居りますことを少しばかり申上げることにしました



洋燈の取扱法

胡蝶女史

洋燈の取扱ひ方によつて光りが明るかつたり、又は不取扱の爲めに火を失して思はぬ大損害を醸すことがありますから、洋燈の取扱は婦女子の最も周到なる注意を要するのであります、洋燈と石油とは最も深い關係を持ちて居りますので、石油に關聯したことから申しませうならば、疊に石油がこぼれた場合は、これを拭き取る簡便法と云へば、古新聞を敷いて、其上に熱した灰をかけて置くことを二三度繰返えせば、其熱度の爲めに石油は消え去るのであります。洋燈から火事が起るのは、顚覆した時慌てゝ水を懸けるやうなことからあるのですから、然る場合は狼狽せずに、直ぐと附近にあり合せる座布團なり毛布なりを打冠ぶせると、夫れで火は忽ち消えて了ひます、それはこれによりて空氣の這入る道を防ぐので火が消えるのであります、洋燈を掃除した後に、石油の臭氣が手に付いて厭やな匂ひがある時には、古新聞紙を燃やし、手を翳して臭氣を除去するのは、普通誰れでも試みてゐる方法ですが、若し此方法で臭氣が脫しなかつたならは、茶か、煙草を火にくべて其煙に手を翳して揉めば容易に臭氣を脫することが出來るのです。これ等洋燈掃除の場合に於ける石油の取扱ひ法は、先づザッと這麼ところで切り上げて次には洋燈取扱ひ方に移りますが、洋燈を點す時は、釣洋燈ならば釣るしてから火を付け、又下す時は火を消してからに爲たい、這麼風に周到な取扱をしませぬと、自然落した時に石油に火が移る憂ひがあるからです。次には小兒のある家は釣洋燈や置洋燈でなく、柱洋燈を用ゐることに爲たい、然うでないと小兒の過ちに依つて顚覆することがあつて、これに依つて火災が起らぬとも限りませぬ。それで置洋燈のやうな持ち運びの出來るものは來客のある場合などのみ用ゆるのが安全の策だらうと思ひます。ことに依ると、火鉢の上に洋燈を釣るした家を往々見受けることがありますが、これは火鉢の火氣の爲めに洋燈の油が蒸發するので油煙が立つ憂ひがありますから、成るべく火鉢を除けて釣るす樣に爲たいものです、洋燈を古く用ゐてゐる内には、光明が鈍くなりますが、これは石油の惡るい爲でも、洋燈の惡るい爲でもない、實は口金が不潔になつたのと心に垢が附着いた原因に外ならぬのですから、常に口金は奇麗にして置くのと、心に付く垢を取除くことを怠つてはなりませぬ。心の垢を取る簡便法は酢で洗へば、手間暇入らずに洗ひ落すことが出來るのであります。硝子は長く使へば使ふほど堅固になるものですから、洋燈のホヤとても其通りであります。夫れで最初から火を強くして溫度を激しくしたり、又は熱してゐるのに水などの冷たいものを觸れると、直樣破損しますから、能く〳〵注意を要します。



來客の時

松操女史

客が參りました時に、煙草盆や、茶や、菓子を出すのは、どんな家に往きましても接客法として行はれてゐるのですが、此三つを出したから夫れで好いとあとを放擲つて置くのは如何にも無禮ですから、是れ以外に客を遇する道を心得て居らねばなりませぬ寒い時に客が來ましたならば、火鉢を出すことは固よりですが、其身體を温めしめんが爲めに温かな食物を出したり、又は熱い時ならば汗を拭ふ爲めに冷水を出したり團扇などを出すことを忘れてはなりませぬ。

主人が留守の場合に來客がありまして、主人の歸宅を待つ時は、主婦たるものは主人になり變はつて四方山の話をして、客が倦かずに待つやうにせねばならず、又主婦たるものが客に接する暇がなかつたならば、其日の新聞なり乃至書籍などを出して倦かせぬ方法を取るのは肝腎で、夫れから客が若しも年寄つた人であつたならば、往昔を貶し、當今を褒めるやうなことをしてはならぬ。老人は兎角往昔を慕ふもので、夫れを惡るく言はれると心持を惡るくするから、無禮此上もないことになるので、其老人が喜びさうな話を持ち懸けるやうにせねばなりませぬ。

主人が何か腹を立てゝゐる所に來客があると、主人たる者は其怒りを顔へ出して來客に無愛想をしてはならぬ。諺にも喜怒哀樂を顔色に表はしてはならぬといふ位で、夫れを來客の前へ表はすことは以ての外のことで、甚麼苦痛があらうとも、甚麼忿懣があらうとも、客に對しては平然として愛嬌を振り蒔くやうにせねばならぬ。

客に食膳を進むる時は、客が尊い人であるならば配膳の都合もあるから、共に食事せぬが好いやうなもの、若しも客が同輩であつたならば、客に遠慮させてはならぬ故、共に食事をするやうに爲たい。夫れから食物を勸むるに爲ても、客が最早澤山だとい

ふのに、無理強いをすることは、客の迷惑さは一と通りでないから、好い加減に勸むることに爲たい、夫れだといふて食物を出したまゝ勸めぬのも又無禮になるから、其邊は能く心得て置くべきことであります。

客が歸る時に、玄關まで見送るのに、客が門を出切らないのに、見送りさへすれば好いとて、直ぐに引込んで了ふのは實に無禮此上もないことであるから客が門を出切る迄は叮嚀に見送つてゐるやうにせねばならぬ。夫れから二人の客があつて、一人が先きに歸へることにならば、殘る客には能く斷つて、歸る客を送り出すことにしたい。

出産の見舞として客が來た時は、其客を産所に通すことは不可ない、何故ならば産所は不潔ではあるし又産婦の爲めにも好くないからで、夫れから病氣見舞に來た客に對しては、不潔な病室に通さぬが好からうと思ふ。併し客に依つて是非病人に逢ひたがる人もありますから、不潔でない限り、病人の工合に依つて逢はせることも支差なからうと思ふ。

喪中に弔詞を陳べに來た客が歸る時は、喪中に居る主人なり主婦なりが送り出すのは無禮であるから、來合せてゐる親族なり其他の者をして代つて送ることにせねばならぬ。

夫れから客の車夫が待つてゐるのに、車夫だから好いはといふて、其儘搆はずに置くのは不可ない、車夫は客の供であるから、これにも夫れ相應の禮を盡し、寒い時ならば火を出したり、又は茶を出したり又は食事時であつたならば食物を出すやうにせねばならぬ。

茶座敷雜記

新居いよ子

小座敷

小座敷とは四疊半以下の座敷を云ふ、四疊以下は初

後とも座掃をなす、四疊以上は道具疊ばかり座掃をなす、皆座はきをするときは、騒しきゆゑなり、圍ひの始まりは珠光東山殿正寢十八疊の間を四つ一分かこひたるが濫觴なり、其の後紹鷗六疊を好み、又四疊半になすなり、道幸を作るは利休流なり、

◎四疊半疊の名所　紹鷗好みの四疊半は、二枚障子にて左右にまいらわり、張壁なりしを、利休居士塗壁にして塗殘し窓を明け、けくり口を付くるなり、

◎二疊臺目　少庵京都二條に住居の節初めて好み、中柱を入れ、臺子の形を殘したる故、臺目といふ、

女藝十圖（其の六）機織



◎一疊半　小庵好の二疊臺目を見て、あまり自由過ぎるとて、利休一疊半を好み、利休京都葭屋町に住居せし頃は、四疊半と一疊半の小座敷なりしと又この一疊半に床をつけしは原叟好なり、

◎二疊敷　利休好なれども、勝手惡しき故、向ふを小間中切落し、一疊半をこのむ、尤も此二疊へ八寸の中板を入るゝは啐啄齋の好なり、

◎二疊向板　叶翁の好

◎二疊中板　一尺四寸の中板を入るゝなり、如心齋の好み、

◎一疊半中板　一翁の好にして、風呂先ぬり廻は

し、板巾八寸、又中板入臺目切、
◎三疊敷　江岑の好にして壁床なり、
◎三疊臺目　三疊、四疊、五疊、六疊までも臺目切は皆織部より始まる、
◎長四疊　元伯の好にして、大德寺見性庵にあり上臺目なり、
◎不審庵　利休居士の遺圖によつて、小庵本法寺にこれを建つ、
◎四疊臺目　織部好總じて四疊半、二疊臺目、一疊半此三座敷が小座敷の濫觴なり、其餘の好みは此三座敷より變じ來れるなり、但し廣間は四疊半以上をいふなり、
◎勝手口　ゝゝゝほたて口と火燈口は勝手口に限る（火燈口すりまはしは勝手口と通ひ口と兩樣なり、席によりて釣襖もあり、古風にて引違ひ襖にて勝手口と通ひ口と兼用するもあり、堺鹽穴寺利休好の二疊臺目あり、引違ひなり出口つけられぬ故なり、
◎通口　ゝゝゝすりまはしに限る、茶の湯の節菓子煙草盆通ひ口より出だす、通ひ口の濫觴は臺目切にては點茶ゝ節貴人の前へ行きて急なる用向など勝手口より申上げがたきゆゑ、利休勝手口の外に通ひ口を明るなり、それゆゑにこれを禿口といふなり、禿ろの出入する爲といふなり、
◎窓　紹鷗好の四疊半の張壁を塗壁にして塗り殘しの窓を明る事利休より始まるなり、定家卿の歌に「大壁に窓ぬりのこす庵までも、すさめすてらす秋の夜のつき」
◎連子　突揚窓ともいふ、北向道陳つきあげ窓を好むともいへり、突上げの木は萱ぶきに用ゆ、長短とも杉の角、外に叶翁好のみじかき木あり、風雨つよき節に用ゆ、竹は長短ともたゝき屋根に用ゆ、目を前にしてさかさまにして用ゆ、
◎くゞり口　至て大なるは妙善庵にあり、牧方の漁人の家の小さき戸口より出入するを見て、利休始て好む、
◎戸　夜咄しは皆戸を入るゝ、見付のくゞりの上

窓ばかり障子なり、客に入る處を知らすためなり、

◎障子　昔は下ざまの障子は竹を骨にせしゆゑ、小ざしきに佗て竹骨を用ゆ、竹障子の骨は横は皮付を上へ、竪は一本ならば皮を見付、三本は中の皮を見付、左右の二本は向ひ合せ、二本とも向ふへ合す尤も竹障子は、小障子に限る、木にて造るは貴人方なり、

◎額　小ざしきにては不審庵形を本とす、杉の木にて書を彫り胡粉を入る、燒杉は元伯好み、縁を殘して彫込みの丸額は啐翁好なり、彫額又は打付書兩様とも用ゆ、紙額は用ひず、

◎花入釘　柱へうつは平座、壁へは丸座、落し懸は内は利休、外は元伯、すみの塗出し楊枝柱の釘は元伯、此釘を柳釘といふは惡し、花釘と云ふべし床の吹貫の木客より見付になるは、内の眞に釘を打ち太鼓舟を懸る是は釘も花入も仙叟好なり、臺目床の釘は大體床より三尺三寸ほどに打ち、柱落し懸より一尺一寸下げてうち、しき込床は床縁だけ上げてうつなり、大床は此割なり、大體壁釘は疊おこしより低くはなし、

◎床の蛭鍵　床の天井三つ割一つ分見込の方奥行に眞中鍵先は床に向ひて花くさりを左の手にて懸るやうにするなり（但し上座床下座床とも）

◎稻妻釘　付書院喚鐘銅羅かき先を前へむけてうつ、

◎釜つるかぎ　爐に向つて鎖を右の手にて懸るやうに鍵先をむける、中柱ある席は用ゐず、かけ込には皮付を籐にてつなぎたる横木にうつは元伯好なり

◎天井　小ざしきは網代、蒲、長片此三通りなり板天井は小ざしきに用ひず、嵯峨西芳寺に利休好の三疊しきの緣の上に土天井あり、光悦大虚庵は八疊の内六疊は土天井なり、

◎かけ込　上の板はわりのね、平打のね、横ふき板は宗全好み、いづれも竹たるきなり、すゝ竹幅八分の割をはさみにうつは江岑好なり、

◎簾　小ざしきは皮付の葭、廣間は皮むきの葭、

白竹は勿論伊豫竹にてもよし、

◎襖　古は出合なし、千家黒塗縁に限る、唐紙形は桐白張の袋はりは引違ひに限る、青土佐の袋張四枚は江岑好の三疊に用ゆ原叟好なり、

◎引手　玉子は利休形、桐は原叟好み、木瓜菊大徳寺形なり、いづれも煮黒み大小あり、竹にて節の處を用ゆるは如心齋好み、茶革樂燒原叟好み、但し茶革青土佐に袋張に用ゆ、

◎疊　六尺三寸に限る、京間は厚さ一寸七分なり大阪は一寸八分、六尺五寸疊に二寸二分なり、

◎中板　大徳寺の行者山田某に元伯好の中板の席ありこれ中板の始めなり、如心齋好は二疊中板巾一尺四寸、一疊半中板巾八寸なり、

掛物

◎眞表具　本紙の脇に細き筋の入りたるを云ふ、佛表具中懸などにあるなり、此筋を匂ひと云ふ、

◎幐褶　兩脇の廣さを云ふ、せまきは一寸八分より、懸物に應じて段々廣きを用ふ、併し中の下を通したるより廣きはなし、

◎輪褶　兩脇のせまきを云ふ、四分より掛物に應じ段々廣くなすなり、

◎徐熙表具　宋朝製の寸法にして、一文字を去りしなり、珠光の好と云ふ、

◎表具の寸法　一文字の上一寸ならば下五分、中は一文字の上を四倍して四寸、中の下は中の上四寸を半割にて二寸なり、上下の下は上下の上の半割にて六寸なり、何れも此割にて少しも下をかたすがよし、風袋は懸物の巾一尺なれば、七分是より巾狹き懸物は恰好見合せなり、

◎表具名所　軸は象牙、角、塗物、木地類いろいろあり唐紙半切の巾にて出八分、軸木は軸につく木なり、杉を用ゆ、表木は上の巻留に入れたる木、上巻絹は巻留たる所にある絹、巻物の表紙の如し、色は淺黄を用ふ、懸絹は釘へ懸くる時の絹、啄木はサナダの打やうの名なり、淺黄と紺との打分を云ふ、巻絹と云ふべし、掛棹は長さ二尺八寸、矢筈竹を用

ゆ、

釣棚

◎一重　利久形なり、桐にて竹の釣木向切に中柱あるは客付、中柱なきは勝手、但し杉もあり、中柱ある席には杉は用ゐず、利休形の臺目にて中柱なきは、勝手の方の杉の一重棚を釣る、尤も少し寸廣し

◎二重　利休形むかしは吹貫より上にて止る、不審庵三疊臺目吹貫より下にて釣る、天井よりは釣竹なり、棚より棚はかしの釣木なり、

◎釘箱棚　仙叟好み杉にて左勝手に好み、當時は右勝手にて用ゆ、裏流し則ち五疊じきにあり、今は表にも啐啄齋よりはじめて用ゆ、

◎利休堂　仙叟好み杉、當時蛤棚と云ふ、釣木竹なり、

◎炮烙棚　元伯好杉、又隱の勝手に用ゆ、これ濫觴なり、

◎料紙棚　了々齋好み杉、脇に用ゆ、釣木竹なり

◎道幸　利休形杉、後に開戸あり、杓、釘、袋懸釘あり、吽翁より袋釘をとる、極老は後の開より水さしへ水を加ふ・板じきにもしき疊にもおけるなり飾道幸はたゝみすれあり、手前は臺目はこび、手前の通り、吉野杉なり、

◎水屋道幸　元伯好み、今日庵に用ゆ、竹簀一重棚なり、後打抜き常は戸を入れる、夏は戸をはづし簾をかける、夜分は桐のかけ燈臺を用ゆ、極老は水遣兼用にもなす、釣木向は杉の木、前は竹なり、

床

◎利休形　二方天井まで塗廻し、妙喜庵の床これなり、

◎板　かまちの入たるを板床といふ、利休形、

◎踏込　かまちなしに座と板と一樣なるをいふ、少庵好み、

◎土　むろ床の通りにして、疊の所も土にて塗り其上を紙にてはるなり、左官土齋へ元伯好み遣すなり、

◎洞　利休形は臺目に小間中の洞なり、間口一間

に間中の洞は厚叟好み、龕破床といふ、
◎壁床　利休形なり、席中の壁に掛物をかくるをいふ、

柱

◎床柱　松、杉、檜、椎、は厚叟好み、浪花海部屋三疊の席に始めてこのむ、臺目床の柱に用ゆ、但し花入釘凡疊入座より上へ高さ三尺六寸五分、板床あれば二寸七分か三寸ほど上るなり、尤も柱釘は向壁よりは一二寸高きがよし、
◎中柱　松の皮付、樒、いにしへは直木を用ゆ、厚叟時代よりゆがみ柱を用ゆ、
◎塗出し柱　俗にやうじ柱といふ、元伯好なり、隱の隅にあり、いづれの席に用ゆるとも隱の寸法を用ゆ、隱は座より天井までの高さ六尺五寸にて、一尺一寸下りて花釘をうつなり、其割にて天井の高下にかまはず床下より五尺四寸にうつべし、
◎捨柱　軒の至て深くして、桁を用ゆるに端のおさまりのなき所にて立てる柱なり、杉丸太、栗のなぐり、
◎間柱　塗殘し窓の外つへらへ隱れる竹なり、窓の大小にかまはず柱間の眞にうつゆへ間柱と云ふ、元來壁の助けなり、竹は白竹にてまづ四寸廻り、但柱あるときは簾かけ釘寸法少し長し、

四季草花の貯養

港町子

花を養ふの水は天落水を最もよしとし、河水これに次ぐ井水また其次なりと、しかれば花を貯ふる水は第一雨水よろし、梅雨の時雨水を壺に貯へ、煤土を一塊火に燒きて水に投ずれば、水腐ることなし、此の如くにして挿花の用水となすべし、天水を用ふる。は雨露草木をめぐむの道理に適ひ、河水は山谷より流れて勢ひつよく山土の氣を帶びたる故、草木を養ふこと最も他水に越えたり、井水は井花水とて早旦に汲みたるはよく、元氣をたすく、草木の養ひによし、但し惡水にして味ひ鹹きものは用ゆべからず、

鳥料理十一種

◎鳥鱠　雁にても鴨にても、身を二ツ三ツに切り、あぶら皮を取り、細く作り、温酒にて一ぺん洗ひすて、煮酢をさまし、右の鳥へかけ、焼しほを加へ入るなり、夏は鯉餅にかぎる

◎鳥作皮料理　雁鴨あぶら皮つけながら細く作り、厚きところはへぎ、ほそく仕立、醤油に酒酢少し加へ、ざつと煮、右の鳥を入れ、ひた〳〵に漬け、わさびを入れ、花かつをなど置べし、但し火の上にて鳥を入るゝ時は、煮えすぐる故、火より下して入べし、

◎湯鳥　雁鴨水にて煮、能きやうに切り、あつきうちに味噌などかけてよし、また焼鹽、或は出し醤油、橙酢などかけてもよし

◎煎鳥　雁鴨を常の如く作り、古酒・醤油、水當分に交ぜ、ひた〳〵にして煮、花かつを、かけてよし

◎羽ぶし煮　鴨其外何鳥にても、身骨共叩き、酒と醤油當分にして、花かつを、入れ、汁すこしにて、ばらつくほどに煮、また外の鍋に、わさび味噌をあたゝめて置き、其中へ入れ、其儘にても、外の器に入れてもよし、また物にかけてもよろし

◎小鳥團子　小鳥何にても細かにたゝき、餅の粉と當分に交合せ、擂鉢にてよくすり、湯煮をして、煮物の中へ入れる、但し丸さは随意なり、猶又油にてあげてもよし、

◎鳥のこくせう　味噌をよくすり水にてのべ、酒を三歩入れ鳥を細かにたゝき入れ、能く交合せ、鳥と味噌と凡當分か、また味噌すこし多きか、鍋へ入れ、炭火にて煎ろ、山椒など入れてよし、但器にてもかき廻し、鍋につかぬやうにすべし、

◎鳥餅　何鳥にても細かに叩き、小鳥なれば骨を入れ、味噌又は醤油にても煎上げ、餅を焼き、薄き味噌にてざつと煮て、此餅を椀に入れ、右の鳥をかけてよし、

◎小鳥南蛮焼　小鳥の腹の中へ、かまぼこを入れ、油にてあげ、其後煮る、

◎雁鴨たゝき　身骨とも細かに叩き、血も其儘かけ、よく交ぜ、鳥一升目に鹽五合位交せ、手にて能くもみ壺へ入れ、十日斗り過ぎ、麹五合位加ふ、尤麹の花をもみ落し、少し煎り、臼にて挽き、麹の花と交合せ、右壺の鳥をよく交ぜ、酒少し加へ又よく叩き、じろき程にいたし、また壺へ入れ、空氣の入らぬやう口ばりをして、又十日程たてば、風味至つてよろしくなる

◎鳥びしほ　小鳥、極に鹽くひかげむに交ぜ、廿日ばかり漬け、但し餅白米見合せ、少しいり、粉に挽き、麹五合同斷、蜜柑皮少し同斷、

◎鳥法論味噌　何鳥にても細く作り、骨もたゝきいれ、味噌をよくすり、酒と水とにてのべ、鳥と味噌當分に交ぜ、酒と水とにてゆるくし、鍋へ入れ、炭火にてゆる〳〵とかきまはし、さんせう、黒ごまなど加へ、四時間余りも煮、焦つかぬやうに絶へずまぜ、大かた水引乾きたる時とりおろし、よくさまし壺へ入れおく時は、翌年まで持つなり

◎雉子の汁山影　きじを作り、酒をひた〳〵に入れ、火を軽くして煮其上へ水を入れ、また煮、しほを入るゝなり、若汁軽過る時は、少し醤油を加へてもよし

花を損ず、水草類には池水最もよし、其外のものにはよろしからず、水を撰ぶことは養花第一の心得と知るべし、

草木の花はすべて早朝に切りたるは勢よく、たもつこと久し、晝切りたるは凋みやすし、蓮、河骨の類は池中にて格好を見合せ切らんと思ふ所より、上をこよりにてくゝり切りとるべし、此の如くするときは、萎ひなしに花久しくたもつ、總じて花は切つて其儘細口の花器に挿入れ、堅く其口を塞ぎて生氣を洩さぬやうにすれば、數日を經ても凋むことなし、花を貯ふるに窖藏もなく、手前井戸もなき時は、平地に水を灑ぎ、但し牛膠をときて土に和し、其所に草木の枝をさし、四方を圍ひ、但し上は覆ふべからず、斯く仕置くときは數日花を損することなし、

又草木水揚法は、挿花を嗜む者の最も肝要とする所にして、たとへ何程の名手といへども、花に水揚せざれば、珍花異木なりといへども、枯凋して眺めにならず、されば人工と藥力を以て、其花の天然の精氣を保たしめ、長くながめに飽かしむるものなり、今左に草木の水揚法を記すべし、

◎春の部　▽梅、枝の切口を火にて焦し泥をぬりて挿せば、花萎まず小蕾までこと〴〵く開く、又瓶中へ硫黄を一匁ほど入れおくもよし▽李花、杏花、この二種も梅と同じ▽海棠、瓶中へ薄荷葉のしぼり汁を入れて挿すべし、若し若葉なきときは乾葉を煎じ其水に挿すなり、但し水五合に薄荷一兩目ほどを用ゆ▽梨花、榠樝、林檎、此三種何れも大根のしぼり汁を瓶水に和して挿すべし、此類は折口を燒事を忌む、枝のもと一寸ばかり皮を削つてよし▽桃花、瓶中へ陽起石の粉を少し入れて挿すときは、花葉勢ひよく保つこと久し▽金絲梅、未央柳、金雀花、棣棠此四種は何れも莖の本を槌にて打ひしぎ、瓶中には土殷孽の粉を少し投すべし、花葉潔よく凋むことなし▽荼蘼、郁李、櫻桃、玉帶花、錦帶花此五種は只枝のもと一二寸程を火にて強くあぶり冷水にて挿すべし▽笑靨花、小粉團、繡毬、柘榴、此四種は枝の

元を焦し黄蘗を煎じさまし水に和し挿すべし▽藤花切口の所に酒をぬり焼火にてあぶり、後に冷水にて生る時は花そのまゝにて損せず、又水を用ゐず酒ばかりにて挿れば勢ひよく花凋まず、斯なせども酒は少しもそこねず、悪酒も却つて美酒となる相感の理知るべし▽辛夷・木蘭、玉蘭、此三種は同類にして別品なり、枝を強く焼きて少し割石脳をはさみて挿すべし▽荷苞牡丹▽藊豆栄、萎蕤・紫草、此四種は最も凋み易し、胡椒をきざみ水中に入れてよし▽欧蘭、よき茶を煎じさまし、是を瓶中に用ひ挿すべし花葉共に勢ひよく保つこと久し▽蕙蘭、白及、山蘭、他儉草、馬蘭、此五種も前の欧蘭の法にてよし▽吉利子、石南花、此二種は瓶中に米泔水を入れるときは久しく保つ、

◎夏の部　▽合歓、棟花、紫微、此三種は必ず根を焼くべからず、瓶水に鐘乳石の粉を一匁ほど入れて挿すべし、又根の本を割り細辛を挾むもよし▽牡丹、枝の本を油火にて燃し、瓶中に蜜を投じて挿くれば花久しく凋まず、又水を更に用ひず蜜ばかりにて挿るは猶よし、花の後蜜もそこねず前條の藤における酒の如し▽草牡丹、芍薬、此二種は枝の本を焼き冷水にて挿し、夜はとりて風のあたらぬ所に横にねし茎葉に水をそゝぎおき、朝又瓶にかへし挿るときは数日花そんせず▽蜀葵、切口を強く焦し、瓶の底へ石炭を少し入て冷水に挿すべし▽錦葵、槿花、罌粟、虞美人、此四種は根を焦し石炭を用ゆべし▽檀特花▽美人蕉、此二種は沙參の煎じ汁をさまし、又沙參の粉を水中に入るゝもよし▽山梔花、切口を少し削り鹽水にて挿すべし、又水は更に用ひずして鹽ばかりにて生る時は、勢ひ殊更によく鹽も少しもそこねず▽天蓼、婆羅花、此の二種も瓶中へ鹽を少し入るゝがよし▽剪春羅、千日紅、此二種は節を少し竪にわりて挿すべし、さなければ水を揚かねて凋み易し△蓮花、花を倒まにして切口に泥をぬり其穴を塞ぎ、切口を瓶の底につけて挿し、後水を入れおはぐろ水を少しさしてよし、又一法に折口の穴に枝

の木を削り、細くして指込み挿ればよく水をあげ保つこと久し▽河骨、此花は花葉ともに至つて凋れ易し、よく格好を見合せ、挿るほどに切つて本をそろへ、一寸ばかりを沸湯にひたし、其後冷水にていくべし、又莖下を少し削りて山椒を挟みてもよし▽杏菜、睡蓮、荇菜、慈姑、燕尾、澤瀉、浮薔、澤桔梗

四季の草花

春の舍かすみ子

一月　梅花、糸柳、枝垂柳、福壽草、迎春花、烏樟、捻臘花、駱駝布袋、山茱萸、貝母、白木蓮、連翹、菜の花、旌節花、

二月　楂子、木瓜、辛夷、みづき、ぶんご梅、紫木蓮、杏花、彼岸櫻、桃花、李花、蒲公英、櫻、梨、山梨、海棠、林檎、棠梨、榲桲、榠樝、櫻桃、郁梅、千葉郁李、馬醉木、紫荊、車前葉山慈姑、金雀化、みつがしは、紋草、狗舌草、欵冬花、大根の花、紅すいくわ大根、蠶豆、泥胡菜、からまつ草、夏枯草・金盞花、蘭、茼蒿、長春花、棣棠、白棣棠、石芥、

三月　八重櫻、いぬ櫻、由跋、うはみづ櫻、續斷、玫瑰花、薔薇、黄薔薇、費菜、酴醾、木香花、絨毬花、床葉絨毬、玉屑、芫花、白笈、胡蘿蔔、紫雲菜、春すかし百合、天南星、蝴蝶花、鳶尾、穢斗菜、放下僧、偕老根、及己、野決明、春女郎花、金糸梅、金絲桃、豌豆、剪花・山樝樹、草石蠶、あづま菊・丁子草、覆盆子、半婆茂、白頭翁、紫羅蘭花、聚八仙、山慈姑、淫羊藿、錦帶花、蠶豆菜、蘇花、荷包牡丹、ふだん菊、萎蕤、繡線菊紫蕚・藤、胡豆、牡丹、柘榴花、さつま蘭、御柳、あつもり草、

四月　桐花、鐵仙花、鐵線蓮、凌霄花、うの花、白合、夜合、天香百合、卷丹、麝香百合、琉斑百合、博田百合、山丹、黄精、罌粟の花・虞美人草、大巣菜、なつゆき、あはもり、馬蘭、ほうの木、芍藥・夏菊、商陸、燕子花、探春花、夏ゑびね、高良姜、齊墩樹、麥門冬、瞿麥、べにの花、蜀葵、紫陽花、剪香羅・知母、雲實、白丁花、山査子、棠毬、紗羅双樹、すいらん、繡毬、菝葜、忍冬、がく草、美人蕉、紫草、なつ梅、萱草、きすげ、錦庭花、天女花、十姉妹・立泉花、佛草花、

五月　紫羅蘭・花菖蒲、扇葛花、水晶石榴、萍蓬草、かはらなでしこ、さし澤瀉、旋花、朝顔、糸瓜、蛾眉豆、刀豆、射干、棟花、

六月　浮薔、うつぼ草、水冬青、星宿菜、雉子尾、ゆわう草、山小菜、萱草、牡丹ばら、樊噲草、張良草、さゝゆり、梔子花、つるくちな、剪秋羅、松本せんのう、觀音菊、よそぞめ、やなぎ蘭、壷瓜蕃、たつなみ草、木槿花、黄槿、牽牛草、蘭蕉、どようふじ、合歓

七月　蓮、白蓮、天竺蓮、唐蓮、山姜、鴨跖草、茉莉、かうあぢさい、蓮花升麻、荒蘭、秋海棠、威靈仙、小蓮翹、黄芩、くさがく、鐵掃帚、千屈菜、銀錢花、浮桔梗、おきなぐさ、月下香、桔梗、敗醤、百日紅、千日紅、蘭草、葛花、子午花、やつしろ草、紫茉莉、益母、木綿花、獐牙菜、鷄頭、青葙、鵝忽、紅黄草、さぎ草、地楡、玉毬草、せうぐばかま、だん菊、いしみかは、茴香、野ごま、羊乳草、萩、旋覆花、烟草、蒴藋、油點草、花蘭、沙参、はま菊、紫苑、

八月　八朔梅、秋丁子、木芙蓉、燕麥、建蘭、虎杖、いとすゝき、だるま菊、麝香草、馬蓼、大いぬたで、さくらたで、みかへり草、平紅帶、澤ふさぎ、升床、あはゆき、たからかう、前胡、芒、都管草、紺菊、のぎく、蕎麥、秋あざみ、藍花、金線木、かぶと菊、白草、史君子、つるむらさきし、紫金、しらめい菊、鬱金、雁來紅、雁來黄、紅莧、

九月　菊、龍膽、つはぶき、三七、たむら草、小槿花、山城のきく、花丁子、酔芙蓉、四季咲のかきつばた、茶花、残菊、染葉類、かるかや、たで、つた、すゞご、はゝそ、もみぢ、かへで、紅葉木、

十月　水仙、寒菊、寒すゝき、茶梅、山茶、榛、榛、枇杷、十月梅、十月櫻　冬咲の長春、冬牡丹、冬葵、冬石竹、水前草、及のころ柳のつぼみ、千壽菊、吉祥草、花のそへ物、くろもぢの苔、ふしの木、にはとこ、かう梅、

十一月　冬至梅、寒紅梅、江梅、黄瑞香、寒菊、木瓜のつぼみ、琉球産の寒なでしこ、吉祥草、

十二月　臘梅、大臘梅、寒梅、早梅、わうばいの苔、白花の沈丁花、紅桂、延年菊、

これ等は皆かはほねの心にて挿べし、かはることなし、いづれも水草は軟にして脆きものなるを以て、大暑の砌に挿るなれば水揚なくてはたちまちに凋む

ものなり、水に池水を用ゆる時は甚だよし△燕子花、莖に小葉ある處節なり、是れを竪に少し割て挿る時に莖の本を少しづゝ切すてれば久しく保つなり、又

先の花凋みて後より一花出で丶開くなり▽紫羅欄▽花菖蒲△杜若、此三種は燕子花の如く心得てよし、但し此類花に水洒くべからず、又根もとを焼くことも忌むなり、水中に寒水石を並べおくべし▽萱草、吉祥草、麥門冬、此三種は瓶の底に泥一つかみを入れおくときは花久しく保つ▽貝母、百合、山丹、藺、夜合、黄精、此六種は何れも根本を少し焼き砂糖水にて挿れば葉つやよく花も久しく保つ△杜鵑花、瓶中にしろ水を加ふべし、

◎秋の部　▽芙蓉、瓶中に沸湯を入れ花を挿して瓶の口を閉づべし、斯くすれば、花一入に弱ると雖も後に冷水へらつせば勢ひよく保つ▽菊花、頳桐、秋牡丹、金沸花、桔梗、此五種は芙蓉に同じ、根を焼けば花を損ず▽胡枝花、枝の切口を二寸ほど槌にてしづかに打ひしぎ、水の中へ陽起石の砕きたるを少し入れおくべし、かくせざれば花葉たちまち凋むなり▽蓍、千屈菜、設寄奴、黄芩、青蒿、此五種は何れもはぎの如く莖の本を少しひしぎ藥を水の底に入れるべし、▽秋海棠、一夜大瓶の中におき、水に深くひたし、明旦挿るときは葉損せず花の勢ひもよし、急なるときは莖の節を竪に少し割りて挿すべし▽剪紅紗、蘼蕪子、紫茉莉、この三種も秋海棠に同じく節を割りてよし▽野菊、紫苑、龍膽、玄參、沙參、威靈仙、天麻、此七種はいづれも莖の本を焼火にて焦し挿すべし、又切口へ龍骨の粉をつけて挿るもよし▽牽牛花、丁香茄、括樓花、葛花、此四種は何れも宵に切て一夜井戸の中へ倒まにつるしおき明旦取出し挿る時は勢ひよく保つこと久し、即座には蔓の本を一二寸にてもみ破りて挿すべし、

◎冬の部　▽江梅、臘梅、迎梅、瑞香、山礬、枇杷、八手花、此七種は何れも枝の切口一寸程が間けづり、瓶の底へ硫黄一匁ほど入れおくべし、花もよく榮えて瓶中の水も凍ることなし、▽山椿さゝんくわ、水仙、茶の花、此四種は何れも鹽水にて挿すべし、茶梅、山椿など以花ふさにも鹽を少しさしてよし、花落ることとなし▽寒菊、橐吾、欵冬、一花草、

青陽剤、此五種は沙参を煎じ其水にて挿る、又瓶中に胡椒を割りて入るもよし、

裁縫の注意と順序

稲田喜久子

單羽織縫方注意

第一　脊縫を小針に縫ふべし、第二　袖仕立上の時絽の如きものゝ袂廻しをなすには、カタを用ひ、襞の亂れざる樣に留めおくべし、第三　肩すれをつけるには、引けざる樣に綴ぢつくべし、第四　前後の襠附をなすには、前縫代に襠縫代を絎けつけおくべし、第五　衿付の時、表衿の方は、待針をさし、前身を衿に向ふに卷こみ、裏衿の合箆を合せ、衿肩明き一寸ほどまで、左衿先より、一針縫に縫ふべし、第六　衿肩絎の時、裏衿山を表脊縫に合せ、もつとも小針にて、衿肩廻しの處を丸くなる樣につけ、身の裏の方にて、細かく絎るべし、第七　裾掛絎は、三分の針目にて絎け、縫目にては返し針にすべし、第八　袖付は、袷羽織の表袖付と同じくすべし、その他袖の空縫は、單衣に同じく、衿の折附、紐附、衿端縫は、袷羽織に同じ

單羽織縫方順序

單羽織を縫ふには、一　衿の折付　二　袖の空縫　三　脊縫、但し前以て標付をせざる時は、こゝにてなすべし、四、袖　袖仕立揚げ　五　袖すれ附　六　前襠付　七　前裾懸假綴　八　紐付　九　襟付　十　衿端縫　十一　衿肩絎　十二　衿綴　十三　後襠付　十四　裾懸附　十五・袖付の順序によるべし

袷縫方注意

袖口縫には標を合せ、張加減に縫ひつけ、その耳の端縫も、同じく張加減に綴ぢおくのです、

裏の脊縫の時、裾廻しあるものは縫ひながしになすのである、

袖縫仕立上げの時、縞ものならば、縞の線を折り置き、袖口の標より一寸上にて、表袖を袖山より一分

ゆるく縫ひ合すのです、
裏表の脇縫の時、袖口巾にて、表よりも、裏の方を五厘狭く縫ひ、一寸五分縫ひ戻すのである、
裾合せの時は、脇縫・脊縫いづれも折と折とを合せ一針返し針を爲すのです、
衽裏表通し附の時は、裾の縫目を合せ、一針返針にして、衽附を終りて後、前の縫代を裾合せの縫代に折を被せ、綴ぢ附けておくのである、
裾の假綴は、細糸を用ふるのです、
身頃全體の綴は、三針に一針の返針をするのである
竪裾縫は、折より五厘淺く縫ふのである、
衿の綴は、裏と同じ糸を用ひて、なるべく裏に綴糸のあらはれぬ樣にするのです、
裾の忍び綴は、綴目の處にて堅く針留めをして、針目を揃へ、なるべく綴糸の表裏にあらはれぬ樣にするのである、
その他、衿附は一つ身單物に準じて、袖附、衿絎は單衣に準ずるのでございます、

袷羽織縫方注意

男物の袷羽織を縫ひますには、次の如き注意を要するのでございます、
裏表の脊縫の縫終りは留めを要すのです、
表裏の綴合には、なるべく小針にするのである、繼ぎ終りますれば、肩山に針をさして、前後の幅を合せ、四枚に折をつけて置くのでございます、
後襠の附方には、表身頃と襠折とを合せて、襠の引き加減を見ました上、裏身をそへ、待針をさし、一針抜に縫ふのです、前襠も附方もこれに同じですが襠裾の所を一分程縫殘して置くとを要するのである
前綴は、裏を少し引き加減にするのです、
紐附けは、留めを堅くするのです、
襟付は、紐附より脊縫までの處にて三分程、衿をゆるめて附くるのでございます、
衿端縫は、心を表衿の方に折り、表衿は引き加減に裏衿は丈を少し入れる加減に、脇の方を二分ほど縫殘して、折も三分程かけ、表衿の方へ引かれぬ樣に

綴附けて置くのです、

衿桁は、衿肩廻しの所にて、もつとも小針にて、折より内へ桁けるのでございます、

衿綴は、衿を向ふにして、左身の衿端より綴ぢ始め身頃を衿より五厘引き加減にして、折を針先にて直しつゝ綴ぢ、紐附の處を鼓かゞりにし、右身もこれと同じく上より綴ぢるのです、他は袷服に準ずるのでございます、

雇人の使ひ方

河口榮子

下男なり、下婢なりを好く使ふて往くのは一家の主婦たるものゝ役目でありまして、使ひ方によッて能く忠實々々しく働くものでありますから、主婦はこれを使役する良法を研究せねばなりますまい。

主婦が下男なり下婢なりに對するばかりではなく、他人に接するのに總て誠實と親切とを以てするものは人たるものゝ道でありますが、奉公人に對しては最も此心懸けがなくてはなりませぬ。

昨日下女が來たかと思へば、今日は早や暇を貰ふ、又換りが來るかと思ふと直ぐと、又三日も經たぬのに暇を貰ふといふのは、世間に對して實に耻かしいことで、云はゞ自分の内の不誠實不秩序なことを世間に表白するやうなものであります。これに反して同じ奉公人が十年も二十年も勤續して居ることは、主婦の使ひ方が宜しいからで、そんな家は美德の充滿してゐることが思ひ遣られます。夫れで私は奉公人を召使ふ者の心得迄に感じたことを述べやうと思ふのです。

第一奉公人を召し使ふには、前にも申した通り誠實と親切とを以てすることは勿論で、第二には秩序正しく、其働く方法を授くることであります。で朝は何時に起るといふを定めて置きまして、時計を與へて時間に遲速のないやうにする、尤も商買により勤め向きによッて時間の一定はありますまいが、

夫れ〳〵に依つて時間を定めて置いて、何時迄には御飯が間に逢ふやうに責任を持たせて置くのです。夫れから夜も又何時に寢かすといふを定め置いて、其時間が來たらばドシ〳〵寢かすやうにする。家によりては主人が歸つて來ないとか、來客のある場合に、何時にならうが奉公人を寢かさうとも爲ませんで、哀れにも奉公人は、終日の勞働の爲めに、臺所の隅で船を漕ぐといふ醜體を顯はしてゐますのは、全く主婦たる者の落度であるのです。人間は限りある勞力を持ちてゐますから、度を超えた勞力をさやることは、譬へ奉公人だからといふて堪え得られるものではありませんから。斯る場合には主婦たる者が總ての用事をすることにして、奉公人は一定の時間に寐かすことに爲たいのです。次に何時に朝飯を次に何時に晝飯を、次に何時に夕飯をといふやうにキチンと食事の時間を一定して置きますと、下婢は臺所をかたづけることが都合好く運ぶので、夫れを濟まして別の用事に移ることが出來ますから、奉公人のみ都合が好いばかりでなく、主家も又得るところが多いのです。夫れから如何に下婢だからといふて二六時中朝から晩まで働かせづめといふことは、如何にも可哀想でありますから、食事後には約そ三十分間程の休息を與へることにしたい。次では夕方用事を濟ましたらば就眠時間迄に、書籍を教えたり裁縫を敎えたり、又は往昔の賢母良妻の傳を話して聞かせるなどは至極宜しからうと思ひます。次には客の應接等其外取次などは叮嚀にするやうに敎えて置きますと、夫れに依つて家風の秩然たることを客に知らしめて、家の面目此上もなからうと思ひます下婢下男だからといふて病氣が起らぬとは限りませぬ、若しも病氣が起つたならば、仕事を休ませ療養をさせるが宜しい、然うして親切を盡してやるやうにせねばなりませぬ。病氣だからといふて輕症であるのに、藥價を惜んで直ぐと宿元へ下げるなどは、如何にも無慈悲ですから、大病でない限りは夫々親切な介抱をしてやるやうに爲たいのです。

病者の飲食物

神宮寺種子

病者の飯食物を撰ぶには、豫め吾人が日常食する處の食物に就き、一々其物質中に如何なるものを含み居るかを研究し置くが第一の要であります、次に消化し易きものと不消化のものとを知り、又彼れ此れ配合を能くし、風味も亦損はぬ事が肝要でありま病者の食物に在ては一層注意し、滋養多くして極めて消化し易きものを撰ぶべし、總て食物は數種のものを混用するを良とす、是は中には蛋白質を含むものあれば、含水炭素質を含むものあり、纖維質もあれば、膠質あり、鹽分あり、水分ある如く身體は常に新陳代謝の機能により、是等の物色皆供給の必要あればなり、

食物中非常に滋養分に富めるも、消化し難きものあり、肉類の如し、故に是等は多く羹汁となして用ふるか、或は他の調理法を以て體外に於て、旣に消化せるが如く製し與へざるべからず、先年米國マギー夫人の演說に日本の看病には、病者に對する食物の調理法が缺けて居ると言はれました、

食物の品種及分量は男女、年齡、氣候及勞逸等に隨て異ならざる可からず、殊に病者に就ては病症に隨て定むること多し、病人の食物として從來能く用ひ來りしものは粥、肉羹汁、鷄卵、牛乳等なり、

米粥は大凡一時間半位徐かに煮熟し、又之に牛乳を加へ速に火より下し製するものを乳粥と名く、頗る善良の食物なり、豆粥も甚だ滋養に富みたるものにして、殊に病人に適當なり、製法は鹽漬牛肉又は鹽漬豚二百匁を細剉し、之に水二升二合を加へ煮て、次に皮を去りにる豌豆或は白鵲豆二合五句を入れ、胡蘿蔔一二斤を加へ、三時間計り煮熟して製す、

肉羹汁は牛肉又は犢肉二百匁を一升六合の水に入れ之を火にて徐に煮ること二時間、其間時々水面に浮上る滓を掬ひ去り、後靜定して上清の液を分ち貯ふなり、又急に之を製するには、瘦せたる牛の肉三十

五匁を細剉し、適宜の水を加へて猛火を以て煮沸し篩過して用ふるも可なり、

鶏卵は滋養に富み消化し易く、病者の食料には至極適當の品なれども、煮たるものは生より消化し難し、病人若し生を嫌ふ場合には煮て與ふるも良し、けれども調理を能くして直に消化し得るやう製し與ふべし半熟卵は鶏卵を沸湯中に入れ其大小に應じて、三分乃至四分時間にてして取り出し、直に冷水に投じ冷すべし、

牛乳も亦病者の食料として適當なるは論なし、然れども暫時を經る時は、酸化するが故に若し直に服せざる場合ある時は、牛乳中に少許の重炭酸曹達又は『サリチール』酸曹達を加ふべし、但し之が爲に乳の色や味を損ふことなしと雖も、若し分量を過ごすときは保護しがたし、注意すべきなり、

牛乳は色白にして微く藍色を帶び、指間に捻れば稍膏潤にして脂の如し、味甘和にして殆んど臭氣なく之を煮沸すれば上面に皮膜を結び、試に其一滴を水中に投ずれば沈底し、又之を爪甲上に滴すれば凝て半球形となりて、潰流せざるものを最良とす、

肉類は大患又は胃病者には用ひざるを良とす、是以上述ぶる所の食品肉羹汁牛乳鶏卵等に比すれば、消化惡しければなり、然れども稍快復せし患者、又は或病者には調理法宜きを得るときは適當のものなり肉類は煮炙共に猛火を用ひて急に製すべし、緩漫なるときは硬變して消化し難く、且味を損ふ、煮炙共に調理法により生肉より消化し易きに至る、

其他嗜好物として香料、酢、醬油、食鹽、砂糖、脂油等の如く食物に加味し用ふるもの、及び茶珈琲酒等の如きものにして、此等の品は病症に隨て利害あり、能しく醫士の指揮を受け決して濫用すべからず

水は病者に於て元より必要の者なり、而して水に數種あり天水、井水、泉水、沼水、河水等なり、雨水は空中の瓦斯塵埃を含むが故清潔ならず、井水も亦多くは不潔なり、特に淺井の水に至ては最も然り、沼水は多く一種の病毒を含むものなり、河水は清淨

なるものは飲料に供すべし、と雖も、最良とは做し難し、泉水は無害にして最良なりと雖も常に得難し、宜しく鐵管等を以て導くべし、

總て病者に食物を與ふるに先ち、各人の狀況に應じて斟酌するを要す、何となれば甲患者は全く或食物に耐へざるも乙患者は優に之に耐へ得ることあればなり、又場合により器械的或は化學的に、劇しき刺戟する食物を禁ずることあり、例之彼の諸種の蔬菜及び菓實、香味苛辣にして酸味或は鹽味強き食物の如し、又専ら含水炭素より成りたる食物（馬鈴薯、粉製食物）も他犢牛の腦髓犢牛の胸腺、鳥類、（鳩、牝鷄、鷓鴣）亦然りとす、何となれば異常の醱酵作用は殆んど皆含水炭素より發起するものなればなり、其他甚しく脂肪に富みたる諸種の食物も宜しく禁止することなり、脂肪は胃の内容物（食物）と胃液との接觸するを妨ぐるが故に食物の消化を困難ならしめ、以て香酸噯噦、焦燒感覺等を來せばなり、酒類も亦醫士の許可なき限りは一般に禁ずるを可とす、最も消化し易きは前述ぶる如く乳汁、半熟卵、及生鷄卵、肉醬（特に犢牛肉醬、鷄肉醬）等なり、其

女藝十圖（其の七）裁縫



薄く刮りたる牛肉、米の粥等も消化し易し、而して漸次に犢肉野獸の炙肉、炙りたる牛肉、淡泊なる粉製食物の如く較々消化し難き食物に轉ずべし、飲料には水の外に稀薄なる茶、「ショコフーデ」赤葡萄酒を雜へたる水、咖啡等なり、

諸種の固性食物は細剉したるものを、徐ろに且つ善く咀嚼したる後攝取するを要す、而して食物は其種類を論せず、冷、燒、倶に太しきに過ぐるを許さず又往々少許宛頻回の食餌を命ずるを返て適切なりとすることあり、或症に於ては暫らく絶色したる時に食慾大に振ふことあり、

重病者或は重傷にして、自ら飲食し能はざるものは必ず介輔を要す、則ち先づ左臂を病者の背部の下に送りて徐かに抱起し、病者の頭首を己が肩若くば胸に支持し、或は枕と共に起して臥狀の後欄と枕との間に、椅子等の如きものを狹みて病者を半臥の位置となし、胸部より褥上に至るまで大布片を被ひ、食物を散亂することあるも、衣褥を汚さゝることに注意し、右手にて食物を撮み適宜に冷して、少許づゝ徐かに口中に送るべし、若し粗暴なるときは噎塞し或は氣管に入るの恐れあり、

重病者に在つては飲食物を與ふる前、先づ口中を清嗽し、唇及び舌を冷水にて濕すときは、大に食慾を振起せしむるものなり、又食物も必ず清水にて含嗽せしめ、次で食物の散亂するものを布片と共に除去し、褥上を掃除して徐ろに臥に就かしむべし、

財布の紐

谷川濱子

世に財布の紐を締めてかゝれとか、財布の紐が緩んだとか云ふことがありますが、是れは要するに經濟家を諷した簡易な言葉でありまして、輕く視れば夫れ迄ですが、能く〳〵翫味して見ますと、眞理を含んだ立派な金言であります。

一家の主婦にして財布の紐の締め括りを疎かにしま

したならば、如何なる富裕な生計でも、到底長く持續することは出來ますまい、尊むべきは財布の紐、財布の紐の締め括りは、主婦たるもの丶一日も忘れてはならぬ大切なことであります。

其の財布の紐で思ひ出しましたは、或る富豪の御隱居、今はモウ七十に近いお方でありますが、この方が嫁入つて來た時分は、その家は其の日暮らしと云ふ程ではないが、裕かな生計はして居られなかつた所が此方が嫁いで來られてから、一生懸命、所謂財布の紐を締めてかゝることに注意せられた結果、僅か十年か二十年の間に、數萬の財産を作つて、昔のお神さん、今は大家の御隱居樣として、數名の侍女に册き敬はるゝ身分となられました、此方が財布の紐と云ふことに就いて常に其の子息達に諭さるゝ所は至極與わり味のある事ですから、こゝに少しく夫れを陳べて見ませう。

一體金錢は、おあしと云つて、兎角に飛び出したがるものであるから、是れを手放さないやうにしやうとするには、尋常一樣のことではいけない、注意の上にも注意を加へて、他念があつてはなりませぬ、金錢を麁末にして、袂の中に入れたり、紙に包んだりして持つて居ると、ツイ不必要なものでも買つて見たくなる、要之財布の紐を緩めて居るから無駄なことに費して了ふので、是れを大切に、ちやんと金入の中に仕舞つて持つて居ると、ア、是れを一ッ買いたいと思ふた時でも、ちよいと金を出すのに億劫なので、買はうか止さうかと躊躇して居るうちには、イヤこの品は今無くてはならぬと云ふ品でないから亦た次ぎにしやうと云ふ考へが浮んで來て、不必要なものを買はないで濟む、是れが重なり重なつては濫費う方と濫費はない方と、其處に大變な懸隔を生じて來ます、赤手空拳で大身代を仕上げるのと、一代の富豪が僅かの間に破產零落して了うのとは、唯だこの呼吸一ッにあるのであります。

其處でその濫費をしない習慣を作るには何うしたら宜いかと云ふに、金入は必ず長い、一尺位の丈に作

つた財布にして、夫れには最初ほど長い紐を附け習慣の附くに隨つて短かくすると云ふのであります、女には先づないことですが、殿方にはよくあることで、お友達四五人連れでお花見とか芝居に行かれる、其の食事や總ての費用はと云ふと、其處は殿方です、イヤ私が拂つて置きます、イヤ僕に任して置き給へと云つて、各自に財布を出して吾れ一に勘定をします、すると親しい間柄のこと、四角張つて其の座で割前を出さうと云ふ方はない、何れ後からと云ふので、其儘お流れになつて了ふ、お流れになつたからとて親友のことであるから厚顔しく催促することも出來ず、詰りは先きに出したものが出し損になる例はいくらもあります、是等も財布の紐を締めてかゝらず、金錢を疎略にするから起ることであります、夫れ故財布の紐を長くして置くと斯う云ふ場合に早く出して人より先きに拂ひをしやうと思つても、紐を解くのに手數がかゝる爲め、其間に他の人が出して拂つて了う、是れは甚だ吝嗇なことのやうに聞えますが、決して吝嗇ではない、各自に當分な愉快を得たのですから、自分一人で總ての責任を引受ける義務も義理もない、後で其の割當てた費用丈け拂らへば立派なもの、少しも恥ることではありません。

また前にも申した如く、鳥渡外出をしましても、主婦であると家に其の品はありながら、臺所道具や飾裝品が目に附くと買ひたくなるものですが、財布の紐が長いと夫れを解くのが憶劫なので、ツイ見合はせて無駄なことに金錢を費さぬやうになります。是れが一代のうちに數萬の富を作つた御隱居の經濟な秘訣でありますが、今後婦人の交際範圍が擴まつて來るに隨つては、單に主婦のみでなく、一般の婦人達が、この財布の紐を締めてかゝると云ふことに重きを置いて、譬へ財布の紐は長く作らずとも、其の心持を忘れないやうにしたいものであります、一個の濫費は一家の濫費、一家の濫費は一國の濫費、其の及ぼす所や實に大なりであります。

小兒の齒

伊藤靜子

食物の消化の惡いのは、食物を嚙み碎く齒牙に大關係があるのですから、齒牙は最も大切にせねばなりませぬ。齒牙の惡るくなるは、小兒の時から注意せぬからで、幼時に夫々の注意さへして置けば成長して齒牙を患ふるやうなことはない、底で小兒自身に其注意をするやうに申付けて置くのと、親たるものは常にこれが保護を怠つてはなりません、夫れで其注意の要點を列記致しませう。

齒は毎日必ず一回以上掃除をせねばならぬこと。掃除をするのは食後に於てすること、餘り硬うない齒楊子で齒の上下及び內外とも掃除すること。齒に色が付いた時は齒磨粉、石鹼、受酸石灰などを少し楊子に附けて掃ふこと。三度々々の食事が濟んだらば含嗽をすること。齒は成るべく亂暴に使はぬやうにすること。即ち糸を咬み切つたり、硬い物を咬むことは害あること。齒が腐蝕しかゝつたならば、痛み出さぬ前に齒科醫の治療を受けること。小兒は甘い物を好むものであれば、食後には必ず微温い湯で含嗽させること。

これだけを注意して往けば、齒を患ふることがありませぬから、親は能く〱此各項を勵行せねばなりませぬ。

小兒の服裝

關竹女史

愛兒の健全を願ふ母親は、宜しく小兒の服裝を考究し衞生經濟に適し、便利美麗なる衣服を着せしめ、以て運動を活潑にし、身體を保護せしめざる可らず

甲 初生兒と乳呑兒の服裝 一 襁褓、襯衣 二 着物 三 涎掛頭巾等

乙 保育兒の服裝 一 襦袢 二 帶 三 羽織

三、前掛足袋帽子等

丙 學齡兒の服裝 一 襦袢 帶 衣服 二 羽織 袴 三 股引 足袋 外套等

甲 初生兒即ち生れたての子供と乳呑兒即ち生れて一ヶ月より滿二年迄の小供

一 襁褓と襦袢は初生兒の身體に直接に觸るゝものにして體温を調節するに肝要なる着物なれば、尤も注意せざるべからず、抑も小兒の生れたてに於て、體温は大人の如く三十七度二分あれども身體の小なるより、他物に温度を奪はれ易ければ此點に注意すべし、

幼兒保育に就て

中村五六氏談

◎幼稚園問題は近來一層注意せらるゝ樣になつて來ました、或論者は幼稚園保育の結果を云々し、園を出てゝ小學校に入つた生徒を他の幼稚園に入らぬ生徒に比較 、其効果を疑はるゝ樣ですが、實驗によると勝れてよいとは云はれまいが、決して無効果ではありません……併し此著しくわからないのが、當り前であらうと思ひます。

◎一體小學校の主義方針と、幼稚園の夫れとは自ら異つて居ります、小學校は重に智識教育で、幼稚園は家庭教育的です、次に小學校は一齊主義ですが、幼稚園はそうでありません、又た幼稚園は後日學問をする基礎をつくる爲ですが、小學校は學問を敎ゆる爲めです斯樣に異つて居りますから、隨て幼稚園と小學校は事實に於て繼續がありません、

◎ですから、論者の云ふ統計的の効果を充分に見得ぬのでせう、併し敎育の効果と云ふものは、そう數字や理科學の樣に結果を明に見ることは出來ないものです、

◎併し近來段々小學校の敎育が幼稚園に接近して來ました、これ實に良い現象です、若し今一歩進むならば、一層よい結果を兒童の上に見得るであらうと思ひます、

◎一方から觀察すると、一般の父兄は幼稚園を以て、小學校に入る準備所の樣に思ひ做して居る風があります、隨て小學校は中學の、中學は高等學校の準備の爲めと云ふ樣に思つて居ますが、是等は恰ど家を作るに礎石からでなくして、屋根から先づ葺いて、漸次下に及すと同樣です、余は斯く上の學校の準備とのみ思ふて居ることは、間違でないかと思ふのです、

◎幼稚園では學問は敎へませぬ、科程を定め、之を或る期間是非了せねばならぬと云ふ樣な敎育はしません、出來る丈苦痛を與へず家にあると同樣に、嬉遊の中に保育して行くのですから、一部の父兄の需めらるゝ樣な、學問的準備とはならぬ、前にも申た通り學齡になる迄の兒童の家庭敎育を補ひ、他日智識敎育に堪ゆる丈にするのですから、父兄はよく幼稚園の性質を知り、組織を鑑みて、小學入學の準備の樣思はぬ樣にして欲しいものです。

◎家庭でも、幼兒敎育の相當の智識ある親達が、氣魂よく眞面目に實行して欲しい、兎角最初の間は隨分やりますが、永續しない風がある、それからまた是等の人の中に、甲の點のみ懸命にやるが、乙の點を忘れて居ると云ふ風にぬかりがあつて困る、事實此の如くですから、其敎育が滿足に行かぬのです、

◎余は昔の考へを顧みる必要があると思ふのです……昔は今の樣にそんなに六つかしくは云はなかつたが、武士には武士一定の主義があつて之に敎育の基礎を置きました、例へば「廉恥を重ずる」と云ふことですが、之を立て通す爲に困難も意とせず、又た勇敢であつた、そしてとゞのつまりは切腹……此精神が物心を知らぬ中から敎へ込まれて居つたのです、例へ何の事が充分判らんでも、再三再四敎訓されると、自然にその氣になつて來るものです、

◎つまり口先許の敎育や、牛呑込では駄目です、是非一種の確たる信念がなければならぬ、當今の樣な風では小悧功な者は出來樣が、諾を重ずる樣なしつかりした人物が出來ない、

◎幼兒の保育も此精神でやらなくては成功しません「小供だから」と云ふ樣な考へでは、到底將來國家の大事を托する人物を作り出すことは出來ません、

◎要するに眞面目でなければなりませぬ若し親が眞面目に養育するならば、其他の事は左程努めずとも、發達して行くであらうと思ひます

イ　褓褓と襦袢の材料は糊氣なき白木綿かフラ子ルの毛たゝぬもの、或は紀州子ル、伊太利亞子ル等をよしとす、但し古き子ルの單衣等を以て作るもよしされど此際には消毒法即ち熱湯をかけ、又は十分石鹸にて洗ひて後用ゆべし、然らずば不計害を醸すことあり、

ロ　色は無色もしくは、淡色のものをよしとす、軟弱なる皮膚は、色料の爲に害さるゝことあり、又度々洗濯すべきものなれば褪色する患なくて宜し

ハ　裁縫及び形狀——身頃に脊筋を作らず、出來る

だけ縫目の身體に接せぬ樣にすべし、即ち身頃を普通に仕立たるもの裏を表にして袖つけ着するか、又は二重に作りて、着する方よし、丈は短く、襁褓に達する程にてよし、長きに過ぐれば襁褓と共に、濕りて度々着更さする必要を生ぜん、袖は巾狹く丈短き平袖を宜しとす、

襁褓は半巾のものにして、二尺を二つ折にし、輪にしたる小なるものと、一巾もの四尺を輪にしたる如き大なるものを、打交ぜ作り置くべし、

二衣服（イ）材料平生着は鬱金木綿、又は紅金巾等の無垢樣の手輕き品に軟き綿を輕く入れて、數枚作り置き度々取換ゆべし、決して少しにても濕り氣あるものを用ゆべからず、晴着も亦此時期に於ける小供には、ネル、メリンス等の毛織物を宜しとす、少くとも裏地等には此等の品を用ふる方宜し、之體温を保ちて衛生に適し、洗濯に堪へて經濟に宜く、褪色し難くて、美麗を保ち、大巾物にて裁ち方に便ある等、總ての點に於て宜し、表地には、紬又は縮緬等もよろしからん、

ロ　色合は男女により異れども、總て衛生に害なき色ならば生々した色にて、からは大く美術に適ひたるものをよしとす、男子は飛白又は縞の大から宜し又平常着は洗濯に堪ゆる色合をよしとす、

ハ　裁縫と形狀＝＝割合に身の丈を長くし、身巾も下の方廣きがよし、即ち襁褓など纏ふ爲に前合ははは事あり、又手を腋の處より出せば袖付少き方よし、併し腋明は多き方、着せ又脱がす時に便にして身體に空氣ふれ易くして衛生上宜し、付け紐は二寸巾位にして從前のものより廣くし腹部に付くべし、胸部に付くべからず、もし上にあがりすぎ、胸部に付くときは大切なる小兒の胸を押し付けて衛生上害あり

三　涎掛も胸掛も、（イ）材料はネルを第一とす濕氣を通さず暖にして洗濯に堪ゆ（ロ）色合は白か薄色にして褪色せぬを善しとす、中にも涎掛は、小兒知らず〳〵の内に口中に入れ、又は涎液に濕りて、衣服に其色つくことあれば注意すべし、頭巾は小兒の

軟弱なる頭腦を保護する大切なるものなれば、輕くして空氣の通ひよく、而し外より來る害を防ぐに足るものをよしとす、又頭巾は裝飾に用ひられてあれば、裏の外は白ならずとも、適宜の色合模樣あるをよしとす、

乙保育兒即ち幼稚園教育を受くる年頃にして乳呑兒より少し成長せし子供

一　襦袢衣服は乳呑兒の時の注意にてよし、只乳呑兒の時の末より、歩行を自由にし運動盛なれば、必ずしも（イ）材料は軟きものを撰む必要なし、寧ろ漸々硬きものに慣れしむる方宜し、晴着には銘仙紬位を宜しとす、此時期には矢張洗濯を度々する必要あり、（ロ）色合模樣は男女により又時節によりて異れども、概して褪色せぬを度とすべし裏の色は男女とも甚色宜し、晴衣には女は、緋絹もよし（ハ）裁縫は筒袖に限る袖口を太くし腋明は七八寸即ち紐付の下りたけ右左に明け置く方宜し、之衛生に適し、且つ脊脱に便あり、又角目は針止を堅くせんよりは、細縁を付置く方堅牢なり、

二帶（イ）材料種々あれども、男女とも此時期は軟き品をよしとす、男は金巾、又はメリンスの三尺帶女は友禪メリンスの細絎位を宜しとす、女の晴衣には友禪縮緬もよし博多地等ならば軟き輕さを撰むべし、重き織物等は其の時機に於ては望ましからず（ロ）色合等は美術に適ふたるを宜しとす、



東郷大將令孃　八千代子

即ち衣服の色合模様に比べみるべし、但男は白若しくは紫の如き濃き色よし前者は洗濯にたへ後者は穢目見えずしてよし、

三　羽織＝＝袖なしもよし、又袖ありても筒袖にかぎる、長き袂を付け、小兒の運動を妨ぐべからず、又此頃は羽織の紐長きにすぐる弊あり、物に引かゝり、又は踏みつけなどして、危し（イ）材料は男兒は木綿紺がすり、女子はメリンス友禪位よし、此頃流行する被布は地質を多く要し、又飾などの贅物ありて、經濟に適せず、又此物は元來外出の際の塵除に着したるもの、變せし物なれば禮に適ひたる服にあらず、務めて用ひざるをよしとす、

四　前掛は白のキャラコにて作り男女共此時期には用ひ慣れしむべし、足袋も女子は體なれば、夏冬ともに用ひしむべし、男子は大寒の時の外用ゆるに及ばず、帽子は男女外出の際、必ず用ゆるに慣れしむべし、腦を保護する爲に必要也

丙學齡兒即ち學校に通學する年輩の子供、

一　襦袢・衣服・帶等前に同じ、材料は強靱なるものを撰み、質素を旨とす奢侈に陷いらぬ樣にすべし、又單衣に袖口裾廻たけを袷樣につけて仕立常に上に着せ度々之を洗濯すべし、之清潔の點にも經濟の點にも宜し、



右　上村中將令孃　利子

二　羽織・袴・平常着は前に同じ禮服として黒木綿紋付を造り置くべし、又袴は制服として、小倉樣の

強きものにて作り毎日用ひしむべし女子は紫色又は赤茶の色メリンス宜し、仕立は男子は襠を低く作り、女子は巾を狭く作らざれば運動し難からん、

三　股引下穿等――男女共學校に通ふ程とならば之を用ひしむべし、不完全なる校舎の敷板の間より、吹あぐる風は、愛兒の健康を害すること往く々あれば、注意せざるべからず、品はメンネルか伊太利亞ネルの垢付かぬ色合のものにて太く作り屈伸自由になる樣に注意すべし、外套雨具として男子には羅紗にて作り置くべし、女子木綿合羽を作り置くべし、

以上は大略なれども之を參考として適宜に愛兒の衣服を作られん事を望むなり、

洗濯の心得

水野玉子

垢の付いて汚れた衣服が衞生に害あることは今更云はずとも皆さん御承知でありませうから、別段夫れに就ては云はず、直ちに洗濯の方法を御話いたします。

さて單に洗濯と申したところで、何んでも構はず只洗濯するばかりでは不可ませぬ、絹物ならば絹物のやうに、又毛織物ならば、其様に爲ませぬと夫れが爲に品を損することがあります。夫れから色物と白い物と一緒に洗濯しますと、何うかすると白い物へ色物の色が浸み込むことがありますから、能



肝付中將令孃　兼子

女子年中行事

一月

十六日召つかふ男女の雇人に一日の暇をやるべし
十八日宮中にて御歌會御催あり本年二才媛あらはる
此の月の食物はしら魚鯉鮒牡蠣雁鴨家鴨蜜柑菜陸芹

二月

初めての午の日に稲荷祭りありて兒女戯むれあそぶ
十一日の紀元節は神武天皇の御即位佳辰の紀念日也
干鰈烏賊土筆蕗の薹鶯菜等其の他は概ね一月の通り

三月

三日女子ある家々に雛をかざり菱餅白酒等をもちゆ
彼岸に入りて懇親の家々にすし團子などの贈答あり
若め鮎鯖鰈鯰蛤栄螺雉子山どり小鳥三葉花柚ひじき

四月

上旬より櫻花咲き初めて上野向島なと花見によろし
八日釋迦誕生日にて兒女おほく寺院につどひあそぶ
松魚ひらめ櫻鯛うなぎ竹の子うど蕨じゆんさいなど

五月

五日は男兒の祝日として幟をかざり粽柏餅等を食す
この月より稍や暑さを覺ゆれば單衣の用意あるべし
いな黒鯛年魚生姜とうがらし水芹そらまめぜんまい

六月

上旬より梅雨あり衣服とうに黴の生ぜぬ用心すべし
此の月田うゑあれば兒女に米の話するも好かるべし
こはだしん芋あらめ枝まめ人參牛蒡百合の根藤豆等

七月

十三日より盂蘭盆會にて先祖および亡き父母を祭る
十六日は雇人に一日の暇を遣はすこと一月におなじ
まぐろ茄子いんげん豆かんぺう紫蘇の實なつねぎ等

八月

此月上旬よりはじめて秋季に入れば袷の用意すべし
此の月二百十日とて大厄日あれば農家は注意すべし
さはら鮭はらゝ子いなだ西瓜まくは瓜なた豆海鼠等

九月

陰暦の八月十五夜ありて團子をつくり月見の遊あり
此月彼岸ありて鮨團子の贈答あること春季におなじ
ぼら生鮭かます蓮根もゝ梨子なつめ葡萄くわゐなど

十月

十七日は神嘗祭にて新しき穀物を伊勢大廟にさゝぐ
二十日は商家にて恵比須を祭り知人等つどひて遊ぶ
さんま松茸初しめじ葺芋細根大根柚子くり柿など

十一月

三日は天長節とて今上天皇御降誕の目出たき日なり
十五日男女三歳男兒五歳女兒七歳の者氏神にまうづ
むつ伊勢ゑび松露大根ほうれん草生海苔くわゐなど

十二月

十三日より諸所にとしの市立つ歳暮の用意あるべし
子女の通學する學校は概ね廿五日ころより休業あり
たら鮟鱇からすみ新鹽鮭干海苔根芋菜大根蕪ねぎ等

〳〵注意を願ひたいのです。
絹物を洗濯しますには、上等の石鹸を粉にしたものと、蜂蜜とを盃に一杯づゝ交ぜて、洋盃二杯の水に入れ、夫れに又焼酎をコップ一杯だけ入れまして先づ洗濯しやうと思ふ絹物の裏を表に出して板の上に廣げ、其上に先きに調合して置いた薬を塗り、徐々に擦りまして、時を見計ッて、水に入れて振りますと、汚れは奇麗に洗ひ落すことが出來ます。併し絹物は木綿物と違つて柔かいものでありますから、手強い洗ひ方をしては堪りません、直ぐと地に傷が付きますので、叮嚀に手柔かくせねばなりませぬ、夫れから又注意をして置きたいのは、絹物を洗濯するには、曹達を用ゐたり、煮たり、又は堅く絞ることはせぬやうにせねばなりませぬ。
次に毛織物の洗濯法は、先づ最初二寸四角程の石鹸を煮て溶解したのを、手桶一杯の水に入れて洗ひ、然うして石鹸を洗ひ落すには、三四度清い水で洗ひ濯ぐのです、夫れから微温湯にアンモニヤをほんの少量を滴らして洗ひますと彌が上にも清潔になるのです。溶解する石鹸は洗濯曹達でも差支ないのですが、石鹸ならば上等なのでなければ不可ませぬ、若し下等な石鹸を使用しますと、毛織物は縮み易いものですから、縮む恐れがあるのです。夫れから鹽氣のある水を使ふことは大禁物であるのと、又熱湯で洗ひますと縮むから不可ませぬ。洗つてから絞るにはキユーッと堅くせず、中加減に程の好い絞り方に限ります。夫れから洗濯する日は晴れた好い天氣で少し風がある日ならば決して縮むやうなことはありません、併し新らしいものになりますと影乾にした方が宜しいのです。これは序だから申して置きますが、フランネルの新らしいのを仕立てんと思ふならば、先づ反のまゝで水に浸して置くことが一二時の後用ゐますと、あとで洗濯する時縮むことがありませぬ。次に毛織物は決して煮てはなりませぬから能く其邊のところを覺えて置くやうにしたいのです。
次には普通の木綿物ですが、これは石鹸を付けても

中々落ちないものは、釜の中へ入れて水を入れ、石鹸を微細に刻み込むか、乃至洗濯曹達を入れて攪き交せながら、二三十分も煮まして、夫れから引出して石鹸を付けて湯で洗ひますと奇麗に落ちることは保險付きです。夫れから能く其邊で見受けますのはギザ〱のある洗濯板に、洗ふものに石鹸を付けてゴシ〱と擦ッてゐる方法ですが、これは簡便な良法であります。

これだけは色の褪め易いものを洗ふには適して居りませぬ、色の褪めるものには鉛糖といふ藥か、又は明礬を少量入れますと、色の褪めることは斷じてありませぬ。

吾が邦で洗濯物を乾すには竹竿の長いのを用ゐて居りますが、これは轉宅とか其他不便なものでありますから、麻繩を引ッ張つて、洗濯物を夫れにかけて飛ばぬやう針で止めて置けば簡便で宜しからうと思ひます。西洋人は總て此方法を用ゐて居りますから御覽になッたお方もありませう。

衣服の疊み樣

和田芳子

衣服を疊むには、第一左の手にて右の袖下、即ち脇の處を持ちて、右の手にて同じく縫筋の裾口を持ち衿を我左にして下に置き、次に衿肩より袖山の通りを直し、左の手にて右の衿下を持ち、右の手にて裾口を持ち、衽を衽の縫目より自分の方へ返し、又左の衿下と裾とを持ち、右の衽の如く向ふへ返し、次に三つ衿を前へ伏せ次に左の衿下と裾とを持ち、右の衿下と裾とへ重ねて之を揃はせ、次に袖付と裾とを持ち、脊縫より折返し、縫目を眞直になし、兩方の脇を揃へ、又左の袖を袖付の縫目より折返し、次に左の手を衿先の通り身頃の處に當て、右の手にて裾口を持ち左に折返し（但し綿入は衽を肩より先へ出すなり）次に左の手にて、袖付と裾口を持ち、右の手にて折たる端を持て共に向ふへ返し、左の袖に準ひ、右の袖を折返し正しくして置くのである、

袴を疊むには、第一左の手にて前紐の付と、腰板の付の處とを持ち、右手を添へて、裾口を右に後を出して下に置き、左の手にて腰板を持ち、右の手にて中の稜を直し、尋で後裾口の稜を六分程交へ、裾口を持ちて左右に引伸し、後の稜を正しくなし、引返して前の稜を正しくなし、相引と裾口の中央より一寸程上の處に左の掌を當て、折目をつけ其手を引ながら、右の手にて前後の裾口を共に持ちて折返し、又折返したる裾口より、一寸程も離して又折目をつけ、前の如く左の手にて、前の紐付と腰板とを共に持ちて折返し、即ち三つ折になりたる後の上にて紐を疊むのである、

被布を疊むには、第一袖付の山の處を左の手に持ち裾口を右にして下に置き、襠の中心より折りて、竪衿を向ふに展し、又左の手にて、左の袖山を正しくなし、又右の手にて、左の襠の中心より折りて、竪衿を下前の上に重ね、小衿を前に折り、次に袖付より、二寸程を離して身頃を縱に眞直に折りて袖を向ふに返し、亦左の袖も右と同樣に折り、右の袖の上に重ね、袖の下より二つに折りて疊むのである、

解物の順序

渡邊紫苑

△普通の襦袢　初め半衿を解放し、次に衿の絎目を解き、又衿付を放し、次に裾口馬乘の絎目を解き、次の袖付を次に脇縫を解放し、次に脊縫を、終に袖の縫目絎目を解くのである、

△單物　初め衿の絎目を解き衿付を放し、次に裾口竪裙の絎目を次に袵を、次に袖口を、口明の絎目を解き、同じく其縫目も解き、次に脇縫を終りに脊の縫目を解き放すのである、

△袷　初め衿の絎目を解き、次に衿を解放し、次に裙下を、次に裏表の袵を、次に裏表の袖付を又袖の縫目を解き、次に裾口を解きて裏表を放し、次に脇縫を解き、終りに脊縫を解き放すのである、

△綿入　初め襟の絎目を、次に竪褄の絎目を、次に袖口の絎目を解き、次に裏表を引放して綿を伸し、其斷絶せぬ樣に取出し、次に裾口の縫目を解きて裏表を放し、次に裏の襟を、次に衽を、次に脇縫と脊を解き、終りに表を裏に倣ひて順次とき放すのである、

△袴　初め絎目を解き、次に紐と腰板とを放し、次に裾口の絎目を、次に相引を、又笹襞と投を解き、次は相乘を解き、終りに奥布と後襠を放すのである

袴の色上

藤野由宇子

海老茶袴や紫の袴の、色の褪めた物は實に見た所の惡い者で、何とも云へぬ汚らしい感じが起る、其で往々褪めた儘で穿いて居る人があるが、あれは色上法を知らないので、仕方が無しに穿いて居るのだらうと想像する、其人達に至極手輕に出來る色上法をお話しいたしませう、

手輕な色上法と云ふのも、試みて見る迄は兎角面倒臭がるもので、偖實地行つて見ると何の造作もない事なので、あゝせよ、かうせよ、と書いてあつても、其の外は浸して置いたりするので、手數は極少しか、掛らない、だから此からの方法を讀んで面倒と思はずに、色の褪めた袴を困つて穿いて居る人は、色上するが能い、今一度云ふが、試みて見なければ何時迄經つても、面倒な樣な氣がするのだ、先づ餘談は是迄として、

先づ色の褪めた袴、即ち色上すべき袴を解いて、能く洗濯せねばならぬ、洗濯と云ふても日本在來の樣な、石鹸を付けて揉んではならぬ、石鹸液で一時間位煮沸するのである、後に完全な水洗をして乾かせばよい、其から色上すべき袴の量目を見る事を忘れてはならぬ、

其目方を量つた袴地百匁に對し、三匁乃至十匁の『タンニン』酸か、或は二十匁許りの矢車の煮出汁の中

に、凡そ一夜間浸漬し置くのである、無論液の表面に袴地が出てはならぬ、一夜浸した後引上げて絞る斷つて置くが此時水洗してはならぬ、

而して袴地百匁に對し、二匁の吐酒石（劇藥）と極少量の鹽化『アンモニヤ』を溶した液の中に浸し置く、其時間は凡そ三十分間で温度は五十度（攝氏）にして置く、

偖いよ／＼今度で染にかゝるのである、先づ染法を話をして、其から染粉の名を申しませう、染る前に、染粉を溶かさねばならぬ、先づ可使量の染粉、即ち布百匁に對し、三匁を別の小さな器に溶かす、水に溶け難いやうだつたら『アルコール』を少し入れると善い、兎も角も染粉が溶けたなら濾過するのであるが、能く溶けてある様だつたら、濾過せなくともよい、

其で別器に水を入れ其中に徐々に染粉を注加しつゝ攪拌し、其中に袴地を繰り入れゝば能い、然し眞正なる方法は、水を盛れる別器に、濃厚なる染粉の溶液を小量入れ、善く攪拌してから袴地を入れ、徐々殘餘の染粉の液を加へ、後漸次に温度を上せて、攝氏八十度位にする、此の温度で三十分間

女藝十圖（其の八）炊事



程置き引上げて水洗をするのだ
而し手馴れないと、能く染粉が吸收された所と、左程能く吸はれない所とが出來て、兎角むらになり易い此恐れを除く爲には、酒石酸か蓚酸の極少量を溶かして加へると、染粉が除々に吸はれるから、決してむらを生ずる事はない、
其で如何云ふ染粉がよいかと云ふと『セリスプライマ』結晶海老茶と云ふ染粉である、海老茶色は多く配合色であるから、一々云ふ事は出來ぬ、配合色で海老茶色を染め樣とする時は近所の染粉を賣つて居る所で聞くのがよい『セリスプライマ』百六十匁が一圓四十錢位である、
海老茶は前の通りであるが、紫の方は『メシールヴアイヲレット』と云ふ染粉である、紫の染粉と云ふても幾種もあるから其積りで、之も前と同じ位の價だらうと思ふ、此等の染粉は、日本橋瀬戸物町の桂屋に行けばある、然し何處でも染粉を賣る店にあるが此迄述べた染法で行へば褪色する恐れがない、而して袴地は勿論『カシメヤ』で話したのである、其から今迄の通りの手段をして、染粉さへ替へれば如何なる色でも自由に染まる、木綿には勿論完全に染まる染粉の分量は無論同じである、
唯終りに一言せねばならぬのは、釜や鍋で煮る時に表面許りでなく内部迄熱が通る樣にすればよい、而して釜や鍋は決して汚なくはならぬ、能く水で洗滌すれば清潔になる、先づ暑中休暇になりと試みて御覽なさい、褪めた袴も見違へる程奇麗になりますぞ

◉今春上京の女學生　今春の學期より入學すべく上京せし女學生の數は、未だ正確なる調査なきも、先頃五六の教育家が集まりたる際の概算によれば、先づ三千八百名より四千名の間なるよし、近時女學生問題のやかましき時、この上京者あるは喜ぶべき傾向か、將た憂ふべき事柄なるか、幸に上京せられたる女學生諸君、身體と共に志操も健全に、學成り業遂げて、美しき家庭の主宰者となられん事を祈る、

◉東京府恩給交附期日

▲勳勲年金 並 舊令文官恩給

六月、十二月	四日	金鵄勲章年金
	五日	旭日勲章年金（一期金額卅五圓以上）
	六日	同（一期金額卅五圓以下）
	七日	舊令文官恩給同扶助料

▲文官恩給

一月	十日	文官恩給	一期金額五十圓以上
四、七、十月	五日	學校職員退隱料	
一月	十一日	同	一期金額五十圓未滿卅圓以上
四、七、十月	六日	同	
一月	十二日	同	一期金額卅圓未滿
四、七、十月	七日	同	
一月	十三日	文官諸扶助料	
四、七、十月	八日	學校職員遺族扶助料	

▲陸軍恩給

一月	十四日	陸軍恩給	一期十六圓以上
四、七、十月	九日		
一月	十五日	同	一期金額十六圓未滿
四、七、十月	十日		
一月	十六日	陸軍諸扶助料	一期金額十三圓以上
四、七、十月	十一日		
一月	十七日	同	一期金額十三圓未滿
四、七、十月	十二日		

▲海軍恩給

一月	十八日	海軍恩給
四、七、八月	十三日	海軍諸扶助料

進物の心得

雨谷綾子

進物として品物を贈るには最も注意を要することであります、例令ば先方が烟草が嫌ひであるのに、烟草を贈つたり、又は酒嫌ひの家へ酒を贈るなどは、先方は決して夫れを有難いとは思ひませぬ、否な有難いと思はぬばかりではなく却て迷惑とするかも知れませぬ。されば進物をするには先づ先方の嗜好如何を見計つて、此品ならば大丈夫先方が氣に入るといふことを察するのが大切であらうと思ひます。尙ほ又財滿ち物足り何一つ不自由なくしてゐる人に向つて、其人が持つてゐる品物を贈らぬやう注意せねばならぬ、例令其人は品物を貰つても、其品はあり餘る程持つてゐるので、少しも珍らしと思はないで贈り人の折角の厚意も夫れ程までには思ふてくれぬのです、年の暮や中元に贈り物をするのに、何時も〳〵砂糖袋や安團扇と極つてゐて、どんな家でも安團扇には隨分閉口してゐるやうですが、是等は進物に就て改良すべ

▲巡査看守退隱料

一　月　十九日〔巡査看守退隱料
四、七、十月　十四日〔巡査看守遺族扶助料

▲交附時間

一、十二月　午前九時より午後三時迄
四、六、十月　午前八時より午後二時迄
七　月　午前八時より正午迄
（何れも土曜日は正午迄の事）

右規定の期日若し休日に當る時は順次繰下げと定めらる

◎諸納税期

一　月	前年十二月十六日より本月十五日迄 地租第三期	市街宅地後半期分
二　月	地租第四期	酒造税第三期
三　月	地租第五期	所得税第三種後半期分 酒造税第四期
五　月	地租第六期	營業税前半期分
七　月	市街宅地前半期分	酒造税第一期
九　月	地租第一期	所得税第三種前半期分
十　月	酒造税第二期	
十一月	地租第二期	營業税後半期分
十二月	十六日より翌年一月十五日迄	地租第三期

き焦眉の急であらうと思ひます。此安團扇を贈るなどは先方が滿足しやうが爲まいが、只通り一遍の義理さへ濟ませば好い、言葉を換へて言へば、何んでも搆はないから遣りさへすれば好いといふのですが、コンナことなら一層進物せぬの優れるに如かずです。夫れから往々貰ひ物を、又他所に送る人がありますが、これを貰つた先方で、又他所に進物にする、夫れが廻はり廻はつて遂に一番最初の家に戻つて來たといふ笑ひ話もありまして、斯る時日を經る内には菓子などは、黴が生えて腐敗します其腐敗した物を他所に進物にするなどは實に酷い話で、こんなことは斷じて爲ぬ事にしたいものです、第一人が贈つてくれた眞心に對しても、夫れを他に送るのは濟まぬことだと思ひます。

貧窮な知巳があると假定しまして、其人に品物を送るのに、床の間に飾るやうな粧飾物を以てしたらばどんなものでせう、夫れこそ貰つた貧窮な人は、これを飾つて娛むよりは、何か實用になる物品を得たいと思ふでせう。中々以て粧飾品を飾り立てゝ娛しむ餘暇もありません、

◉郵便料金

▲種類　五種に分たれたり

▲第一種　書状（最四匁又は其端數毎に）　三錢

△第二種　葉書
- 通常葉書　一錢五厘
- 往復葉書　三錢
- 封緘葉書　三錢

△第三種（毎月の定期刊行物）
- （一）一號一個の重量廿匁又は其端數毎に　五厘
- （二）二號以上一束の重量廿匁又は其端數毎に　一錢

△第四種（書籍、印刷物、業務用書類、寫眞、書畫、圖畫、商品見本、雛形、博物學上の標本）（重量卅匁又は其端數ごとに）　二錢

△第五種　農產物種子（重量廿匁又は其端數毎に）　一錢

▲容積　通常郵便物の容積は長一尺三寸副八寸五分厚さ五寸を限とす

▲重量　第三種第四種第五種郵便物の重量は一個三百匁を限り商品見本雛形にありては一個百匁を限とす

▲特殊取扱　料金左の如し

△別配達料（一個に付）　市內十錢　市外卅錢

△留置通知料（同）　三錢

△配達證明料（同）　三錢

△書留料（同）　七錢

△價格表記　十圓迄は十五錢、十圓以上は十圓迄毎に五錢宛を增す

云はゞ其人は寶の持ち腐れとなるのですから、貧窮な人には夫れ相應に役に立つものを贈るやうに心懸けねばなりませぬ。歳暮とか、中元とかに是等豐でない人に進物を爲ますならば、餘り押し詰まらぬ內に送るやうに爲たいと思ひます、例令へば貧窮な人に物を送るのに十二月の三十一日に爲るなどは不可ない。何故不可ないかといへば、貰つた家では今少し早く貰うならば自分の家で使用の出來るものでありましたならば、買はなくても好かッた、要るものであつたから旣に買つて了ッた惜しい事を爲たといふ樣な場合がありますからです、ですから貧窮な人に物を送るには必時日の押詰まらぬ內に送るやうなことに爲たいと思ひます。酒好きの人に向つて、德利とか盃とかに高價を拂ふて送りますことは、酒と德利慥に緣のある品物ではありますが、先方は德利とか盃の珍奇を好む人でなく、單に飲みさへすれば好いといふのでしたら、是等の道具を贈ることは實に無駄な話で、コンナ人ならば酒其物を送つた方が、先方は非常に喜ぶでありませう。

◎小包郵便

▲容積重量　長さ幅、厚さとも各二尺を限とし、幅、厚とも五寸以内のものは長さ三尺迄延ばす事を得、重量は一貫五百匁限り

▲料金　内地は一聞郵便區内は五錢、同一郵便區外は二百匁迄十錢、四百匁迄十五錢、六百匁迄廿錢九、百匁迄卅錢、一貫二百匁迄四十錢、一貫五百匁迄五十錢△内地臺灣間及日淸韓の間は二百匁迄卅錢、四百匁迄卅五錢六百匁迄四十錢、九百匁迄五十錢、一貫二百匁迄六十錢、一貫五百匁迄七十錢

◎電報料金

和文は十五字以上五字を增す每に五錢、歐文は一語を增す每に五錢を加へらろ、但し同一市區内にて發受する電報にありては和歐文共に三錢を增すに止る

△市區町村内にて發受するもの　{和文十五字以内 十錢／歐文五語以内 十五錢}

△右以外のもの　{和文十五字以内 二十錢／歐文五語以内 二十五錢}

特別電報料左の如し

〈至急電報料　{官報 通常電報の三倍／私報 通常電報の二倍}

名刺の話

黄華女史

名刺の必要は、敢て交際場裡に花々しい人ばかりでなく誰も常に持つて居ねばなりません、第一人を訪問するやうな場合には是非ともなくてならぬ、殊に使ひ樣によつては一人前の役目をする場合もあるのです、で名刺は只々差出すばかりでよいものだと思ふてゐると、ものゝ作法を知らぬ人だと識者から笑はれますから、訪問其他に於ける名刺の出し方は是非覺えて置かねば不可ません、然かも婦人は最も禮讓を重んせねばならぬものですから此心掛は必ずありたいものです、中には名刺を大層凝る人がありますが、凝りすぎる爲に、種々の飾裝をしたりなどして、名刺の圏外に脱した氣障なものを拵へる人がありますのは、如何にも苦々しい次第であります、

人を訪問する場合の名刺は、美しい洋紙で質の丈夫なのが宜しい、世には仰々しく端書大の名刺を振りまはす人があつたり、大層光澤のあるものなどを用ゐる人があり

△照校……通常の四分の一を増す
△受信……通常料金(一音信分)
△追尾……追尾一回毎に新に料金を課す
△再送……新規發電同様
△同文……原信を除き一通毎に和文は十錢歐文は十五錢
△別使配達料 三里以内廿錢、島嶼にあてたるものは悉く廿錢

◉郵便爲替料

郵便爲替料左の如し

通常爲替	十圓以内	六錢	二十圓以内	十錢
	三十圓以内	十五錢	四十圓以内	十八錢
	五十圓以内	廿二錢		
電信爲替	十圓以内	三十錢	二十圓以内	卅五錢
	三十圓以内	四十錢	四十圓以内	四十五錢
	五十圓以内	五十錢		
小爲替	(五圓以下)	三錢		

◉所得税割

第三種に屬する所得税率左の如し

△十萬圓以上(千分の五十四)△五萬圓以上(千分の五十)△三萬圓以上(千分の五十四)△一萬五千圓以上(千分の三十五)△一萬圓以上(千分の三十)△五千圓以上(千分の廿五)△三千圓以上(千分の二十)△二千圓以上(千分の十七)△五百圓以上(千分の十二)、△三百圓以上(千分の十)

ますが、是等は謹まねばなりませぬ、夫から金縁の名刺を使用する人がありますが、これは宜しくありません、名刺に職業と宿所とを添へるのは差支ないことで、夫から或る場合によつては夫婦一緒の名刺を用ゐても別段妨げはありませんが、平素は各々別々のを用ゐる樣にしたいのです、佛蘭西は交際の花と歌はれてゐるだけに、人を訪問する場合名刺を出すに就ては夫々の定めがありまして、訪問する人が男子ならば、先方の家内の男女の數だけの名刺を出し、又女子ならば先方の女子の數だけの名刺を出すことになつて居ります、夫から饗應の招きを受けたり、又は品物を貰つたり又は結婚とか、死亡とか出產などの通知に接しましたならば、自分の名刺を送るのは、來意を承知したと云ふ意を表はしたもので好いことだと思ひます、新年の祝賀として人の家に行く時は、賀新年とか、賀新禧とか署した方か宜しい、又旅行する時は告出發など適宜の文字を書いて出すやうにしたいので、次に人を訪問した場合、萬一其人が不在でありましたならば、名刺の肩のところを、少しばかり折つて置くのが宜しうございます。

四季の料理

生田敏子

四五種づゝ、左に其取合せを記すべし

春の部

◎椀盛　小鴨薄切にしんじよ、せり▽鱚ざつと湯を通し、松露、三つ葉、口柚子▽鯛切身にみる貝、松露、花菜きの芽▽白魚、鴨、たけの子、小松菜、木の芽▽一と鹽鰆、もしほ、こんぶ▽鶉、しんじよ、菜、くわゐわぎり、三つ葉、柚子▽薄たひらぎ、竹輪、みの松茸、小松菜、柚子▽一鹽鯛、竹の子薄切、わらび、木のめ▽魚豆腐、松たけ、くき菜、木の芽▽鹽鴨、海老、しんじよ、みつば▽丸はんぺん、ふき、松露、木の芽▽むしさより、松露、小口わらび、▽鱗鴨、魚豆腐、ふき▽青いか、つぶ椎茸、松菜、

◎口とり物　栗きんとん、大かまぼこ、燒鶉▽いんげんきんとん、にしき玉子、くるま海老▽栗きんとん、かすていら、玉子、みかん、花くわゐ、きんしこぶ▽てらしいか、ぎせい豆腐、みかん、かまぼこ、れんこん。

◎燒物　鯛の濱燒、新生姜▽鯛白燒に木の芽醤油かけ▽針魚白燒にして酢醤油かけ▽鰆のつけ燒にすりわさび▽鰆のてり燒に、鹽燒のふきのとう▽鮎並の木のめ醤油付燒に、じれんじようき煮▽ひらめの色付燒に、しん生姜▽甘鯛てり燒に、きんかん甘煮△甘鯛味噌漬燒に、しん生姜、蛤の付燒に酢うど▽小鯛鹽燒、酢とり生姜、

◎膾　平目作り身、わかめせん、酢味噌▽小鯛、花かつを、わさび酢▽赤貝、うど、青のり、合せ酢▽海老をゆでゝほそくさき、酢味噌▽いかをほそくきり、ざつとゆで、うど、芥子酢味噌▽さよりきくらげせん甘酢▽すりいも、のりまき、わさび酢▽鮭燻引薄切うどせん、山葵だいゝ酢▽白魚ざつと湯を通し、蛸ゆで、小口ぎり、いり酒▽たひらぎせん、三つ葉、二杯酢、

◎煮物　たこの櫻煮、小芋、獨活▽鴨に、獨活、いり鳥▽ひらめあら煮に、もやし生姜△鹽鰆に、獨活甘煮▽まて貝、くわゐ、つくゝし▽みる貝、わらび、燒豆腐▽鰈の葛煮に、青のり▽きんこの煮詰に、わり山椒▽白魚に、うど、淺草海苔▽とこぶしに、竹の子、わらび▽鶉しんじよに、くわゐ、白瀧▽鹽鴨に、竹の子、わらび▽小鴨に、竹輪、生椎茸▽かき、よめな、葛掛、生姜▽たけの子に、

じゆんさい、葛かけ、おろし山葵、
◎和物　筍ゆでゝ木の芽味噌▽松露、きくらげ、こせう、味噌▽きんこに、松露、豆腐味噌▽車海老、ふきのとう、胡麻味噌▽いか
に、うど、きの芽味噌▽いかに、きくらげ、唐芥子、味噌▽鳥貝、わけぎ、からし、酢味噌▽赤貝、ゆり根、山せう味噌▽くわゐにも
やし茗荷、胡麻味噌▽百合根に、うど、きんざん寺味噌▽蛤に、あらめ、胡麻味噌▽はすに、さやゑんどう、しらあへ▽白魚に、わか
ちさ、　酢味噌あへ、
◎汁　松露に、よめな▽白魚に、いとぶき、めうど▽薄たひらぎに、松露、木のめ▽つみ入に、根芋くこ▽貝のはしら、蕨わらび、
めうど▽小かぶに、つみ入▽よめ菜、つくし▽焼豆腐、はらゝご▽わかめに、うど▽小はまぐり、蕨わらび▽小椎茸、つみ入、豆腐鯛
さいの目に、みつば、木の芽、

夏の部

◎椀盛　玉子、はんぺん、じゆんさい、いはたけ▽むじり海老、新里芋、いんげん、花柚子△鮎背切、じれん
じよ、冬瓜のせん▽鯛、ひどりゆば、いんげん、花柚▽あひ鴨、竹の子せん、いとみつば▽煮ぬき豆腐、竹紙こ
ぶ、花菜▽こち、青すゐき、柚子▽ひとしほ鯛、じゆんさい▽ばんつくり身、うちはなす、柚子▽はんそぼろ、新芋、花柚子▽青さぎ
薄作り、早松茸、冬瓜、柚子▽すゞきおろし身、へぎなす、ぜんまい▽うづらそぼろ、青づゐき、柚子▽片身あぢ、むしり冬瓜、さき
茄子▽すゞき作り身、さきなす、茗荷たけ▽塩くじら、茗荷せん、うちはなす▽はもの骨切、さやゑん豆、青山椒、
◎焼物　鱸の雛焼、しん生姜▽鮎の雛焼、青山椒△いさきの雛焼、すり生姜、火鱸雛焼、たで酢▽鯛の松笠切、青山椒、醤油付焼▽
鮪魚一鹽、酒の付焼▽鮎をひらき、たで醤油付焼▽じれんじよ串にさし、柚子味噌田楽、
◎鱠　鱸せごし、胡瓜せん、蓼、しそ、酢▽鯛細づくり、白瓜せん、三杯酢▽ぼらほそづくり、むしり海老、わさび酢鱸のなげ作△
海金松貝、蓼酢▽さらし鯨、午蒡せん、山椒、酢▽しめあぢ、ばな鮑、白髪うり、紫生姜、金かん▽洗鯉、唐辛いか、二葉しそ、栗生
姜、金かん、煎酒酢▽鯛かされぎり、さい形、椎茸蓮芋せん▽鯉角大身作り、胡瓜小口、蓼酢▽洗ひ鮒、獨活しらが、いり酒▽水貝に
花生姜△わかめ、茗荷たけ、じゆんさい、生姜酢▽鯖、胡瓜、たで酢▽鯛作り身、胡瓜、しそ、生姜酢▽海老、胡瓜、煎酒▽皮引鮎、
大たんざくたで酢▽鮎ほそづくり、じゆんさい、合せ酢、
◎煮物　赤海老、すつぽん煮、山椒▽竹の子輪切にさやゑん豆▽茶せん、茄子、新午蒡、あんかけ、とうからし▽冬瓜、はじききめ
あんかけ、おろし生姜▽あげくわゐ、竹の子、葉山椒▽新芋、十六さゝげ、あんかけ、おろし山椒▽蛸うす切り、茄子きりて共煮▽鶏
肉に、むしり蒟蒻、すり柚子赤海老、胡瓜あんかけおろし生▽赤海老に、はじけ豆、あんかけ　とうからし、

秋の部

◎椀盛　黒鯛の切身に、初茸つまみ菜、口柚子▽鯛の切身に、みる貝、みつば、口柚子、よぜかれい、ぜんまい、小口午蒡、柚子▽海老のたゝきに、松茸、冬瓜▽鶉のたゝき、さき松茸、花菜▽せいごの切身に、初茸、つまみ菜、柚子△そぼろ豆腐、まつたけの薄切、鴨、おぼろかけ▽鴨の作り身、半月しんじよ、しぼりゆば▽かき、松姜、ふきのたう

◎酢の物　さけのはらご、大根おろし、甘酢▽さけのさい形、大根おろし、防風▽しめあぢ、防風、わさび▽貝のはしら、大根おろし、ゝ酢▽かき、生のり、こま／＼防風、甘酢▽ひらめつくり身、黄菊、三杯酢▽鯖ほそづくり、大根おろし、合酢▽ぼらの細作り、茗荷のせん、からし、酢味噌▽さよりの細作りに、貝のはしら、生姜酢▽鯛の瀬作りに、くらげのせん、三杯酢、

◎焼物　鮭白焼にして、すり生姜▽鮭てり焼に、柚子皮、甘奨▽いな白焼に、すり生姜、生醤油△鴨すき焼に、ふとにの葱▽うづらを焼て、大根おろし、生醤油▽鴨の丸焼、松茸、すり柚子▽小鯛鹽焼、ゆりれ白煮、すどり生姜▽松茸の笠、らん切、醤油付焼▽きわだまぐろの傳法焼、葱の白根をほそくきり、はうろくにしき、火にかけて少しやけたるとき、まぐろの肉を刺身の如くきりて、葱のうへにのせ、焼けたるのち、わさび醤油にて用ふ、

◎煮物　蛸に、里芋、うま酢▽蛸のやはらか煮に、じれんじよ、うま煮▽鰹切身に、茄子のてり煮▽川はぜに、大根うま煮▽いなだの酢煮に、すゐきの煮しめ▽鮎の煮びたしに、新くりの甘煮▽あかいに、里芋、蓮根のうま煮▽めいた鰈に、大根のうま煮▽あなごにくわゐ、午蒡うま煮▽蛤の時雨煮に、生姜、

◎和物　里芋ゆでゝ、芥子の味噌あへ▽蛤の剝身に、小松菜ゆでて芥子あへ▽すゐきに、枝豆、胡麻酢あへ▽人参、こんにやく、味つけて白あへ、▽人参に、大根せんにきり、もみて胡麻酢あへ△蓮根、やはらかにゆでゝ、胡麻味噌あへ▽梨子をうすくへぎて、山葵あへ△百合の根ゆでゝ、梅肉あへ、

◎汁　初茸につまみな▽里いものこ、生椎茸▽はらゝ子に豆腐▽芝海老にうちわ茄子▽松茸に冬瓜▽焼はぜに、銀杏大根▽むかごにしらが午蒡▽しめじ茸に、茄子くし形▽さつま薯の角切に、さやいんげん、

冬の部

◎椀盛　石焼豆腐、玉子、そぼろ、柚子▽鴨のたゝきに、しんじよ、せり、柚子▽風呂ふき大根、柚子、味噌▽鴨、しんじよ、鹽松、茸、みつば▽むすびきすに、うど、のり▽海老のくづしに、鹽松茸、みつ葉、柚子▽鴨の薄切に、松露に、大根▽鰆の切身、青こんぶ▽鮟鱇に、豆腐、赤味噌、口山椒▽白魚、貝はしら、うど、

◎焼物　甘鯛てり焼に、くわゐ、せんべい▽鯛の鹽焼に、唐煮の蜜柑▽あはせさよりに、きぬまき卵▽魴鮄の鹽焼、きんかん甘煮▽ぶりの味噌漬焼にむし長芋山小鳥を首共たゝきて、山椒醤油つけ焼▽甘鯛の鱗焼に、天王寺かぶのしぎ焼△むし鰈色付焼、唐煮蜜柑▽

さわらのてり燒、すり生姜▽石鰈の白燒に、すり山葵醬油、

◎膾　かれひ作り身、うどのせん、山葵酢▽なまこ、生姜さいの目、鹽梅酢▽さより、みつ葉、すりわさび▽鯛つくり身に、うど、生酢▽なまこ小口きり、紅葉おろし、二杯酢▽いか細づくりに、生姜酢▽赤貝、うど、靑海苔、わかめ、三杯酢▽鮹を大ざいに切り、おろし芋、き醬油▽ぼらの細づくりに、大根短册、からし、酢味噌△さより細づくり、うどせん、甘酢▽きすつくり身、生のり、防風鹽梅酢▽むし鳥の肉をさきて、山葵酢むき蛤に、大根せん、からし、酢味噌▽さばき海老、わさび酢、

◎煮物　鯛すつぽん煮、くわゐ、はす▽燒はぜのやはらか煮、大根甘煮▽鯉のすつぽん煮に生姜▽鮒の甘露煮、大根甘煮▽ひらめの煮付、花形半生姜鮎の甘露酢、ひね生姜▽きんこの煮付、じねんじよ鹽煮△榮螺、金柑甘煮▽鷄に、こんにやくのころ／＼煮▽鴨のたゝきに、うどの甘煮▽半月大根に牛肉甘煮▽牛肉に、さゝがき牛蒡の煎煮▽海老と半月大根のうまに、

◎和へもの　はしらのおろしあへ▽あわびのわたあへ▽伊せ海老の玉子のきみあへ▽ぶりのきくらげ味噌あへ人參に百合根の胡麻味噌あへ▽ねぎの白根に、きくらげ、芥子あへ▽あげくわゐに、小松菜味噌あへ▽白魚をざつと湯を通し、玉子味噌あへ▽たうの芋ゆで胡麻味噌あへ、

◎汁　つみいれ、小かぶ、葉をつけて竪に薄切▽ぶりさいの目に、いてふ大根▽ばかのむき身に、すくひ豆腐▽くづし豆腐に、小はまぐり▽あられ豆腐に、菜こま／＼▽小芋わぎりに、菜ごま／＼▽赤貝へぎて、小芋繊切に、せりこま／＼▽燒豆腐さいの目に、はうれん草たゝきて▽小鳥のたゝきに、粒椎茸、靑菜たゝきて、

わくびき鹽の製法

灰引鹽の製法は、普通の鹽はにがり杯の雜物がありまして、味が宜しくありませぬから、これらの雜物を取去りて、料理に供へるものを灰引鹽と云ひます、その拵へやうは、玉子一個を靑銅鍋に入れてよくかきまぜ、これに鹽一升水一升を入れて煮立て、篩にあけるのである、またさらに五合の水を取りまして、これを篩に注いで、よく鹽を溶かすのであるが、溶けない鹽があるときには、指で篩の網にすりつけて、他の器で漉するである、また以前の鍋にもどしまして、火にかけて、絶えず金杓子でかきまぜてよく鹽をとかして、鍋を半分火より外して置きます、さうしますれば鹽のアクは、玉子に結びついて、水面の上の一方に集りますから、これを金杓子で掬ひとりまして、鹽水を他の器に移しながら布で漉して、またもとの鍋に入れて、弱火で煮るのです、その間に皿などに灰を入れて、上に美濃紙を敷いて、鍋の側へ備へるのである、鹽水は次第に煮つまりまして、鹽の結晶が出來始めましたれば、金杓子二三本を鍋にさし入れて置いて、この杓子の中へ鹽の結晶が集りたれば、金杓子を一本づゝ引上げて水を切りまして、備へて置いた皿の上へ、その結晶をうつして、また金杓子をさし入れるのである、

簡易なる製藥法

◎汚染除去水　酒精（九十五ペルセント）百分、『アンモニヤ』水三十グラムに『ベルチン』四グラムを加へたるものにて酸類脂蠟其他諸種の汚染を除去するに宜し、

◎あかぎれの藥　卵白及倔利攝林同量の混和液に揮發油を加へて香氣を附けたるもの、

◎胃痙攣の藥　『クミーン』油十二滴を一ポンドの水に溶解して手唇足等のヒビによろし、製す、

◎凍瘡藥　單寧酸水溶液に沃度丁幾を加へたるもの、

◎皮膚を奇麗にする法　食鹽『ラウエンデル』油及び枸櫞油を水に溶解し適量の硫ゕ　ろもの、

◎膣内洗滌藥　醋酸鉛、流酸亞鉛各一分、蒸餾水二十五ギョルンに水十二分を混和し一時間放置し濾過して一食匙量をコップ一杯の水に加へて洗滌す、

◎食物の防腐劑　『クロールカリウム』硝酸『カリウム』及び硼酸の同量を水に溶解し蒸發乾燥して製したるもの、

◎白粉　炭酸鉛十四分、滑石七分『マグチシア』一分に少量の『カルミン』を加へて淡紅色に染め適宜の芳香油を加へたるもの、

◎靴墨　『セールラック』七、五グラムを酒精十五グラムに溶解しこれに魚油二十滴と烟煤〇、一グラムを加へたるものにて製す、

◎解熱藥　『フエナヨチン』白糖各〇、三グラム以上混和し六包となし毎夕一二包づゝ服すれば感冒等にも宜し、

◎便通丸　食鹽一、五分、小麥澱粉一分に適量の水を加へ捏合して一丸の重量大約〇、八グラムとなす、

◎染髮藥　支那産沒食子末に菜油を加へ鐵鍋にて揮散する所の蒸氣の點火する迄焙燒し亞酸化銅亞酸化鐵と硫化『アンチモーン』の同量の混和物を混じ水を加へて適度なさしめ、毛髮に點布す、

◎足臭を治す藥　明礬末にて足臭及び足汗を治す

◎喘息藥　米國産楓糖に少量の炭酸曹達を加へたる物、

◎乳缺亡の治藥　過泥子五十グラム、茴香末五十グラム、燐酸鈣附叟模廿グラム白糖末百グラム、以上混和し毎二時間に湯又は牛乳に加へて服す、

◎眼病藥　白降汞三、五分、軟膏百分より製したる物、

◎毛髮脫落藥　蓖麻子油八十分、酒精二十分、單寧酸三分『ベルカモット』油一分枸櫞油〇、五分、

◎齒磨粉　『サボナリア』根末五十分、澱粉四十四分に『ベルガモット』油及び枸櫞油各一分を加へたるもの、

◎耳痛治療　單鉛膏四グラム、黄蠟二グラムを三十個の丸藥とする、

◎小兒の驅蟲藥　珊篤寧〇、〇五グラム、甘汞〇、〇グラム、白糖〇、五グラム以上混和し六包となし毎朝夕一包づゝ、

◎薄荷水　薄荷油十分『チミアン』油一分、橙皮油一分、硝酸依的兒二分を酒精四百分に溶解して製す、

◎化粧水　薔薇水中に酸化亞鉛、炭酸『マグチシウム』及び佛國製滑石を加へたるもの、

◎水白粉　芳香水八分、鉛白一分を含有す、

◎小兒滋養酸　小麥粉に乳糖を混和したるもの

◎乳糖劑偽藥　醋酸一分、鉛糖二分、樟腦五分に水百分を加へて製、

◎化粧用石鹸　椰子油石鹸百分に『パラフヰン』油五分『パラフヰン』十五分、滑石末十分を混和したるもの、

◎月經不調藥　麝香末十グラム、乾燥硫酸鐵十グラム、亞爾箇保爾適宜以上捏加して〇、一グラムの丸藥とし麝香丁幾を以て衣とす、これは便秘不消化等にもよろし、

瀬見の小川

中川愛氷口演

一刻千金の花の春、世帯じみたるこの臨時號を、閨秀諸大家の談と筆によつて、發行さるゝことを得たのは、甚だ喜ばしいことであつて、讀者諸嬢の好尚が、こゝに至らしめたことを感謝し、家庭萬歳を唱へざるを得ない次第である、そこで自分は女鑑編輯局の一員として、何をがな餘興に一筆をと思うて、熟考の結果、あつぱれ貞女の鑑として、常に欽慕せる小川直子刀自の半生を、これより諸嬢の前に演述することになつた、我が下手の口演、世間の上手の小説よりは、或は世道人心に裨益する所があらうかとも思はるゝので、閨秀諸氏の終に、萬紅叢中の緑一點となつて、此壇上に現はれたのである、さてこゝに瀬見の小川と題したのは、かの人口に噲炙せる「石川や瀬見の小川の清ければ」といふ歌が、刀自の生國と姓字に、緣故を持つて居るからである。

一

芝三田なる德川田安侯の御門を右に曲り、すぐに左に折れる横丁を十歩ばかりの所に黒板塀の一構へがある、家は寫眞に撮るほど立派ではないが必ず此處を通るものを振かへらしめるは、其の門標の學者にして古今の大貞女である、小川直子の名の光りを浴びるからである、

今の世の中は隨分物騒で、指輪や時計ばかりを滅金で胡麻化すばかりではない、いかゞはしい紳士淑女は

さて置いて、神も佛もなき闇の世の中など丶喞つた忠臣が、不思議に神と佛があつて赤き着物を着たといふのもあれば、毎日口を人道問題にたゞらして、十夫に見える貞女がある、實に滅金流行の全盛を極めて居るが、人生のありとあらゆる艱苦を積んで、ます〳〵心の鏡の清く磨かれ、日本婦人の模範となつて、千歳を照らす小川直子の如き貞女もある、決して人道全く地を拂ふた譯でもない、

李下自ら徑をなすで、心がけのよき親たちは、せめて、この香ひだけでもといふので、娘を人に仕立て丶貰ひに來る、通ひがだん〳〵置いて戴きたいとなり、三人が五人になり、十人になり、もと〳〵質素な人の住居で、部屋が幾つあるでもない、

それも構はず詰込まれる、外の事と違うて頼まれて見ればまた許さる丶限りは人情で、疊數より人の數と云ふほどであるが、三人よれば姦ましと定められたる女學生の、まことに物靜かな、しとやかな、奥床しいで、如何にすれば斯くは教育が出來るかと思ふ位、故に妻らしい妻を持ちたき人は、鳥の子紙の素晴らしい女學校の免狀より、小川先生の折紙を所望するやうになり、身の振方をよくする爲に、小川塾の卒業生などゝいふ、贋物まで出るやうになつた、

それは心の醜くさを覆ふ笑顔や、手本を實行せぬ千萬言の説教によるのではない、身を以て教へ、誠を以て導くからである、實に小川直子の一生は、小川直子自分すら、恐らく再び繰返すに堪へられぬのであらうが、女の道、妻たる道を示すには、屈竟な悲慘の境遇を經て來たと云ふても差支はあるまい、

この貞女小川直子は、天があらゆる婦人の手本にせんとて、天保十一年五月九日この世に生を與へられたものである、父は河島良左衛門と呼び、加州の藩士で、君侯のお側近く勤め、祿二百石を頂戴して居つた人である、



河島良左衛門は、久和、繁子、啓子、昌子の四人の子持でこの昌子が後に今の小川先生になつたのである、改名の事は後に譲ることにして、まづ小川直子の初の名を昌子と覺えて貰いたい、この良左衛門と云ふ人は、若い時分には家も裕かであり、且は一人息子といふ所から、チヤホヤと育てられたので、鷹揚な所があり、人柄も極めて上品であつたが、かう云ふ身分であつて、すべて驕奢の中に成長したものであるから、自分が親と云ふものになつた時には、家政意の如しと威張る譯には行かなくなつた、昌子はその末に生れたので、まだ乳房を握つて居る時に、はや既に運命が一變しやうとしたのである或日昌子の祖母なる人が、昌子の母に向つて、家計上止むを得ず、殊に女二人の次に生れた女の子であるから、昌子を何れへなりとも貰ひたき人あらば、與らうではないかといふ問題を起した、幾人あつても邪魔にならず、いさゝか憎い所のないのが子と云ふもので、この問題を提出された母は、嫁となつて、こゝに始めて異議を唱へねばならぬ次第になつた、折角此家へ生れて來たものを、たとへ三度の食事を二度にしても、我手にかけて育てたうござれば、この事ばかりは御免遊ばせ、と涙ながらに願うた、すると、それはお前の考へが違ふ、昔親のためには我子を土に埋めたと云ふことさへあるでないか、一家のこと、親夫の體面をも考へて貰はねばならぬ、たゞ我子の愛にばかり溺れて、それでは仕様がなからう、とあつたその母もさうまで云はれて見ると、私にはそれが出來ませぬ、と昌子をばかりかばふ譯に行かなくなつたものであるから、さう仰せあれば一々御道理でございます、貰はうといふものさへあれば、何時たりとも手離します、これでこの相談は纏つて、昌子はこの情深き母の家を出でねばならぬ身の上となつた、さて河島の家は、昌子一人が荷厄介になるほど、その日にも困る身代かと云へば、決してさう極端な話ではない、されど兎にも角にも、百二十萬石家の藩士であるから、一人の子を育てるにも、それ相當に家格だけ

の體面は保つて行かねばならぬ、こゝが中々むづかしい所である、かくて昌子は、そこ此處に口を掛けられて、如何なる母の懐に抱かるゝか、いまだ無心の昌子も運命甚だ心細いことになつたが、氣質のよいといふ媒介口で、さる百姓の家へ橋が渡りそれへ貰はるゝことになり、何月何日には迎へに來ると云ふ、話にまで進んだ。

二

昌子の母は三子と云ひて、流石に昌子の母たるに耻ぢぬ、否昌子等兄妹四人を立派な人物に仕立てた、貞女なり賢女なりである、世の諺にも末の子は一しほ可愛きものといへば、昌子を今より他人の子にするは千萬忍び難い所であるが、極めて大切に思ふ姑殿の言葉、詮方なき顔などは少しも見せず、いよ〳〵我手で育てられぬことゝなつたが、せめては貰はれる先の肩身、少しでも廣きやうにと、美しき衣裳など數多仕立てゝ、今は貰ひ人の迎へを待つばかりとなり、頓て約束の日ともなつたが、昌子が是から親とも賴むべき百姓夫婦は、昌子を引取りに來る、三子は我子を今は手離さねばならぬかと、既に覺悟は極めながら、又今更の涙を堰兼ぬる、これではならぬと、奥へ昌子を見に來ると、如何に致せしか昌子は其處らに影をも見せぬので、だん〳〵家の内を尋ね捜すと、藏の隅に、今しも貰はれて行かんとする昌子が、兄と姉三人に取圍まれて、餘念なき笑顔をつくつて居る、三子はそこに居たのであつたかと抱上げやうとするに、姉なり第一には兄の久和が、三子の袖に縋つて、昌を他處へ與るのではない、どうぞ家へ置いて貰ひたいと、まだ子供心にも、妹に別れを惜むで、それを無理にとも云へぬばかりの情愛が見ゆるので、三子が折角決心した鋒先も鈍つて來る、さて困つたことになつたと思ふて居ると、父良左衞門の從弟即ち昌子の叔父の、堀田重藏と云ふ人が來會して、件の有樣であるから、どうしたことかと、事の仔細を聞いて見

ると、家政上昌子を他へ遣はすといふので此騷ぎとの事に、此重藏と云ふ人は、條理のよく解つた、所謂話せる人であるから、殊に甥の久和が、幼年ながら妹を庇う情の厚きを見ては、如何にしても昌子を外に出すことに賛成することは出來ぬ、そこで口を開いて、昌子の祖母や母に向つて、あなた方は、この子を他處へやるのなんと、子供を澤山さうに仰るが、私どもは子供がなくて困つて居る、どんなことをしても子供の一人や二人多いからとて、それが育てられぬといふことはない、まア〳〵そのやうな事をなされずと、久和もあアして離しともながつて居るから、内へおくことにしては、それともたつて外へ出さねばならぬ事なら、私が貰はうではないか、と之は遠慮も入らぬから思ふた儘を云ふ、すると相手は之も可愛い孫の事であり、久和が友愛の情に心が動いて居る所へ、重藏の右の言葉、さて自分ばかりが薄情の考へであつたかと、姑の思はくも一變して、それもさうぢや、昌は何處へも遣らぬ、となつた、母の喜び久和兄妹の喜び、實に譬ふるものゝない程である、これが爲に、昌子は、晝寢の袂から蝶の飛び出す如き長閑な世を送る事の出來ぬ人になつて、兄の久和はこゝに妹の爲に短い一生を泣かねばならぬ人となつた、貰ひに來た百姓夫婦は、すご〳〵手ぶらで追歸されながら、之も御道理さまの十遍も繰返したとのことであるそこで昌子はやさしき母、やさしき兄、やさしき姉とゝもに、生れし家に育てられることになつたが、それが昌子の爲に果して好運であつたか、今日になつて見れば或はさうかもしれぬが、一生を安らかに送ることの出來ざつたことは、爭はれぬことゝ思はるゝ、

昌子を他の子にしようとした祖母も、自分の家に育てるとなれば、可愛さの他の兄妹に變る筈もなく、細々ながらも一家睦まじく暮し、殊に兄の久和は世に珍らしき程の妹思ひで、孝行者で、母の留守などには三人の妹を機嫌よく遊ばせる、殊に昌子は負ぶされも、抱かれも、麁相の面倒をも掛けたことであらう、

昌子が多年の涙を、少くも半分は引受けたであらうと察しられる、父良左衛門も、母三子も、心がけのよきばかりでなく、敷島の道にも疎からぬので、利發なる兄の久和も自然習ひ覺えるといふことであるから、睦しき中の樂しみも一しほである、昌子は九つの時始めて手習ふ業を教へられ、百人一首や、古今和歌集などは早くも諳んじ、覺束なくも歌の意味をさとり、昌子の幼なき心に早くも刻み込まれたのは、母より教へられた『いろは附』の歌で、何れも誡の歌ばかりであるが、その中の

　樂といふ身になる時は若きよりつとめし種のひらく花なれ

といふのである、歌としてはあまり感心するほどでもないが、早くもこの心を味ふたのは、まことに感ずべきことで、これが昌子の一生を占うた言葉とも思はれるが、いや／＼さうではない、この心が幼い時からあつたればこそ、百年の辛苦をも忍び、貞操を全うして、幾億萬人の鑑となり、名を千載にとゞむることが出來たのである、

昌子は右の如く、たゞ歌を素讀に覺えるばかりではなく、その趣味を感ずることも深く、母の手を助けて雑巾掛する時にも、感じた歌は幾度となく繰返され、『樂と云ふ』の歌の如きは、口に附いて居るもの丶如くであつた。

三

昌子の姉の啓子も、また幼い時から歌心があつて、昌子が松がすみの發句を作つた時に讀んだのが、

　呉竹の枝もおもげに露おけばうつらふ月の影のさやけさ

と云ふのであつたさうな、尤も文字の上からは季節が違ふやうに思はれるが、遠く前後せずして詠んだもの

には違ひない、兄はもとより、姉も斯ういふ風であるから、姉妹歌を作つては、互に啓さんはかう云ふ歌が出來た、昌さんはこんな歌を咏んだと、兩親に告げては、又互にあのやうな腰折のをと、恥合ふが例であつた、實に奥床しい、やさしいことであつた、

それであるから、母はいつも結構に出來た、上手に咏んだと、ます〳〵其を奬勵して、いろ〳〵の歌集を數へる、父も毎日五首なり、十首なりの歌を紙に書いて壁に貼付け、それを昌子姉妹に讀ませ、覺えたらば、又更に他の歌を書いて貼付る、『日本國づくし』の如きも、あらゆる教育書をも、このやり方で覺えさせる取分け歌はおもしろいと云ふので、自然貼出す紙の數も厚くなる、名歌と云ふ名歌は忽ちに諳んじるやうになる、故に昌子後に小川直子先生の歌は、その調が高くて、一誦忽ち記憶に殘るのである、今の星よ菫よと、淺薄極まる、卑調な無趣味の歌をつくる女歌人は、まづ以てこの素養を積れたく思ふのである

それから昌子が、此時代の遊戯はどうであつたかと云ふに、昌子姉妹等は、家事の手助をしながら、讀書の外には『これ〳〵草』といふ事をしたものである、この遊びは、すみれや、それに類似の花草を摘ためて、花莖の大小を競爭するので、その大小いづれが勝になるかは、その時々の約束にある、すべてかういふ女らしい遊びをして、飛んだりはねたり、お轉婆めいたことは、この姉妹から見ることが出來なかつたのである、

また夕食後、一夜の食卓の跡に集つた時には、いつも『歌文字』といふ遊びをしたものである、これには母も兄も加はつて、なか〳〵賑やかであつた、この遊びは、一人がまづ思ひ付いた歌を誦すると、座つた順に、下の句の頭字をとつて、『秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わが衣では露に濡れつゝ』といへは下の句の、わを取つて、『和田の原八十島かけて』と、かう云ふ風に次から次へ續ける、これが咄嗟の間に續け

るので、殊に四五人十數回をも繰返されるのであるから、極めて多くの歌を諳んじて居らねばならぬ、こゝに於て壁に貼つて敎へられた歌が、ひよい〳〵とおもしろく飛出すのである、九歳の時既に物に感じて、發句の一つも作つた昌子は、十二三の時には、本歌がぽつ〳〵出來るやうになつた、その始めに作つた、云はゞ昌子の歌暦の筆始めとも云ふべきは、

　梅の花こずゑにとまる黃鶯の初音を聞くぞ嬉しかりける

と云ふので、もとより掬すべき趣向ではないが、見たまゝの、すら〳〵とした歌であつて、少女の作としては、よくとゝなうて居る、これを見た母のよろこび、一つもお訂正する所がなく、まことによく出來ました、この調子で行けば、今に歌人になられる、なほ〳〵心にかけて勉强するがよい、と時々は題などを與へて讀まして見ると、殊の外に歌ごゝろがあつて、苦もなく歌を拵へるものであるから、これは後來名を出す歌人になるに違ひない、と口には出さねど、それを樂まれたことゝ思はれる、父の良左衞門も昌子が手習を好み、歌をよく讀むので、よきが上にもよかれと思ふは親ごゝろ、どうぞ人に立優つて學びの道の進むやうにと、程遠からぬ田井の天神樣へ參詣をして、作つた歌などを奉納したが、梅花の歌もその中の一つであるといふことである、かく昌子は父に伴はれて、この氏神樣へ參詣する道すがらも、父の自分を思ふ心の厚きに感じて、なにとぞこの父を喜ばせる程の名人にならねばならぬと、心がけも、祈念も、決して上の空でないから、天神樣の方でも、よし聽屆けてやる、感心なエライものじや、と屹度微笑を洩してお受があつたに相違ない、されば昌子が歌をつくる度に、たゞ世間有觸れた、勝手に三十一文字を並べて、どうにか先生がよいやうに手を入れてくれるであらう抔と、半分先生に寄掛つて居るなどゝは話が違うて、先生なる親や兄に歌を見せる時には、必ず物に成つて居る、察する所、これは豫め田井の天神樣

が朱を入れられるからであらう、序に兄久和がこの當時の歌を一つ加へ、兄弟三人三首としよう、それは例の有名な『三日月の頃より待ちし今日の月』といふのを歌にして、

十六夜の滿れば缺くる世の中に待たるゝものは三日月の影

といふのである、斯くの如く俳句を譯することも、漢詩を歌にすることも、これは縱橫無盡の歌才があつて、昌子の修養もこの久和の敎へに得る所が多かつたのである、終始一日の如く、妹に面倒を見て物を敎へた兄も珍らしきものであるが、又從順に兄に仕へて其敎へを受け、一家に文華を匂はせた妹昌子の如きも、また得がたいと云はねばならぬ。

四

昌子の姉の繁子は、早く叔母なる人に貰はれ、兄弟三人家に育つたが、今日とは違ひ、此時代には、一家揃つて、讀書の業にうき身をやつすなど云ふことは珍らしいことである、然るに揃ひも揃つて學問ずき、たがひに敎へつ研きつして、この間一家は甚だ細く暮したのであるが、心は誰も豊で、一人として賤しき根性に犯されたものはない、又時々は兄の久和が先達となつて、梅を見に行く、月を見に行くして歌の材料にすることなどもあつた、

斯くて年月は早くも經ちて、兄久和は妻を娶ることになり、啓子昌子の二人は、鬼千匹にも向ふといふ小姑といふものになつた、ところがこの二人は鬼半匹にも價せず、嫂に對していづれ從順であるから、一家はます〳〵睦まじく、賑やかになるばかりである、そのうちに姉の啓子も他に緣づきて、昌子一人未婿の人であつたが、母は昌子を朝早く起して、拭掃は殆んど一手に引受けさせ、他の厭がるやうな仕事は、撰に撰つて昌子にさせる、少しでも兄の妻の手の助かるやうにさせたが、母の昌子を使ふのは、嫂の前に於け

ること、奥樣と下女とほどの相違があつて、否昌子は下女以下に酷くこき使はれたのである、されど昌子は唯命これ從うて、厭な顏一つしたことがないので、父の如きは寧ろ母の殘酷なのをいぶかる程であつて昌子に少からず同情を寄せたものである、

或夜父良左衞門が、母三子との寢物語に、お前は昌ばかりを劇しく使ふやうであるが、それでは昌が可哀さうではないか、と云ふやうな話が始まつた、すると母はあの位にして丁度よろしいやうに思ひます、あれで他人樣の目から、よく働く、柔順なものぢやと見てくれるやうになりましたら、それが昌の仕合せ、昌の運の開く時でございます、嫁はもう運が開いて此家へ來たものでございますから、昌と一つに見ることは出來ませぬ、と斯ういふ答をしたものである、こゝ等は普通の母のやり方にない所で、娘にけしかけて嫂をふすべるなど云ふものとは、雲泥萬里の違ゐある心掛である、

殊にこの話に味ふべきは、人の妻となつたのは運の開いたものと云ふことであるが、境遇など別問題にした所がおもしろいではないか、昌子の當時の家に妻となつて來たものは、普通の目から見たら境遇上あまり運の開いたものとも見えぬが、女は金錢附畑に嫁するが目的でない、少くも人に嫁するのである、女は人に嫁することを得て、始めて運の開いたものと認めたのである、實に妻の位置を高めた貴い考で、在ふれた世間の母の夢にも見られぬ考で、やがてこれが昌子の一身にも應用せられたのである、

古い文句ではあるが、過行く月日に關守なく、昌子も今は妙齡になつた、文字を學ぶことは、女の藝のうちに編入してなかつたといふてもよいこの時代に、手跡は見事である、歌は上手に讀む、この藝を活用する爲に御殿奉公をして、一生俗事に拘らず、獨身で世を送りたいと思ひ、或日此意中を母に洩した、すると母は中々夫れに賛成をせぬ、おまへは飛んでもないことを云ふ人じや、讀書などといふものは、その身の

たしなみに習ふもので、女がそれで身を立てやうなぞと思ふて居るのは間違ひ、それに女に生れて、何が仕合せと云へば、良人を持つと云ふことぢや、女の爲には、良人程有難いものはない、なんでも女はよい良人を持たねばならぬものぢやかならず獨身でこの世を終らうなど〻思ふてはなりませぬ、と斯う云ふたのである、たゞ文字に現はれたばかりのこの言葉を聞くと、異樣な感じが起るであらうが、所詮女は良人を持つといふ事が天理に叶ふ譯であ





らう、即ち昌子にも天理に隨つて良人を持てといふのである、知行や、田地や、金錢や、株券を持てといふのではない、良妻賢母を振廻して、良人を持つを營業のやうに心得しむるのではない、先づ以て良人を持つ事を仕合として、女の道を遺憾なく盡させやうといふ考へである、昌子も母の意を領して、されば仰せに從ひますとなつた、がさて良人も持たうとなつて見て、この良人なるものが、勸工場へ物を買出しに行くやうな譯には行かぬ、まことに長し短し勝である、それに評判の賢女であるから、其處此處から所謂口が掛るが、この家は知行が何石ある、或は姑に小姑といふやうなお荷物がない、要するに樂な生活が出來ると云ふのが、嫁になる第一の希望でゝもあるやうに、それをお土産として、話を持込まれたものである、されど昌子の母の意をうけて、良人らしい良人を持ちたい、決して知行や金錢に嫁入したくはない、武藝であらうが、文事であらうが、また如何なる藝術のある人でもよろしいが、取所ある、良人を持ちたいもので、その上に今一つ望みと云ふは、心の正しい人でなければならぬ、知行があらうがなからうが、それ等の事はどうでもよい、と云ふのであるから、容易い樣でなか〳〵むづかしい注文である、それはその筈で、知行は親讓りで馬鹿でも持つて居るのもあらう、金錢は道理を辨へぬ人の持つて居るのもあらう、一藝に秀でた、心の正しい人と云ふものは、なか〳〵得難いものである、今の才女ならば、この得難い

より、算盤玉から良人をはじき出すであらうが、昌子の注文はどうしても、この得難いのでなければならぬのである。

五

昌子は良縁なれば嫁すべき人となつた、人の妻とならぬうちに、少しにても多く學問したいと云ふので、漢籍をも讀むことにしたのであつたが、學問をすることに全部賛成する母も、それには不同意を唱へて、女の癖に青表紙杯見るものではない、何でも女らしく、假名本を廣く見るがよいではないか、といはれたのであつた、女が青表紙を見て不都合のあるべき筈のないことも、この母にして知らぬことはないのであるさりながらもし青表紙など見て、女の口から理屈が出る樣ではとの懸念に相違ない、昌子も道理のこと、信じて、それよりは假名文の物語本、通俗本に廣く目を通して、この當時珍らしき博識となつたのであるさりながら良縁遠くして、普通の嫁入歳を後に指折るほどゝなつた、

然る處、この地に居を構へて、學者で、豪傑で、立派な人格を備へて居る小川幸三といふ人があつた、この人は金澤を去る四里、鶴見と云ふ村の醫師で、小川一方と云ふ人の長男である、當時加州藩よりお咎めを蒙つて、云はゞ謹愼の身である、されど其心は雪の如く、白く淸く、『縲紲にありと雖、其罪にあらず、小川幸三』とすましたものであつた、但しお咎めの原因は、世を憂ひ、時を愛でて、加州藩の政治向に就て建白書を捧呈したからである、素より俯仰天地に羞づる所がないのである、

昌子の兄久和は、世の評判にて幸三の人物を知り、且つ扇面などに認めた幸三の筆跡を見て、其運筆の一點曖昧の所のないこと、その詩文の一字一句、皆正義の二字より生れたること、兎にも角にも、名聞を第二にして、一身國家に盡すと云ふ心の正しき人といふことを知つて、時々昌子に向つても、幸三の人物評が

出たもので、昌子の心もそれに動かされたものである、則ち幸三は、豫て理想の夫としたるものに合格したからである、

出雲の神様は此縁を結ぶに於ては、早速承諾したものと見えて、この話不思議にも早くまとまり、昌子は天下の志士なり義人なる小川幸三の妻となるべき運が開いた、昌子の希望である、學者であつて、心の正しきことも正に合格したが、幸三の當時の境遇はと云へば、昌子は家政裕かならずと雖、二百石取のお嬢樣なり、相手は雨洩る家に起臥せる、云はゞ素浪人である、況して藩よりはお咎をうけた身の上である、普通の親の心、兄の心よりすると、先娘なり妹なりを與へることの出來ぬ人物である、しかも昌子の意に介するものは一つもなきばかりでなく、親なり兄なりが、この縁に兩手を擧げて賛成したもので、昌子のよき良人を得た點に於て、これにも合格したのである。

昌子は天下の志士小川幸三の妻となるべく、結納萬端も濟んで、昌子の爲には此上もなき黄道吉日なる、文久三年九月二十三日、年齢二十四にして、小川家に輿入をした、この時分には、河島の家は、昌子の兄が處理して居る時であつたから、身代も大に取直して居る時であり、殊に妹思ひの兄の事であるから、妹が一世一代の大禮を賑はして、荷物なり、披露なり、その仕度もなか〳〵盛にしたものである、嫁入つて見ると、良人幸三は毎日國事に奔走して、一家の事などは更に顧みないで、米櫃の蓋を開放して置いても、鼠の心配を免るゝ如きは珍らしくないことである、實に花嫁に對して面目次第もなき有樣である、然るに幸三その人物は、昌子がかねての希望の如く、評判以上の學問もあり、聞きしにまさる心の正しい、傅づけば傅くほど其人格の高いことが知られる、昌子はよき良人を持つた果報を思ふて、良人に仕へて、痛い所へ手の屆いたものである、正しき心と正しき心と相親しみ、幸三もまた深く昌子を愛して、

夫婦の中の睦まじきこと、誰羨まぬものもなき程であつた、これは世間通例の女であれは、其困り方にまづ目が窪んで、良人の人格など、そのやうな氣の利いた事が見えるものでない、自然男を見下さぬまでも妻たる行ひが幾分づゝか粗漏になり、遂に夫婦仲も何もあつたものでなくなる、昌子は學問のある、心の正しい人に愛せられて、過分な良人を持つた、女として夫を持つ程仕合せなことはないと母上の仰せられたも、これほどのものとは思はなんだと、今更ながら母の言に感じ、歩くにも、座るにも、良人の有難さを心に刻んだものである、

家庭教育といふことは忽にすべからざるもので、昌子が極めて貧しい幸三の妻として、一刻も其貧に心を亂さず、また世間を見たことのない、浮世の鹽の鹹さも知らぬ花嫁の昌子が、この間に立ちて、云ふに云はれぬ苦勞もあつたであらうが、それを忍ぶことの平氣であつたのは、十年一日の如く、細工を施さゞる平和の家庭に育ち、慈愛深き母が、今日の準備にもなるやう、下女以上とも見らるゝばかり、その塲限りの愛を忍んで、いつとなく辛苦を喜んで堪えらるゝだけの教へがあつたからで、幸三の極めて困難なる境遇に妻となつて、家計のことなどは更に心を痛めぬ、即ち運の開いた人となつたのである、

兄の久和も、逢へば逢ふほど幸三の人物に感じて、常に小川の家を訪れるを樂みとした、また及ぶべくは幸三の内顧の憂を薄からしめるやうに、何くれと妹のもとに贈り物をしたものである、幸三はいよ〳〵出でゝいよ〳〵無頓着。腕を拱いて首を傾けたと思へば、常に國家問題であつて、私事に及んだことはなかつた。

六

小川幸三は長州藩其他諸國の志士と交り、且つ加州藩に於ける勤王家と結んで、大に國家の爲に盡さうと

日夜殆んど寢食を忘るゝばかりであつた、德川十五代將軍慶喜公は、古來稀に見る名君で、早くより時世を洞察せられて政權を返上せらるゝ考を持つて居られた、去ながら十五代續きし德川家が、それで潰れて仕舞ふものか何かのやうに、德川家を思ふ餘りに、當時勤王を唱へた諸藩に對して、德川方といふ樣なものが出來、且つは勤王を唱ふる諸藩が、爲にする所あるやうな想像から、甲藩と乙藩との意志の折合はざる所が、勤王方ともなり德川方ともなつたのであらう、加州家は殊に十數代德川家より特殊の恩顧を受けたる大藩であり、且は當時貞淑の聞え高き、溶姫君も德川家より入輿せられた所であるから、突飛な行動を取る事は出來ぬ、普天の下率土の濱、王土にあらざる所なきは、日本國民一人として知らざるものはないのであるが、大なる意思の不疎通から、勤王家でない如き藩が現はれたのであらうと思はれる、

幸三は諸藩と聯絡をつけて、この意志を疎通させ、大勤王家德川慶喜公の思召を天下に普くしたいと思ひ日夜それに苦勞したのである、狹き家、用意乏しき幸三の家には、毎日のやうに加州藩及び諸藩の志士が訪れる、來るに時を擇ばず、來ては歸るを忘るゝ連中のみにて、其語る所國事に及ばざることなしであるが、それらの話は昌子に洩したこともなく、昌子もそれを聞かうともせなんだのである、

されど昌子の身になりて困難なるは、これ等の連中を、それ相應に饗應せねばならぬことで、その都度、生家の兩親や兄の厚意を受けて、何うにか斯うにか一日一日と送つた、誠に氣の毒な境遇であるが、昌子は却て世を渡る趣味を感じ、厭な顏一度したこともなく、斯る中には兎角に夫婦の間も不作法になり勝なるを、良人に仕へて唯至らざる所あるを恐るゝ有樣であるから、幸三の愛もます／＼加つて、琴瑟相和する如くであつた、

幸三は一家を顧みる暇はなきものゝ、また昌子の身を思へば不憫の情に堪へず、或日昌子に向つて、嘸貧

乏で苦しいことであらう、と涙をこぼしていたはつた、すると昌子は、何のそれが苦しい事でございませう、そのやうなことにまで御心配なされずとも宜しうございます、と慰められる人、慰める人、いづれがいづれやら分らぬやうに混線をした、

昌子は漢籍を讀むことを、母に封じられたのであつたが、漢籍を讀んだからとて、必ず理屈をひねる人にならねばならぬではなし、その心して學びさへすれば差支あるまいと、學問好の昌子、幸に學者の夫に愛せられる身となつて居るので、其教授を幸三に頼んだ、すると殊勝の事とあつて、面倒を見てくれることとなつた、即ち昌子の漢籍は、聞覺えを除いて、机に向つて學んだ第一着手は、良人幸三より教へを受けたのであつた、

本人の喜びは云ふまでもなく、兄の久和はかゝる有様を見て、昌子の幸福を羨んだものである、一日閑を得て久和は小川家を訪れる、折よく幸三も居合して、これはよくこそ、と爐の前に請じ、もとより心隔てぬ親族のことゝて、打寛いで話を交換する、幸三は昌子に、お生家の兄さんがお見えになつたが、何か御馳走をしては、と注文する、昌子はかしこまりました、とお受は申したが、御馳走の用意は何一つない、そこで裏の菜園から水菜を摘んで來て、それを羹にし、幸ひ酒はあつたので、どうにか斯うにか膳が出來た、すると幸三は、御馳走の注文はしたものゝ、さぞ昌子が困つて居ると思ひの外、そこへ一口飲める献立が出來たので、この小川家に、これ程の備荒貯蓄があつたか、さア兄さん、これで大に過して下さい、と盃を出したが、これでは大いに過されやうもない、されど潤色のない、すきとほる如き幸三の正しき心に添ふ、昌子が心づくしの料理、久和の身には、山海をあさつても、これ程の御馳走はあるまいと感じたのであつた、實に御馳走は文字の如く、馳走して出來た心づくしを味ふべきもので、そのもてなし振を味ふ

べきものである、さもなければ、車代と時間をつぶして、禮を述べて、他に招かれる愚をなすものはあるまいと思はれる、

爐を圍んで、幸三夫婦に久和の三人、件の御馳走を賞美して、世を語り、文を話し、淸らかに心を樂ませこの間に一點の塵氣をも交へなんだのである、久和は其日を豐かに送れる家の妻となつた、他の二人の妹よりは、この貧しき家に嫁いだ昌子を第一の仕合せ者として、昌子に向ふても、おまへは又となき立派な良人を持つたのであるから、かならず妻たる務を全うして、この夫の妻として耻かしからぬ行ひをせねばならぬ、と諭したものである、かゝることは當然のであるべきやうであるが、さてこの眞似の出來る兄弟また夫婦があるであらうか、まづ金の草鞋物であらう、それもその筈で、この三人の如きは天下一粒撰で無闇に外に類があつてたまるものではない、類が澤山あつて貰はねばならぬのであるが。

七

世は明治の新天地を迎ふる爲に、だん／＼騷がしくやかましくなつて、幸三夫婦が暖き交情も、長く續けしむることが出來ぬやうになつた、

小川幸三は一死國に盡すは此時と、藩侯に向つては、先づ驕奢を省いて民力を休養せしむるに力むべき上書をなし、且つ若侯には、同志等と朝廷に對する長州家の御周旋の爲に上京を勸めた、幸三等の運か不運か、この事は行はれたのであつた、

事態斯の如くであつたから、幸三の一身も甚だ安らかではない、そこで昌子に向ひ、われは御身を迎へてより、おん身の一方ならぬ心づくしで、苦しき中にも何一つ苦しきことを知らず、今日まで斯うして來たのは、過分至極と思ふて居る、さりながらいつ如何なる事が、この身にふりかゝるかもしれぬ今の境遇、

この上おん身に歎きを掛けんも氣の毒、一先づ離縁して心置なく事を爲さんと思ふ、これ迄の縁と思うて生家へ歸つて貰ひたい、よく／＼なればこのやうなことも云ふのである、必ず否やを云うて吳りやるな、口には立派に云へど、彼を思ひ此を思へば、落さんとすれど落つるは血の涙、昌子はたまりかねて、これは意外の事をうけたまはります、一旦夫婦と定まりました上は、この身は一生この家で送る覺悟、まして足はぬ勝のわたくしを、尋常ならず可愛がつて下さつた御恩、なか／＼船車にも積まれることではございませぬ、そのお心に似もやらず、離縁の何のと、そのやうなこと仰せられては、こればかりはお言葉を返す外はございませぬ、たつて離縁と仰れば、此場限の命でございます、どうぞ其のやうなことは御免なさつて、これ迄通りの妻と思うて下さいませ、よしや御國の爲に、御一命はめさるゝとも、それは武門のならひ、必ず泣きもいたしませぬ、せめては子でも生れましたら、たとひ岩の狹間でゝも、あなたの忘れ形見として、必ず立派に育てます、この後ともに、左樣なことは仰つて下さいますな、と云ふに流石の幸三も、昌子の心を動かすことが出來ず、さて言葉を改めて、そのやうに云うてくれるこゝろざし、滿足に思ふが、苦勞といふ苦勞はまだこれから、それが思ひやられる、昌子はまづ離縁だけは助かつたと、淚もいつの間にかとられて、たとひどのやうな苦勞が押寄せて來ましても、それは何とも思ひませぬ、どうぞお心に掛けて下さいますな、一言一句誠の心より起る響き、幸三は良妻を持得たことを今更ながら愉快に感じて、後顧の憂はこの時より根を絕つたのである、

幸三は同志とゝもに、京都の動靜を知るため、加州を出立した、時は昌子が小川家へ嫁いだ翌年の三月で藩侯より御內御用を帶びたものと傳へられて居る、然る所京都を警衞して居つた長州家が、俄に朝敵といふやうな行違ひから、幸三が加州の若侯筑前守に獻策したことも遂に畫餅となつて、後に筑前守は切腹と

いふ事になり、家老の松平大貳といふのがお身代りで、切腹だけはせられずに濟んだが、それから百二十萬石の若殿樣も、あはれ日蔭の身となられた、これも誰故といへば、幸三等のなす業、實に幸三は大月傳藏以上の惡漢であると、加州一體の噂となつた、

斯る事に成行くべしとも、神ならぬ身の幸三、つゆ知らう筈もないものであるから、何卒藩侯の首尾めでたかれと、同志の士等と京都の動靜を探るうち、何にしろ此時代の志士、妻は病床に臥し、兒は饑に泣くといふのがお定まりの有樣であるから、兎角先立つものが先立たぬ事になる、そこで幸三は同志の一人谷村直を加州へ飛脚に立たせて、金子調達方を頼んだ、ところが在藩の人々でも、同志の士といへば皆家を忘れ、身を忘れて居る連中であるから、なか／＼此調達に應ずるものがない、谷村も身體谷つて、もし他で金子が手に入らねば、妻に云付けてくれと幸三より云はれた言葉もあるが、まんざら幸三の家政を知らぬでもないから、それを驚かすにも忍びぬ、去ながら止むべき事でもないから、遂に幸三の留守宅を訪うたのである、

昌子は良人の身の上を案じ暮して、軒端の風の戰ぎさへ、もしや良人の便りではあるまいかと良人の行衛に心を通はせて、今宵もまだ燈心の火影淋しく、物思ひに耽つて居る所へ、とん／＼と戸を叩くものがある、時刻といひ、さては、とあはたゞしく戸を開けて見ると、良人ではなけれど、なつかしき良人よりの便りを齎したのであるから、何くれと旅にある良人の安否を聞き、さて來意はと云へば、良人よりの金子を才覺して渡せとのこと、昌子の今の身にはなか／＼の難題である。

八

勢ひ當惑せざるを得ぬは昌子で、その日の生活にも困つて、實家より助力を受けて居る程の仕合せである

から、通例なれば、この難題を解決するにしても、厭味の一つ位は云うて見たくなるであらう、されどさすがは昌子である、一寸お待遊ばせ、と思案をした結果は斯うである、良人の金子の入用、これはどうしても調達せねばならぬ、さればとて手許には少しの貯へもなく、簞笥の底をはたけば、多少の融通は利かぬでもないが、今は夜も更けたばかりでなく、待つ人の手前、良人の面目に對しても、風呂敷かゝへて飛出す譯には行かず、待つ身になれば一刻も千秋であらうから、相成るべくは直に調達したい、そこで姉の啓子が、端丈夫といふ醫師に嫁いで、端が江戸勤番で、同じ留守居でも、裕福に暮して居るから、それへ相談をしようと、谷村を待たせて端の家に行く、啓子は昌子の氣質を能く知つて居り、且は妹思ひの深い方であるから、昌子に厭な話半分もさせず、快く三十圓貸してくれたので、昌子はそれを受取るや否や、足も空に大喜びで歸り、それをそのまゝ谷村に渡し、翌朝未練氣もなく、女の命の次に大切に思ふ衣類殘らず一六銀行へ入れて、姉の啓子に前夜の三十圓を返却した、さても此の消息、あはれにも優しく、健氣なる話ではあるまいか、

この場合を世間並の妻君に飜譯すると、湯になるやら水になるやら解らぬ金子の才覺に先づ首をひねるであらう、よし拵へるにしても、翌日質屋へ行くほどなら、その夜厭な思ひをして金借りにも行くまい、貸せと云うて斯る遣ひ道の金を貸してくれるだけの信用も出來まい、大抵はそんな金子は出來ぬと云うて斷れと云ふが、姉の慈悲といふことにもなるであらう、借りた金は幸ひ家計の不如意の所であるから、幾分かは懷に入れたくなるであらう、質屋行だけは得意でも、こんな手際のよい譯には行くまい、而して昌子は質屋行の是が始めてゝ、然も終りであらう、置くほどなれば賣れといふ武士の娘氣質としては、これはあまり好ましくなかつたには違ひない、されど良人のおのれを信用し、續いて姉の己を信用するに對して

これ位な事はと、寧ろ微笑のうちに事を急いてこの事に及んだのであらう、其の心事を思へば、天下に一人として涙を吞むものはあるまい、

かくて昌子が着の身着のまゝとなり、貧乏して心中立てした幸三は如何になつたか、昌子が心づくしも水のあはれや、其の血の涙の固結した金子も、幸三の手に入るか入らぬに、幸三は海津に於てお召捕に相成り、青網かけた締り籠へ入れられて、公事場といふ仕置場の牢役人なる足輕附添で、一類お預けといふ事になる、此一類お預けといふのは、狂人ならぬ座敷牢に入れられて、一類が此看守の任に當り、謹愼をさせられるので、この牢を締り所といふのである、此時は無論加州藩では大變な評判で、大惡人と云ふ人もあれば、正義の人として、正義番附の大關に擬した人もある、されば幸三等が同志の一人として、中途より變心し、此災厄を免れた歸山梅太などいふ人を、『ぶら〳〵と獨り道より歸る山、梅太ともいひ逃げたとも云ふ』など〵惡評するものもある、されば幸三も一方では正義の人とせられたが、幸三の建策の爲に若侯が切腹せられんとするまでに立至つたものとして、加州第一の謀叛人とまで云ふ人がある、

昌子は久し振で良人に逢はれた喜びも、云はゞ科人となつて歸つたのであるから、よしや良人が常々、縲紲にありと雖も、其罪にあらずといふ事は信じて居る、又斯る事のあるべしと兼て覺悟はして居たのであるが、又今更の感にうたれて、良人を慰める言葉さへ、亂れ勝なる有樣である、この時の昌子の心中、これを思ひやる幸三の苦衷、實に人生の悲慘の限りを盡したものである、

兎角するうちに、幸三の父一方といふ人が、此始末を聞いて馳付ける、昌子の生家の兩親は殆んど昌子の家に附切りで、幸三夫婦を慰める、幸三はあたりの人々の親切をいたく喜んで、私は惡い事、又貴所方の恥になるやうな事はしてありませんから、それだけは御安心下さるやう、其他は俗談の外は何を陳するで

もなく、心靜かに天の命ずる所を待つもの丶如くであつた、

間もなく幸三の一類お預けは、一類の少い、即ち番人の少い所から、公事場奉行多田源助へお預けになつた、されど昌子は良人の心事の淸き事を知つて居るから、頓て晴天白日に成るであらうと、それを心だのみして居る、又良左衛門は、大事の婿を公事場へ送るといふのは何の因果であらうなど丶、寄ると觸ると幸三の噂で持切つて居る、兎角するほどに、幸三等の同志で、今日は靑木が捕つた、明日は不破が捉まるであらうなど丶、大變な騷ぎてゐるから、幸三もなか〳〵、靑天を見るの期甚だ覺束ないことになつた。

九

昌子は幸三が正しき心を賴みに、今日は宥免の御沙汰があるか、明日は樂しき家庭の人にならる丶かと、たゞそれのみを祈つた甲斐もなく、幸三は加州家に對してのみか、天下を騷がした大罪人とせられ、遠からず打首の刑に行はる丶事になり、幸三が正義番附の大關たるに對して、東大關とせられた、福岡宗助などは、はや生胴の刑に處せられたとの噂がある、生胴といふのは、砂の上に仰向けて臥させ、眞二つに胴切りをするのである、

幸三が金澤市中引廻はされて後、磔になつたなど、いまはしきことが物を思ひ寢の昌子が夢となつた、

あはれ世に夢てふもの丶なかりせば、ぬるまはうさの忘れんものを、

あはれ神もなしといへるその年の十月十九日には、いよ〳〵打首の刑に行はる丶事になつた、昌子は今更ながら身も世もあられず歎に打沈めるなかにも、何うかしてお命ばかりは取留めて置きたいものと、いろ〳〵心を痛めたが、當時の有樣如何ともする途がない、

然るに茲に若侯筑前守の近侍御近習に鶴見文次郎といふ人がある、それは兄久和の舊友であり、且は例の

歌文字會の一人であつたから、此鶴見より筑前守に願ひ、命乞がして貰ひたいと云ふので、晝は世上へ遠慮をして、夜の更くるを待ち、鶴見の邸へ行つた、此鶴見の邸と云ふのは、長町の長大隅守の邸と並んで、邸の前は大樹鬱蒼として生茂り化物の噂さへとり〳〵なる、晝猶くらき所にあるが、もはや世に恐ろしきものも何も、唯一筋に良人の命を助けたいと、歩む足さへ地に付かぬ有様である、

鶴見は昌子の來訪と聞いて早速奥へ通した、昔那染の昌子が憂にやつれた姿を見て、同情の念に堪へず、鶴見は何御用あつて、かゝる夜中にお出あつたかと、尋ぬると、昌子は餘の義でもございませぬ、知るゝ如く、良人幸三は藩の御不興を蒙り、月の十九日に、御所刑あるとのこと、良人に限つては藩家の不爲を企てるものではございませぬ、生かしてさへお置き下さらば、申譯の御奉公も出來まする、たとひ遠島を仰付けられるまでも、命だけはお助け下さるやう、筑前守樣へ御執成を願ひます、との事であるから、鶴見も此場合道理なる事と思はぬでもないが、さて昌子に云ふには、貴所も御存知の如く、若侯にも今は閑居のおん身の上であり、申上ぐれば幸三殿の事、必ず惡しくも思し召されまいが、幸三殿の建議をお用ひになられた爲め、お腹さへ召されんとするまでに立至つたことであるから、此儀ばかりは何と致し方もござるまい、との答、押せども敲けども、これ以上の音は出さうにもなきに、昌子が頼みの綱も切れ、すご〳〵暇乞ひして歸り行く、見送る鶴見も、あれが勢ひのよかつた歌文字時代の昌子が今の有様かと、思はず涙に燈火を消せば、戸外は月さへ顏を隱して、夜はしん〳〵とふけゆき、遠吠の犬の聲も、打しめつて聞ゆるのである。

十

蓮胤の言葉ならねど、幸三が一期の月影傾いて、餘算山の端に近いた、否山の端にさしかゝつて、明日は

御所刑と定まつた十八日の夜、良人の命乞も今宵を限りと云ふので、見るさへ聞くさへ、身顫ひのせられる公事場に駈込み、係り役人多田源助に、所謂駈込訴をしたのである、その申立には、鶴見にての辯護を反覆した上、お疑ひの晴るゝ迄御助命を願ひたい、その代りに私の命は如何やうにも御處分下さるやうにと、決心面に現はれて、其心なか〳〵奪ふべからざるものがある、もとより愛情の然らしむる所ではあるが、昌子は良人の淸廉なる心と、拔群の器量を、墳墓に送るに忍びず、一は私情、一は世の爲に、大に成す所あらしめんとしたのである、公事場に奉職する役人でも、人は人である、昌子が死を決しての命乞ひ、自分の勝手に振舞はるゝならば、放免する、同道して歸れ、とも言ひたい所であらう、されど事茲に至つては如何ともすることが出來ず、ひそかに昌子の父良左衛門を呼んで、良人の命に代るまでは、死すとも動かずと決心した昌子を引渡し、而も昌子が強情の訴願をお咎めあつて、これもまた一類お預けといふことになる、

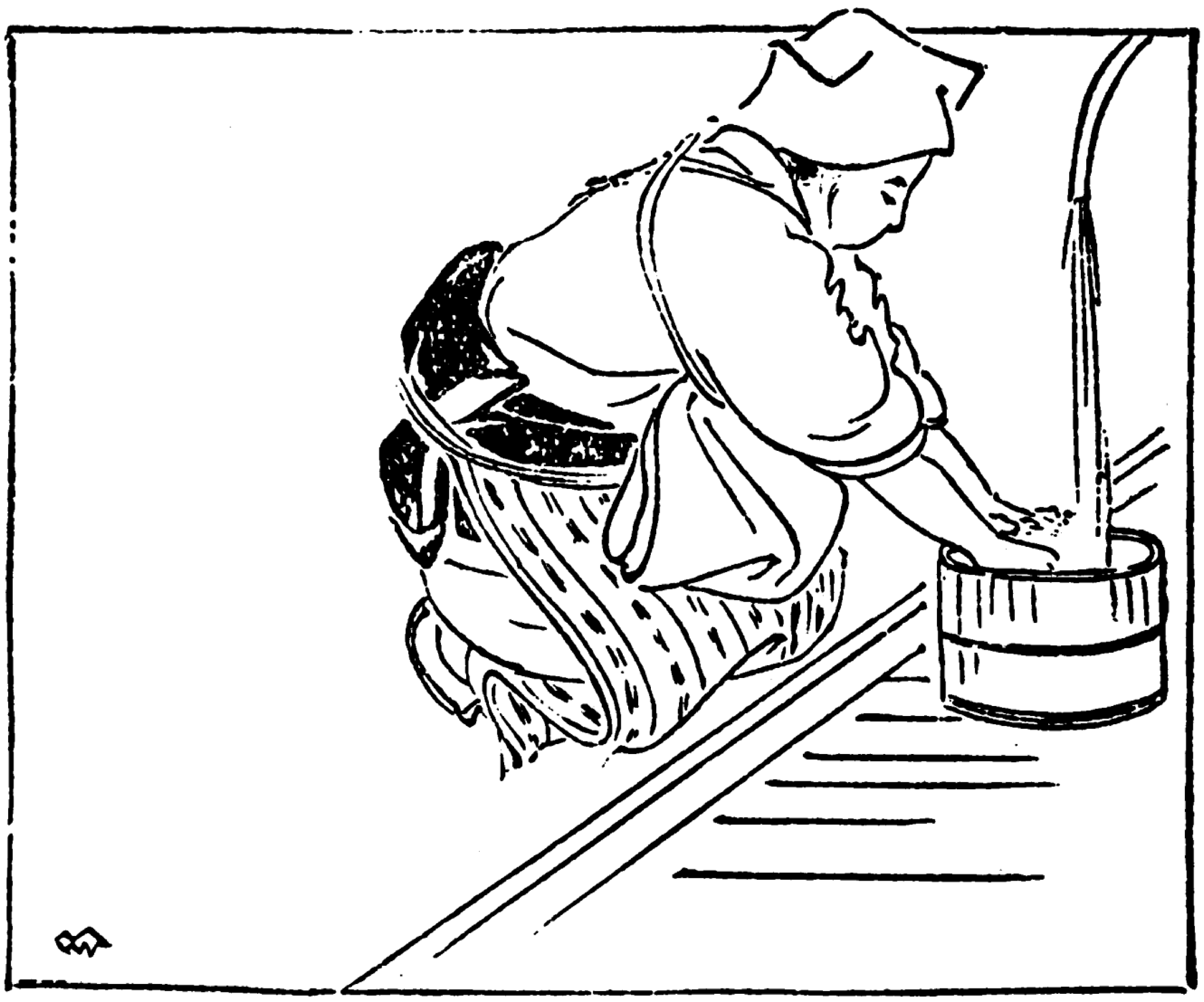
昌子が厚き涙は、公事場役人に依つて、幸三に傳へられ、幸三は此妻あるを幸福として、思はず微笑したのが、昌子の貞節に對する此上もなき報謝、やがて刑場の露と消えたのである、かくと聞きたる昌子の歎き、今や涙さへ涸れはてゝ思ふ儘になる身なれば、同じ道にと歎いたのである、

一家睦まじく語り興じた河島家も、昌子の歎きを慰むるに力ある兄の久和は、幸三の召捕らるゝ前より江戸詰となり、父はあれど母はあれど、昌子が涙を添へるばかりで、一家はその日頃降り續きたる、時雨のいつ晴るべくも見えぬばかりに、打しめりにしめるのである、

子を思ふ親の心、せめて久和にても居たならば、昌子の心の慰まれる事もあらうかと、母の病氣にかこづけて、久和を呼よせる事にしたが、親の病氣といふ廉にて、歸國の願ひ速に聞屆けられ、故鄕に歸りし久

和、思ひしにはまさる我家の有様、これも昌子の涙を減せしむる資格はないのである、この悲歎を引受けた河島の家よりは、その種を蒔いた幸三の噂は絶えぬが、未だ一度も不足がましき言葉はなかつたのである昌子は例の締り所に入れらるゝ身となり、唯さへ物思ひの繁き上に、せめて幸三殿の御首になりと名殘が惜みたいものと、今は哀しい頼みも、町はづれの豆田といふ人捨場に捨てられて、表向いては引取る事も出來ず、又憎みのかゝつた死骸とて、取捨られた場所も解らぬ有様に、昌子の悲歎はいとゞ遣瀬がないのである

女藝十圖（其の九）掃除



さても昌子は、良人が公事場に引揚げらるゝ時、今で云はゞ家宅捜索に逢うて幸三の筆で記されたものは、紙のはしくれまで取まとめたるまゝ、沒收せられ、今また此始末であるから、幸三の紀念といへば、心に殘る慈愛の言葉のみである、さればとて良人の死骸たゞ人捨場に無縁の土としては、この後何を目的に香華も手向けられることぞ、と云ひ出しては泣き、泣いては繰返し、側の見る目のつらさもそれに劣らぬのである、久和はさもあるべきことゝ兩親に幸三の父の一方とで額を鳩め、

久和の云ふやうは、昌の歎きも道理のある事ゆゑ、首なりとも得させたい、去ながら世間の思はくもあれば、これは昌に盗みにやるに限る、所が此人捨場は、人の膏血で草茫々と生茂り、かしこに頭、こゝに足、烏も血に飽き、犬も骨に飽くといふ、恐ろしい草原に人目を忍んで、夜中首を拾ふ役はあまり氣の進んだものでもあるまい、この話を聞いた昌子は、兄の心のうれしさと、良人の紀念を得たさに、今宵にも出掛けたしと云出でたので、之を聞いた幸三の父の心、やさしい嫁の言葉に、あらん限りの血も絞らるゝばかりの思ひがした事であらう。

十一

幸三の父一方は、昌子を人捨場へ行かしむるに忍びず、その役は私が引受けませう、と云ふので、其夜金澤の町を通り拔けて、淺野川を渡り、例の人捨場へ來ると、約束通りの淋しさ、物すごさ、思はず悽氣に襲はれんとするのである、彼處にか、此處にかと子を思ふ闇路をてらす月影に、見れど探せど我子の死骸らしきものはなし、いづれに取片づけられた事であらうぞ、これは非人小屋の隱坊をすかして、手に入れる外に道はないと、人捨場の番人とも云ふべき非人小屋を訪問すると、隱防は怪訝さうな顔をして、お前樣は何しに來たか、といふやうな譯、我子の爲なればこそ、實は折入つて賴みたい事があつて參つたが、何うぞ聞いて貰ひたい、相手は又お出なさつたといはぬばかりの、顔付で、その言ひ草で大方首がほしといふて來たのであらう、お家を騒がした人達の首は、お上の御沙汰が嚴しいから見せることも出來ぬ、ハレヤレこれで三人目ぢやと空嘯ぶいて居る憎々しさ、唯置くべき奴ではないが、この方にも賴む弱味もあればこそ、成る程察しの通りの所望、せめて見せる丈でも見せて貰ひたい、これは些少なれども、と一包の金子を與へたが、その金ほしくもないが、滅多な事して反對にお仕置になつては大變、まア斷つた方がよ

からうと人間界を餘所にした隱坊等に、物の道理の解らう筈もないが、このまゝ歸つては昌子への土産もない譯、と又心をねらして、成程それも道理ぢやが、所望の首に對して我は親、親の心になれば、誰も情は同じこと、お前とて親子の情を知ぬでもあるまい、せめて、見せるだけでも見せて貰ひたい、まさかに見せたからとて大したお咎もあるまい、と手を合さぬばかりであるから、流石の相手も、人情には敵せぬと見えて、それなら見せるだけでよろしいか、そして何といふ人のじや、過日の分なら皆標が付いて居る、一方もやう／＼胸をなでおろして、それはよくぞ承知をしてくれた、と隱坊を促せば、暫く此處でといふをも構はす、どし／＼其後に尾いて、とある所より堀出したのを見ると、まだ生々しき首、見るまでの心の張は忽ち弛んで、これが我子の身の果かと、覺えず其處に倒れんとするを、かくてはならぬと、件の首を用意に持ちし風呂敷に包んで、さらばお暇いたそうと立上るに、相手はあはたゞしく、それを持つて行かれてたまるものか、と云ふて見たがもう後の祭り、斯うして手に入れば此方のもの、ぐず／＼いへば一刀お見舞申すまでじや、と初めの勢ひは何處へやら、隱坊をおどし付けて、ふるへて居るひまに一目散、河島へ歸れば果して昌子は大待兼の處である、これより件の首を下物に、家内惣崩れに、涙の限りを泣いたのである、

幸三の生地なる鶴來村の金劍宮といふ、社の下に、不動瀧と云ふのがある、その瀧のあたりに藥師堂があり、藥師堂の横手に堀がある、そこに樫の木が二本枝を繁らして居る、夏などは見たことはなけれど、凉しさうである、昌子はこの樫の木の下、堀の側に小山を築いて、幸三の首に我髮の毛を切つたのを共に納めた、これは昌子が締り所を忍び出で、夜間四里の道を、この淋しい所に埋葬に來たので、それが幸三の墓地であるといふことは、後に發表せられたのである、

昌子はせめてもの心やりなる、良人の埋葬も我手一つに行ふたのであるが、締り所に思ひ出多い朝夕、何を樂みに生き殘れる我身ぞと

　いかにせん死出の山路ももろともに越ゆるべしとの思ひしものを

など口咏める、もあはれに悲しき限りである、さるほどに、其年も暮れ、世は新玉の春となつたが、昌子は去年のこの日頃、夫婦樂しく暮した事など思出しては、なか〳〵に雜煮も咽を下らず、いつ晴々しき顔を見せるとも知られぬ程であるから、母は何をがなして慰めたいものと、久和にかくと談らへば、久和も聲を曇らせて、今の所では昌の身に、泣くより外に樂しみもありますまい、泣くだけ泣かしておやりなされ、といふやうな始末で、泣く事の贊成者が出來たものであるから、昌子の泣いた分量はいかほどであつたなど〻さへ、思はる〻事もある、この折から

　たれこめて春のひかりもしらぬ身も、慰めんとやうぐひすのなく、

　何事を忘る〻花を見るにさへ、思ひのみ添ふ我身なりけり、

などの歌を詠んで、即ち敷島の道が昌子が禁牢中の壽命を取とめたものと思ふ、

かくて顧れば早き三たびの春秋も、涙に長く泣明し泣暮して、

　秋來てもさやけくもなし物思ふ、袖のしぐれにくもる月影、

の歌を見ても、その境遇を察するに餘りあることである、さて三年目の春、禁牢御免となつて、昌子は漸く自由の身となつた、

昌子は第一に良人の墓參りをしたしとて、出入のものを下女につれて、明日は未明より出懸けんと云ふ、母の三子は絶えて久しき昌子の元氣よき顔を見て、三年の愁眉を一時に開いたのであつた、さて其夜は昌子の手荷物をまとめて置かんと、何心なく行李の底を改め見れば、思ひも掛けぬ短刀一つ、これには流石

の三子も驚かさるを得ない、

そこで昌子の兩親と兄との間に、此短刀を持出された、兄の久和も、これは考ふるまでもない、昌子が良人の墓前に自殺する覺悟で、今生の名殘に、元氣よき笑顔をつくつて居るのであらう、寧そ思ひ通りにしてやるが慈悲かも知れぬが、今となりてはそれも犬死、どうか心を取直させたものと思ふた、

久和は昌子を小蔭に呼び、お前は飛んでもない事を考へて居るやうであるが、お前の心になれば、强ち無理とは思はぬ、去りから、もうよい加減にお兩親に御心配を掛けてはないか、と物徐かに諭されて見ると昌子も今更つゝまんも空恐しと、良人の命が助けたさに、公事場へ駈込訴をしました時、共に命を捨てやうと心に誓ひを立てましたが、間もなく一類お預けの身となりましたから、今は私の身體であつて私に自殺も出來ず、其時の心の約束を果したいと思ひまして、今日と云ふ今日を樂みにして居りましたが、だん〲の御さとし、死ぬることは思止るでございます、

さて誠の心ほど人を動かすものはない、昌子は兄の慈愛深き言葉に、三年の決心を夢と思ひ捨てゝ、翌朝早く墓所にとて家を出づる、流石に春の空ではあり、締り所より廣々とした天地に歩み出したのであるから道のべのすみれの花にもおのづから慰められて、

　すみれ草われに如何なる由緣あれば、かくなつかしき色を見すらむ

など口ずさまれ、又多古山の麓の茶屋に憩うて

◎世の中の道も直なるくれ竹に、ならはゞいかに物は思はじ、

さて墓所に來て見ると、懷かしさも一しほ

　おもひあまりもるゝ涙の音にだに、猶山彥の答のみして、

所は泉水のほとりであるから、

うき涙雨とこそふれ水の面に、影もとまらぬ人を戀ふとて

などいふ歌も出來た、千歳の恨みを懐いて眠れる地下の良人も、この心を喜んで受納したことであらう。

十二

越えて四年、昌子の父良左衛門は病沒し、續いて河島の家に大なる不幸があつた、時は慶應三年六月、昌子の兄久和は、兼て病中の身を越して會津征伐の途に就いた、いつもならば半町の徒歩さへ懶き程の身をもつて、勤王の爲に盡すは、此時より外にはあるまい、と強いて出立したのであつたが、出途匆々、病人の事ではあり、今と違つて軍隊の醫術など甚不完全で、待遇も極めて惡かつたものであるから、途中越後の長岡で、七月十六日病沒したのである、この二不幸を前後して引受けた河島の家は、後家二人に子供二人寄つては泣き、離れては泣き、空に知らぬ涙の雨の晴間さへたゞ泣くばかりであるが、殊に昌子はこの大恩ある父と兄に別れた悲み、短き口にて云ひ盡されるものではない、さりながら今は昌子も泣いてばかりゐる時ではない、一家の維持に就ても心配せねばならぬ、當時久和の妻ます子といふは年漸く廿四、若後家二人同居して居る所から、一人は嫁にやり、昌子は一人殘つて子供の世話をするやうになど勸めるものもあつた、本人の承知不承知はさて置いて、母の三子は一言の下にはねつけて、昌は小川の隱居、ます子は久和の妻、他所へやる嫁などは一人もない、といふたものである、何と小氣味のよい言葉ではあるまいか。

昌子はこれより自活の道を立てねばならぬので、他所の仕立物を引受ける、八反を織る、朝夕を下女代りに働いて家計を助け、其暇を見てこれより、文學修行に身を委ね、云はゞ晩學にて、今日の大名を成し、後に高輪御殿に出仕し、昌子、房子内親王殿下に進話することになり、名も此時に改め、其心を名詮自稱今の直子と稱するに至つたのである、

以上演述した所が、小川直子刀自の過去を三分した、初期の歷史とも見るべきものである、而も限られた頁を見込んでの演述であるから、それすら充分に記述することの出來ぬを遺憾に思ふのである、因に云小川幸三氏は正五位を贈られ、刀自は一昨年從七位を授けられたのである。



四季の消息

阿井飛洋

年の始めに

改まりぬる年のはじめの御ことぶき、めでたく申納候、去年のまゝなるしら雪に、寒さのほども知らるゝを、御夫婦様御はじめ、皆々様御そろひ、御年迎へ遊ばされ候御こと、いと〳〵嬉しく存じ候、次に私方いづれも恙なく齢をかさね候まゝ、憚ながら御心やすう思し召給はり度、この二品こゝろばかりに候へども、御年玉のしるしまでに御覧に入れ候、餘は近きうちに、御目もじのうへ、よろづ申述べく候かしこ

同かへし

年のはじめの御ことほぎ、御はやく

初音鶴・朝かすみたてりともなき大そらの春をしめたるあし田鶴の聲

歳旦＝春たつと思ふこゝろはうれしくて今ひとゝせの老ぞ添ひける

初春＝から衣春たちきぬときいしより日のもうらゞらになりにける哉

氷始解＝昨日けふのどけき風の吹くなべゝやゝとけそむるおつ氷かな

書翰の認め方

藤島綾子

世の中がだん〳〵忙がしくなるにつれて、書翰の往復が頻繁になります、人の來訪につぎて、何となく賑やかな思ひのしまするのは、書翰の其處彼處より來ることであります、書翰は慰み三分に用向七分位のものでありますが、たゞ用事さへ辨じさへすればといふ事が、なか〳〵むづかしいものであります、決して人を見上げも見下もするにも及びませぬが、何處へ遣る書翰も同じやうではよし用事は辨ずるとしても、受取つた方で大層手數のかゝる事があります、そこでいさゝか書翰の認め方に就て心附いた事を述べませう、

◎字體　隨分と筆の走るに任せて、解り難い文字を書いて、得意がつて居らるゝ方もありますが、成るべく墨色を濃くして、字畫は正しく認めた方がよろしうございます、さればとて楷書でも可笑しうございますから、行書位の所がよろしうございます、宿所氏名などは兎角書

仰せ聞けられ、且は年の玉ものとて、くさ〳〵のおん贈りもの、いつもかはらぬ御こゝろざし、いと〳〵うれしく存じそろ、仰のごとく、去年のまゝなろ池の厚氷、かさなるものは寒さのみに候ところ、御一同様御にぎ〳〵しく御越年遊ばされ、めでたく御よろこび申上候、しばらく御目にかゝらず候て獸がるたにてもいたしたく、おん暇の折、ゆる〳〵御越し下され度その内私も御年始の御いはひかた〴〵、御伺ひ申すべく候、まづは御答までかしこ、

梅見に人を招く

遠山の雪は去年のまゝにのこり居候へども、昨日けふ寒さも薄らぎ、吹く風も長閑に覺え候故にや、軒端の梅の二枝三枝さき出で候、我家にはそぐはぬ花の色香をいたづらに散らさはんは本意なしと眺めやり候折しも、籠のうぐひす、人待げにそゝのかし申候、あはれと聞し召し玉はゞ、今より御入のほ

折梅花＝梅の花折りて小瓶にさしたればまた一しほのにほひそひけり
庭梅＝とめ來かし梅さかりなるわが宿をうときも人は折にこそよれ
夜梅＝はるの夜のやみにしなれば匂ひくる梅より外の花なかりけり
詠梅花＝年ごとにはちのうゑ木の梅みればはやくも年の春を經にけん

き慣れて居る所から、他も見馴れたとでも思はるゝものか、讀み難いのが數の中には少くありませぬ、これ等は大に注意せねば、初めて其のやうな手紙を受取る人などは、地名人名は文句と違ひまして、前後の關聯が附きませぬから、甚だ當惑する事であります、

◎用紙　は白紙の卷紙を用ひますのが一番無事であります、併し上下いづれにしても身分のかけ離れて居りませぬもの、又は祝ひごと、弔問などを除く外は、畫模樣或は彩色したものを用ひても差支ありません、封筒も同じく無地が當りさはりはありませぬが、改まるほどでない向へは、模樣のあるのが卷紙とゝもに、却つてよい塲合の時もあります、

◎書方　は通例の卷紙でありますれば、書初めを三寸ばかりと、上下を少しづゝあけ、行間のあまりつまらぬやう、文句の續き目は注意して、少し間のあく氣味にし御の字が一字下の方にあるなどのなきやうにしたいものであります、又封筒の表の中央に宛名を位置よく認め、それと並行して右に宿所、左の下　脇書をするのであり

ど御待申上候、かしこ

同かへし

此處のしら梅、かしこの紅梅、きのふけふ盛りとうけたまはり候につけても御園の梅のさき初めぬらんと下に〻くいかゞせましと心うごき候折から、東風吹おくる梅の香に、しばしもためらひ申すべき、身にまとふものも其まゝに、御伺ひ申すべく候かしこ

若菜をおくる

立こむるかすみの色も春めきて、野山のけしきものどかなるまゝに、子どもら二三人引連れ、宿近き野邊に遊びくらし候、小川の根芹、岡の土筆など、歌の題にもせまほしきやう、趣さまざまに候へども、また消のこる雪のひまより、若菜の青やかに萌え出で候がおもしろくて、手のつめたさも打忘れ、手提の籠にあふるゝまで摘ため申候、幸ひよき序のあるにまかせて、いさゝ

呼子鳥〻奥ふかきやまのさくらをひとり見て歸るうしろに呼子鳥なく
若菜〻見わたせば若菜つむべくなりにけりくろよのを野の荻の燒原
摘草〻さゞ波や志賀のあま人春來ぬとみるめなきさに若菜つむなり
摘土筆〻思ふころ菫つむ哉はるの日のまたくれそめぬ野邊のをちかた

ます、樣なり殿なりがあまり下へつかへぬやうにせねばなりませぬ、切手を貼付する場合に、姓名の左脇の上部に、また切手の文字の倒にならぬやうにせねばなりませぬ、斯る所にも人の心掛が見らるゝものでありますから、その外注意せねばならぬ事は、兎角書翰を認める場合は心せわしき時が多いものでありますから、急ぐ道は廻れといふ言もあります通り、讀返しをしませぬと、とんだ間違ひを引起す事がありますから、必ず書放しにせぬやうにしたいものであります、さてそれを卷きますのは左より内に卷いて、受取つた人の見よいやうにし、宛名は折目にかゝらぬやうに、又長い手紙になりますと、他人の家に長居をして、お邪魔をしました、といふ挨拶をする如く、その意味の文字を書加へて置く方が行屆いた仕方であります、さすれば、長文を面白く讀む人でも、猶ほ一層感じを増すことであります、それからいづれの場合でも、人を招きまする時は、出來得る丈早く案内狀を出す方が、受ける人の便利はどれほどかしれません、さればとて當日を忘れるやうに早いのも困つたものであ

かながら御目にかけ候、かしこ

同かへし

雪のひまより萌えいでし若菜、いといと珍らしく候、殊に御手づから摘ませたまひしよし、一しほ嬉しく、野邊のさまも見ゆるやう覺え申候、塵しげき都の住居に、事すくなき身にも、何となう忙がしきやうに思はれ、雲雀雛子などの聲の久しく耳にふれず、やゝもすれば春來しことをさへ忘れて、無風流に暮し居候、その内せめて一日はゆるゆる御邪魔いたし、御宿の春をたのしみたくと存じ居候、先はおんかへしまでかしこ、

花見に人を誘ふ

遊ぶ胡蝶の翅もあらば夢のまに、吉野の山の霞をも、分けなんものをと思ふまで、花の噂のとりどりなれば、あすはとく、程遠からぬ上野より、飛鳥の山なかりくらし、おぼろ月夜の花の下

海邊花＝さくら花くれこそ殘れとまりうのかへる海べの松の木の間に

花見＝けふ見れば雲も櫻にうづもれて霞みかねたるみよし野のやま

尋花＝山さくら心のまゝにたづね來てかへさぞ道のほどぞしらるゝ

花下陰＝來て見ればさくらがされのおのづから時にあひたる花の下陰

ります、一週間内外位の所が宜からうと思ひます、また書翰を他より受取りました場合は、ほゞ文意の想像が出來る、あまり急がぬ事のやうでも、必ず早く封を開き、少くとも一讀を經ねばならぬと思ひます、極端な例を引きますが、いつも金を貸せといふ書翰をよこす人からでも、意外に自分に利益のある書翰でないとも限りませねば、書落しの不都合とゝもに、讀落しの爲に不利益を招くことも少くはありませんから、そして返書を要するものは發信者の用事の片付くやうに、早く出さねばなりませぬ、

覺えて重寶の事

紫東女史

誰でも知つて居るほどの事ではあるが、また知らぬ方には覺えて置いて重寶の事であるから、思ひ出したまゝを片はしから、

◎鷄卵の鑑別と保存法　玉子の性を撰り分くるには、常には日にすかし見るであらうが、又一種のよきしかた

ぶし、とよまれしさまもこゝろみたくおぼしめし如何に候や、花よりも色うるはしき御かへしうけたまはりたく念じ入候かしこ、

同かへし

花よりもかぐはしきおん玉章、ひらくまおそしと拜見いたし候、仰せの如く世の人の心も今は身にそはぬまで、花の盛りの賑ひをよそにのみ聞きなさんは口をしとかこち居候ところ、いざ諸ともに花の木かげに遊はんと、さそふ胡蝶の飛びたつばかり嬉しきおほせ、何事は捨おきても、かならず御供いたすべく候かしこ、

新茶をおくる

夏ながら、まだ時鳥も音づれねば、朝夕の心やりに、童とゝもに摘取りし木の芽、いろ香も淋く候へども、御なぐさみのため、御こゝろみ下され候こともやと御目にかけ候、かしこ

庭卯花＝青葉のみ茂れる庭にさきいでヽほこりがほなる花うつ木かな

山吹＝春ふかみ井手の川瀬にたちかへり見てこそゆかめやまぶきの花

山藤＝山たかみ松にかヽれるふぢの花そらよりおつる瀬かとぞ見る

初夏楓＝若かへでしげれる夏はたかをやか松さへ谷のうもれ木にして

がある、それは卵の細めなる方冷やかで丸き方の暖かなのは性よきものである、兩方共同じつめたさのは、性わるく必ず腐つて居るものである、是を知るには、我が頰のあたりに當てゝも舌の先ならば、なほよくわかる、

また卵を貯へおくには、其冷かなる方を下にして、鹽か砂かの中に立ておけば、久しく保つことが出來る、數の多い時は、下に一重並べたる上に、又砂か鹽かを敷いて卵をならべるのである、其上は幾重にも同じことである

◎淺草海苔の貯へ方　淺草海苔は、とかく色變りやすく、香もうせやすく、貯へ方にも困るのである、東京では、常に好みに從ひて得られるが、地方などには、遠來の珍物、次に記す法によりて貯へおかば不時の需に應ずることが出來る、

一　まづ白米を炊りて、いり米にし、よくさまし、

二　錫の壺の底に、其炊米を深さ二寸許りもしき、

三　其上に海苔を紙に包んだるまゝ竪にならべ、

四　なほ海苔と壺との隙き間、又海苔の上にも澤山入れ

五　さて固く封じておくのである、

同かへし

初ほとゝぎすの音づれより、めづらかなる御文、ことに御手づから製られし新茶、御めぐみ下され候御こゝろざしの、ふかき色香に、老の友得たる心地して、うれしさいはむ方なく、厚く御禮申のべ候かしこ

雨中友を招く

晴間もあらぬ五月雨に、親しき中も絶えぐ\になりゆき候ところ、庭のあやめの人待がほに咲出で候まゝ、雨中御迷惑とは存じ候へども、御手透にあらせられ候はゞ、今より御入いかゞに候や、夕かけては、叩く水鶏の音づれも御耳にふれたく候、かしこ

同かへし

五月雨の空に星かげ見出したる如くよろこばしき御消息、あやめ草のながき睦みを絶えせじとのおぼし召なれとう

谷新樹＝しげり行く木々のわか葉に谷川の音さへ細くなりぬべきかな

梅雨＝玉ぼこの道行く人のことづてもたえてほどふるさみだれの空

水鶏＝おもひかねせめてうれしきくひな哉あまり人来ぬ槇の板戸に

佐菖蒲＝水鶏なく聲をたづねて行くあぜに思はず見つる花あやめかな

さて海苔は濕氣を忌むものであるから、梅雨の中には、常に壺を開かぬがよい、かうすれば、夏秋を經ても、新しきものとかはりがない

この淺草海苔は、十月頃より取り初むるが、寒中に取つたのが上等品で、翌年春三月頃までに取られる、名は淺草海苔といふが、今では品川、大森近き海の産が第一、遠江の舞坂海苔、三河の渥美郡加治海苔、紀伊の加多海苔も、淺草海苔も之に次ぐもので、近頃仙臺産の甘海苔も佳いとの事である、

◎疊の油を拔く法　疊に油のこぼれた時は、即座に水を多くかくれば、油悉く水に浮ぐから、この時手早く拭ひ取るのである、少し間ある時は浮かぬ故、その時は飯粒をねつて、油のしみたる廣さ程、紙にあつく、粭をつけ、疊に張り付けて置く、そしてそれを取れば、紙の粭が油を悉く吸ひ取つて、疊に油の跡もなくなる、この法は、油のしみて久しくなつたるものでもよろし、

◎衣類の酒のしみを落す法　洗へば其光澤失せ、又しみたる部分のみを滌けば、汚班がついて、殊に見苦しき

けたまはり候ては、ふる雨もゝのかはたゝく水鷄のおとづれに先立ちて、御庭の苔に跡つけ申ずべく候、かしこ

螢狩に人を誘ふ

學びの窓のともし火となすにもあられど、涼みがてら玉川に小舟うかべて、螢からばやと思ひ立ち候、御同遊如何に候や、そよとの風の吹かへしをたまはらば、嬉しき限りにそんじあけ候、かしこ

同かへし

かをれる風の音つれに、名にしおほたる玉川の、螢からばやとのおほせ、嬉しさの秋につゝみ餘り候へば、夕暮も待あへず、やがておんうかゞひ申すべく候まゝ、棹さすすべはしられども、舟人の數にも御加へ下さるべく候おん答のみかしこ

月夜客を招く

田上螢＝小山田のあせこすみづのおとすみてゆふべ涼しく螢とぶなり
川螢＝うちなびく河そひ柳ふく風にまづみだるゝはほたるなりけり
螢狩＝いさり火のむかしの光ほの見えてあしやの里にとぶほたる哉
山田螢＝をやま田のみしめに傳ふさみだれのしづくと見えて飛ぶ螢哉

ものである、されど洗はずに之をぬく法がある、藤の花の蔭干にしたのを、酒のしみたるところの上下におき、なほ其の上下に紙をおき、つよく重石をかけて置く、しばらくすると、藤の花は酒氣を吸ひとつて、少しの跡もなくぬける、さて藤の花は、常にあるものでないから、今咲いて居るのを蔭干にして不時の間に合はすやうにするがよい、

◎搗米に虫の豫防法　夏は搗米に虫のつき易きものであるから、糠と共に貯へ置き、入用の時篩ひわけて用ふるに限る、

◎茄子を貯ふる法　まづ茄子を莖につけて切りおき、さて平たき桶に滋を入れ、其中に滋より一寸程上に穴をいくつも開けたる板のかゞみを入れ、この穴に、茄子の莖の、滋まで屆く樣に、さし込み置き、桶の口を固く封じ置くのである、さうすれば、いつまでも色の變なることはない、

又茄子の出たてに、疵のなきを以つて、醤油の中に漬けておく、いつまでたつても、出たての如く色變らず、

浅みどりある空のいろ、今宵の月のさやけさも思ひやられ候まゝ、いぶせき住居には候へども、観月の宴をひらき度候間、もし御障なくば、夕方より御出下されたく、草の庵に虫の音を絲竹の代りにたのしみ候も、亦興あらんと存じ候かしこ

同かへし

おほせの如く、今宵の月のいかにさやけからんと存じ居候折柄、観月の御宴あそばさるゝよし、私どもまで御招き下され、有がたく存じ候、何事はさしおき候ても、御席のはしにつらなりたく、御庭の秋の、いかばかり興ふかき事よと、今より楽まれ候、かしこ

菊花をおくる

いぶせさに誰訪ふ人もなき宿なれど、世のうき秋もしら菊の、ところ得顔に咲出で候まゝ、露ながら一枝手折りて御覧に入れ申候、御歌の料ともなし給

晴夜月＝ひろ庭のまさごにうつろ松陰のくらきは月のあかきなりけり
山　月＝いかなれば秋はひかりのまさるらんおなじ三笠の山の端の月
湖　月＝ながめやる心のはてぞなかりける明石の沖にすめる月かげ
林中月＝松すぎのしげるはやしはもる月の光り一しほさやけかりけり

よく持つものである、これを料理するには、ざつと湯煮をするのであるが、その油はともに用ひられるのである、

又茄子のとりたてを、いくつでも、砂一斗に塩四升の割合にて漬けおき、入用のとき塩をいだしてつかふ、漬様は、砂と塩とをまぜ合せたるを一ぺんふつて、茄子を一並びおき、いかほどの数でも、かやうにして漬けて置けば、色のかはらぬことは奇妙である、

◎糊の煮方　すべて糊を煮るには、余りつよくない火で、絶えずかきまぜて、ぶく〳〵と泡立ち、しやもじにても、箸にても、付けてあぐれば、糸の如く細く引くのを度とし、火より下してのちも、冷めるまで、かきまはすのである、押糊もよくねつて、糸の如くなるがよい、

◎生麩糊　生麩一合に、水三合の割合で善い、之を三倍みづといふのである、但しこれでは、ちと強過ぎることもあるから、煮たる後適宜にとくのである、糊をとくには、水を少しづゝ入れて、追々にとくので、一度に多く入れると、とけ難いものである押糊をねるにも少しづ

はらば、花も千とせに香をとゞめむと存じ候かしこ

同かへし

なみ〳〵ならぬ御心づくし、香にぞしらるゝ菊の花おくらせられし御めぐみの露に、齢をのぶる心地して、嬉しさたとへんに物なく、うつりゆく世にはそまらでしら菊の、高きかをりを心ともがな、など口すさまれ申候、まづは御禮のみかしこ、

枯野に人を誘ふ

時雨なすぎし冬ながら、軒のさくらの二枝三枝かへり咲したるに、池より立のぼる水烟のかすみにまがひて、小春とやらんいと長閑に覚え候まゝ、破れのこる尾花が袖、霜たいたゞく女郎花のさまも、さすがにゆかしくおぼえ候へば、枯野見に行かんと思ひ立ち候、もし御都合よろしく候はゝ、今より御伴いたしたきものに候、かしこ

河邊菊＝谷河のながれのすゑもにほふらんきしの岩間の菊さきしより
菊花＝ぬれて折る袖の月影ふけにけりまがきの菊の花のうへの露
菊露＝朝なあさなまがきの菊のうつろへば露さへ色のかはりゆく哉
岸白菊＝一村のすゝきまじりに咲にけり野河のきしのしらぎくのはな

ゝねるがよい、力にまかせて、一度にねらうとすると、かへつてよくねれぬものである、

◎澁糊の代用法　常の米の糊に、酢を和せてよくときそれで雨障子などを張ると、容易に離るゝことがない、又常の米の糊に、五倍子を入れ、よくねりませて、障子を張りなどするには、離れぬこと、前の通りである、

◎早糊　糗をよく煎つて、それを細末にし、紙袋にいれおいて、入用の時、取り出して水でとけば、早速に糊になり、急場の間に合ふものである、

◎蟲のくはぬ法　印刷に用ゐるインキは、蟲のきらふものであるから、古新聞などで、着物などつゝんでおけば、蟲よけとなるものである、

食品鑑別の簡便法

柴田文子

牛肉、羊肉、豚肉等總て獸肉の良好なものは、鮮紅色であつたり、時に寄つて褐色なことがあります。然うして

同かへし

枯野の草色ながめんとて御誘ひ下され有がたく存じ候、秋におくれし尾花女郎花の、亦一しほあはれふかゝるべく殊に今日は空の都合も此上なく候まゝ時を移さず御宅まで出掛け申すべく候間、何卒御伴の人數に御加へ下さるべく候、まづは御返じまでかしこ

雪の日友の許に

日々催ほし居候空なりしが、遂に昨夜より降出し、めづらしく積りたる雪に日うらゝかにさしそひたる、いぶせき庭ながらもまた捨られぬ風情これあり火桶いだきて獨りながめんもいと甲斐なく覺え候まゝ、あしき路をおそれ入候へども、この初雪の消えはてぬほどに御運び下されたく、おん待申上候かしこ

同かへし

池邊薄＝静かなる池のおもてに立つ波はなびく尾花のかげにぞ有ける

枯野招＝くともたちもとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる花すゝき哉

花薄＝くれてゆく秋のこゝろはつらけれどうらなく招く花すゝき哉

古宅薄＝住すてゝあれしむかしの跡とへばすゝきみだれて秋風ぞふく

硬くて彈力を有して、指で壓しても汁が出るやうなことがなく、俎板の上に載せて置けば、少しばかり淡紅色の液が滴るのです。併し此方法より尚ほ確めたいと思ふならば、飲食物の試驗に用ゐる試驗紙を賣藥店で賣つて居ますから、其青いのを貼着けて赤くなるのは佳い肉であります。病氣のあつた獸の肉は桃色で、尚ほ赤褐色、暗褐色、暗紅色、暗紫色で臭氣があります。又時日を經過した肉は、其色に光澤がありませんし、又腐つた肉は軟かで濕氣があつて温氣を帶びて居りますから一目瞭然と分ります。夫れから試驗紙の赤いのを貼つて青くなるのは惡い肉であります。夫から馬肉と牛肉の鑑別法は、馬肉は牛肉より堅くて彈力がありますし、脂肪が牛肉よりか少いのです。然うして空氣中に曝らしますと暗色になりますし、馬肉を嗅ぐと厩の匂ひがするので直ぐと分別が付きます。夫れから新らしい肉は硬いもので、其味も好くはありませんから、二日間も空氣に觸れしめて水氣の幾らか取れたところで調理するに限ります。

鳥肉の好惡を知るには、眼球に水氣がなくて、恰るで活

仰せの如く、雪もよほひの空とは推はかりゐ候へども、かく珍らしくつもり候はんとはおもひもかけず、たゞさへながめ多き御庭の如何ばかりか御見事に候はん、幸に御招きにあづかり、目の正月とやらんいたすべく候、かしこ

年の暮に

ことしもやがてくれ竹の、ひとよふたよとおしつまり候、お許さまには、日頃の御こゝろがけも深うあらせられ候へば、今更のおん急ぎも候はずや、わたくし方などは、何一つ手まはり申さず、猫の手さへほしきやうのさわぎ、おん察し下されたく候、さては此鏡餅並に鮭一尾、御歳末うかゞひのしるしまでにさし上申候、餘は年たちかへり候はん日にと、申のこし候、かしこ

同かへし

くれ竹のふしおもしろきおほせごとうけたまはるも、御事多のおん中、おそ

[illegible]暮月＝くれてゆくとしを見おくる大そらに心ぼそくものこる月かな

[illegible]庭＝まつ人の今も來たらはいかゞせんふまくゝをしき庭の雪かな

[illegible]＝ながめやるこゝろの道もたどりけり千里のほかの雪の明ぼの

[illegible]暮近＝あらたまのとしの終りに成りぬらん松賣る賤の門にきこゆる

きて居るやうな光澤があつて、嘴の色が鮮かで、尚ほ嘴の中に粘液がなくて、肛門が能く緊縮して不潔い液を出さず、羽毛を脱くにも中々脱けなくて、臭氣など無論ないものが佳いものです。之に反して腐れかゝつたものや病死したものは、眼球に水氣があり、嘴の色が變じて、其中に液が出て居るし、羽毛を脱くのに容易く脱くことが出來て、嫌やな臭氣がするのです。

鷄卵の良否を知る法は、先づ水一合に二匙程の食鹽を投じて能く攪き交せ、其中へ鷄卵を入れて、浮くならば腐れかゝつてゐるもの、又漂ふてをるのは新古の半にをるもの、又底に沈むのは新らしいものであります。

肴の肉の佳良なのは、丁度活きて居るやうな眼の球で、全體に艶かあつて、鱗が中々取れませず、魚類特有の腥い外更に他の臭氣がありませぬ。次に惡ものになると、眼の球が白くなつて居て、障つても直ぐと鱗が取れますし、其上言ふに言はれぬ厭やな臭氣があるものです。

日常なくてならぬものは米ですが、米の良惡は何人にも大概見別けがつくものですが、産地によつて良惡のある

れ入候た、例年の通り、品々おんおくり下され、御懇の申上げやうもこれなく候、幸ひ寒梅一鉢、よきほどに蕾を持ち候へば、持たせさし上候まゝ、かはらぬしるしと御笑覽下さるべく候

手紙は短く書け
手紙はよく見よ
住所は明に書け
返事は早く出せ

のは言はずと知れたことです。ですが先づ良いものは粒に丸みがあつて、兩端が尖つて居て、透かして見ると幾らか透き通つて居るやうであるし、倘ほ其上に光澤があります、ところが惡いのになると、細長くて、光澤もなくて粘着力が脆薄であります。

食物貯藏の簡便法

井上小衣子

●海苔は兎角濕び易いものでありまして、濕氣を帶ふると、折角の好い味も無くなりますから、これを永く貯藏せんとしますには、炙つてから粉にして壜に入れ、密閉して置けば大丈夫です。

醬油に黴の出たのは、見てさへ心持の惡いものであります、これが豫防法は芥子を小さい袋に入れて、徳利なり、壜の中に入れるのです、其袋には糸を付けて口の所に結び付けて置けば宜しい、夫で芥子の臭氣は決して醬油には移りません。夫から何うかすると醬油の味が變ることがありますが夫を防ぐには味噌を少しばかり入れて置けば大丈夫です。

酢も又醬油と同じく黴の出易いものですが、これは燒き鹽を少しばかり入れて置けばよろしいです。

餅も前同樣黴の出たがるものです、これは搗く時にこれ取りをする水の中に砂糖を入れて置きますと其餅は黴ることは斷じてありませぬ、夫れから今一つは餅を入れて置く物の中に串柿を入れて置く法もあります。

生肴を貯藏することは、常に割烹店などは種々と苦心をして居るのですが、普通の家とてもこれが完全な貯藏法を知ることは必要です、これは何んでもないことで、横の方に透かしのある箱に上蓋して井戸の中に釣るして置くのと、又北方に向いて居る椽の下のやうな所に穴を堀つて、四方を板で圍へば好い、ですが犬や猫の襲來を防ぐ爲めに蓋をして置くことは肝要です。

野菜類を二日か三日貯藏しやうと思ふならば、流しの邊りの、常に

水のかゝる處に置けば宜しいですが、夫れ以上持たせやうとするには此方法では不可ない、其時は地を掘つて、籾殻を一寸ばかりの厚さに敷いて、其の上に野菜を置き、其又上に一寸ばかり籾殻を置き、貯藏する野菜が澤山ならば澤山の樣に、段々に此方法を用ゐる、然うして一番上に粉を敷ひ置くのです。尤もこれは家根のある所に限ります、斯うさへして置けば十日は愚か一年間も貯藏することが出來るのです併しこれは少々手數がかゝるのですが、これよりも簡便法は、箱でも樽でも構はぬから、中に砂を入れて野菜を埋めて置けば充分です。

鰹節を貯藏するには、繩で編んで天井にぶら下げて置くことは普通の家で能く遣つてゐる貯藏法ですが、又一法は灰の中に埋めて、入用の時々に出して洗へば宜しい。夫れからこれに蠅の付くのを防ぐには酒を塗つて置けば其憂ひがありませぬ。

女藝十圖（其の十）洗濯



食物の貯藏はこれ等の方法に依らないでも、日頃の心懸けさへ好ければ大丈夫です。其日頃の心懸けといふのは、日光の這入るところに、食物を入れる戸棚や鼠入らずを置かぬことです。漬物とても日光に當てると味の變るものですから、新に邸宅でも新築するやうなことがあるならば、漬物小屋は北方に向いた位置に建てることが肝要です。

飯の食ひ方

有住　常子

膳に向ひ、主人挨拶あらば、列座見合せ、一同に椀の蓋を取るべし、取やうは、左手にて飯椀の蓋を取り、右手をそへて取り直し

左の方に仰向けて置くべし、此時湯氣のしたゝり落ちぬやうにすべし、汁の蓋は右手に取り、左手をそへ取直し、右の方に置く、次に坪の蓋を取る、飯椀の如くし、惣て左の物は左にて取り、右の物は右にて取ること〻心得べし、

先づ飯を食ふ、食ひやうは兩手にて飯椀を取り、左手にすゑ、右手を仰向けて箸を取り、飯椀を持たる左手の、四五の指の間に挾み持直して、二箸三箸ほど食ひ、又箸を指の間に挾みて下より持ち、膳に置き、(箸の取りやうは、度毎に斯の如くにて、かはる事なし兩の手にて、飯椀を置べし、

次に汁を吸ふ、これは兩手にて汁椀を取り、一口二口吸て、箸を取り、躬を二箸三箸食ひ、箸を置き、又汁を吸て膳に置くべし、品により、箸にて躬をおさへて、汁を吸ふべき事もあり、

次に飯を食ひ、次に汁を吸ふ、二度目よりは、躬を食ひ、汁を吸ふべし、

次に飯を食ひ、次に菜を食ふべし、菜は本膳の膾より食ふものなり左手を突き、膳に置きながら、箸にて皿の端へ挾み寄せ、酢のしたゝりなき樣にして食ふなり、

次に飯、次に坪を兩手にて取上げ、一箸二箸食ひ、汁あらば箸を置て吸ふべし、汁の無き物は、下に置いて食ふ事式法なり、

次に飯、次に二の汁、右手にて蓋を取り、右脇に置き、右手に椀を取り、左に移し、箸を取り、躬を食ひ箸を置き兩手にて持ちて、汁を吸ひ、右手にて膳に置くなり、

次に飯、次に平蓋を取り、右脇に置き、右手にて椀を取り、左手にうつし、箸を取つて食ふなり、汁あらば、箸を置きて吸ふべし、中の品を、あれこれと食ひかけおかぬものなり、

次に飯、次に三の汁、左手にて蓋を取り、左の脇に蓋を置き、椀も左手にて取上げ、右手を添へ、左手に据へて、箸を取り躬を食ひ、箸を置き、汁を吸ふべし、

次に飯、次に刺身、箸を取り、少し左へ居向きて、躬を猪口に挾み入れ、猪口を取あげて、食ふ物なり、

次に飯、次に猪口、右手にて取り、左手に据へ、箸を取り食ふなり是より後は、前の次第に拘はらず、何にても食ふべし、されども、あまり心の儘に、食ふは宜しからず、

次に飯、次に膾、食はじめの菜にて、食ひ終るを、始終の禮と云へり、時宜によるべし、

次に飯を食ひ箸を納むべし、この飯は、少し殘し置きて、湯を受け香の物を食ふべし、一口にかみ切れば、齒形見ぐるしければ、二口三口にも食ひ切り、湯を呑むべし、付合せの山椒などは、時宜によりて箸をつけぬもくるしからず、

臺引、燒物の類、置ならべたる品々を、食はぬは法式とするにはあらざれども、後世は臺引も、大海老大蒲鉾の類にて、食盡しがたき物なれば、箸をつけ取りあらさんよりは、時宜により、其儘引かするもよろし、

飮食事に左の禁忌の條がある、

▽移り箸　菜を喰ひたる次に、飯を食はずして直に他の菜を食ふを云ふ、

▽膳渡り　本膳の膾坪等を喰ひ、其次に飯を食はずして、直に二三の汁菜等を食ふを云ふ、

▽にらみ食ひ　椀を取り上げ、物を食ひながら、外見をするを云ふ

▽こみはし　一度に口中に物を入れ、箸にて押込むを云ふ、

▽もぎ箸　はしにつきたる物を口にて取るを云ふ、かやうの時は、椀の緣、或はさらなどの緣にて取るべきなり、

▽袖越し　二の膳の物を左手にて取り、三の膳の物を右手にて取るを云ふ、

茶受の食ひ様

伊勢芳子

人の家を訪ふほどの女子は、直ちに入用の事なれば、心得おかればならぬ必要あり、

◎餅菓子　羊羹、葛餅の類は、楊枝にて押きり、楊枝にさして食ふべし、中に餡の入りたるは、まづ懷紙を出し、二つ折にして左手に持ち、楊枝にさして取り、楊枝を置き、兩手に持ち、紙ながら割て餡のこぼれぬ様に、楊枝にさして食ふべし、大豆粉餅、小豆餅の類は、盆を取上げて、楊枝にて食ふ物なり、

◎干菓子　懷紙を出し、四つ折にして、左手に持ち、箸を取り、一種に受け、箸を置き、右手にて取りて食ふべし、五種七種ありとも、ことごとく取るはよろしからず、また意にまかせ、度々取りては食はぬ物なり、核あるものは紙に包み懷にすべし、

◎赤飯と強飯　赤飯は小豆を入れて、やはらかに蒸したる物にて、昔は重陽の節又は帶直し、鉄漿染等、女子の祝式に用ひたり、强飯は黑大豆を入れ、こはく白むしにしたるものにて、元服袴着等、男子の祝式に專ら用ゐたりしが、後世男女の諸祝儀、都て赤飯を用ゐ凶儀には多く白むしを用ゐる事となれり、食ひ様は赤飯は箸にて食ひ强飯は手にて食ふ事古法なれども、都て箸にて食ふもくるしからず、

◎婦人會の木札　愛國婦人會と云ふ木札を、門柱の木札に並べて掲げる事は、小石川同會支部幹事濱尾大學總長夫人作子、松崎博士夫人悦子兩女史の首唱にて、小石川區より始まり、現に本郷神田等へ移りたるが、印刷物等を配るに至極便利なりと云ふ、

◎華族女學校改革評　東京帝國大學敎授某氏は華族女學校改革を評して曰く、今回の遣り方は普懸相半ばすと云ふべきも、兎に角大進歩といふを妨げず、幵は學科表中國語漢文科の漢文を廢したることにして、此點丈は文部省直轄中學校高等女學校に先鞭を着けたるものなり云々、

口絵の解説

◎花前の蝶　春の畫題として上乘なるものなり、羽をひろげたる蝶を撮りたる苦心容易ならざるを見るべし、華族某氏の手に成るもの

◎岩倉公爵の家庭　公爵は侍從職幹事として、夫人は愛國婦人會々長として、其高き家柄とゝもに世人の景仰する所となる。

東伏見宮妃殿下は實に此公爵家より出で給ふ。

◎鍋島侯爵の家庭　侯爵夫妻の君、我國社交界の大立物として、其門地、風采、知識、人格ともに高く、且つ極めて文學を嗜好せらる梨本宮妃殿下は、此侯爵家より出で給ふ。

◎前田侯と同令夫人　過般華燭の典を擧げられたる、加州百二十萬石家の新夫婦の君也、其裝束は古代の典禮による、

◎樂しき庭園　風清き雖、やんごとなき姫君、此圖中のものとなる子爵伊井伊直方君の撮影せられたるもの、

◎隅田川の櫻　墨堤十里を一眸の中に收めたる東都第一の絶景を映出したるもの也

◎小金井の花　風靜かなる小金井の春、花を賞るもの亦花を見る、撮影者の面白き觀察を見落す勿れ

◎手風琴　貴族の姫君手風琴を弄せらるゝ圖、奏樂いかに無邪氣に長閑なるかと、此圖中に聞くを得ざるを憾む、

◎かぐや姫　坪内逍遙博士の近作脚本中の一部を、花の如き令孃數氏によつて試演的に映出せられたる活人畫なり、

定價

一冊	前金貮拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貮冊	前金貮圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六十四行	金拾貮圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に[illegible]錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貮丁目貮拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年四月十二日印刷
明治三十九年四月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

文部省檢定濟教科書類及參考書類

內堀維文校閱 國光社編輯所編纂	◉中等漢文讀本	全五册	定價金一圓五十錢 小包料金十五錢
慶應義塾大學部講師 宮森麻太郎著	◎イージー、レッスンズアンド、コンポジション	全一册	定價金五十五錢 郵稅金六錢
宮森麻太郎著	◎モーア、レッスンズ、イン、グランマー アンド、コンポジション	全二册	定價金一圓十五錢 郵稅金十二錢
小林萬吾著	◉中等習畫帖 色鉛筆并水彩着色	全八册	定價金一圓九十二錢 郵稅金十二錢
小林萬吾著	◉中等習畫帖 鉛筆畫	全八册	定價金一圓三十五錢 郵稅金十錢
高橋正熊 松本敬 共著	◉法制經濟教科書 法制之部 經濟之部	全二册	定價各金六十錢 郵稅各金六錢
大宮兵馬著	◉中等日本文典	全一册	定價金五十五錢 郵稅金八錢
國光社編輯所編纂	◉中等國語讀本	全十册	定價金二圓二十錢 郵稅金卅錢
大宮兵馬著	◉國語漢文假字遣法	全一册	定價金十八錢 郵稅金二錢
大林弘一郎著	◉中等國文學史	全一册	定價金六十錢 郵稅金八錢
矢島喜源次著	◉中等生理衞生新教科書	全一册	(檢定出願中)
國定教科書著者 內大臣秘書官 日高秩父書	◉中等習字帖	全三册(檢定出願中)	上中下各金十三錢 送料各金二錢
川村理助著	◉高等女學校用 動物學新教科書	全一册	定價金五十錢 郵稅金六錢

- 川村理助著 ◉高等女學校用 植物學新教科書 全 定價金五十錢 郵稅金六錢
- 川村理助著 ◉高等女學校用 生理衞生新教科書 全 定價金五十錢 郵稅金六錢
- 東京府第一高等女學校教諭 市川源三著 ◉高等女學校用 教育學教科書 全 定價金五十錢 郵稅金六錢
- 市川源三著 ◉高等女學校用 國史教科書 全二册 定價金各五十錢 郵稅金各六錢
- 阿多廣介・園田竹熊共著 ◉女子補習讀本 全二册 定價一卷廿五錢 二卷卅錢 郵稅各六錢
- 阿多廣介・原田長松共著 ◉小學理科教授書 全四册 定價金二圓二十錢 郵稅金十五錢
- 同著 ◉小學理科摘要 全四册 定價金各十錢 郵稅金各二錢
- 平野秀吉著 ◉國語聲音學 全 定價金六十錢 郵稅金八錢
- 文學士遠藤隆吉著 ◉公民心得 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 鈴木龜壽著 ◉實驗理科教授法 全 定價金五十五錢 郵稅金八錢
- 石田鐵郎著 ◉水產製造論 全 定價金一圓廿錢 郵稅金十錢
- ◉討露戰史 第一編 第二編 定價金卅錢 郵稅金六錢 定價金四十錢 郵稅金八錢
- 丹主一・野木衞佐美合著 ◉海軍遊戲法 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 岡部時次郎・森田廣吉共編 ◉教育適用 舞踏遊戲法 全 定價金廿三錢 郵稅金四錢

● 學校生活 全　東京高等師範學校附屬小學校編纂　定價金廿錢　郵稅金四錢

● 教育者と國家社會主義 全　樋口勘次郎著　定價金八十錢　郵稅金八錢

雜書類

● 讀書と修養 全　登張竹風著　定價金三十錢　郵稅金四錢

● 四季物語 全　幸田露伴編　定價金五十錢　郵稅金四錢

● クレオパトラ 全　佐藤天風著　定價金廿五錢　郵稅金四錢

● 長曾我部信親 全　醫學博士森鷗外著　定價金十錢　郵稅金二錢

● 泥舟遺稿 全　安部正人編　定價金四十五錢　郵稅金六錢

● 王學指掌 全　伯爵副島種臣題辭　從二位尾崎忠治題辭　鹿川宮內默藏著　定價金一圓　郵稅金十錢

● 天朝正學 全　從六位[illegible]藤[illegible]安序　故正三位文學博士栗田寬著　定價金卅五錢　郵稅金四錢

● 名家修養談叢 全　文學士吉丸一昌編　定價金卅六錢　郵稅金八錢

● 櫻痴居士と市川團十郎 全　榎本虎彥著　定價金卅錢　郵稅金四錢

● 腦力增進論 全　小畠幾次郎著　定價金卅五錢　郵稅金四錢

國光社出版圖書目錄

著者・編者	書名	冊數	定價・郵稅
清藤正輔謹編	● 皇后陛下御略記 坤德	上製・並製	定價金卅五錢・金廿五錢 郵稅各四錢
小山幾次郎著	● 體力增進論	全	定價金四拾錢 送料金六錢
清藤正輔編	● 西鄉從道	全	定價金廿五錢 郵稅金四錢
清藤正輔編	● 聖德太子傳	全	定價金十錢 郵稅金二錢
福本日南著	● 筑前誌	全	定價金一圓廿錢 郵稅金十錢
第五回內國勸業博覽會事務局御編輯	● 第五回內國勸業博覽會 出品審査概況	全	定價金十五錢 郵稅金四錢
宮崎滔天著	● 卅三年之夢	全	定價金卅三錢 郵稅金八錢
宮崎滔天著	● 狂人譚	全	定價金二十錢 郵稅金四錢
澁澤男爵題字 高瀨魁介編纂	● 澁澤男爵 最近實業談	全	定價 上製金七十錢 並製金六十錢 郵稅各金十錢
北海道廳拓殖課御編纂	● 北海道殖民圖解	全	定價金八錢 郵稅金二錢
富田鐵之助題字 須田每六著	● 銀行利用法	全	定價金四十錢 郵稅金六錢
故品川彌次郎 平田東助 共著	● 信用組合法提要	全	定價金五錢 郵稅金二錢
獨乙大博士ウイル、ヘルム、ロッシエル氏著 平田東助、平塚湯次郎、湯川寛吉共譯	● 商工經濟論	全二冊	定價金一圓八十錢 郵稅金十五錢
濱口吉右衛門著	● 財政と國力	全	定價金廿三錢 郵稅金四錢

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾 共著 ◉ 女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價 松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢 郵稅各二錢

棚橋絢子著 ◉ 女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◉ 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◉ 女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎著 ◉ 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城著 ◉ 女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀內新泉著 ◉ 女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川寬州著 ◉ 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀內新泉著 ◉ 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局編 ◉ [illegible] ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

著者	書名	冊數	定價	郵稅
梅澤清一著	●清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	●萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀内新泉著	●少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	●常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林雨搭著	●勾當の内侍	全	金十三錢	金二錢
濱田靡著	●袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	●靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	●顏世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	●家庭訓歌 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀬眞卿著	●學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	●女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

國光社出版圖書目錄

- 岡勇次郎著 ◉ 日本米穀ノ將來 全 定價金三十錢 郵稅金六錢
- 川崎直衛譯 ◉ 國際貿易論 全 定價金六十錢 郵稅金六錢
- 佐美益三著 ◉ 臺風雜記 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯 ◉ 奢侈亡國論 全 定價金二十錢 郵稅金二錢
- 陸軍大臣寺內正毅題辭 [illegible]之本甲雪輔編 ◉ 德川の孔明 全 定價郵稅共金十五錢
- 山崎忠和著 ◉ 日露の英雄 全 定價郵稅共金二十二錢
- 倉敷銀行頭取中村清藏序 中村佐平著 ◉ 銀行簿記學 全 定價金五十錢 郵稅金六錢
- 故富士谷御杖述 ◉ 土佐日記燈 全三冊 定價金一圓五十錢 郵稅金十五錢
- 井上賴圀校訂 小澤政胤著 ◉ 慶長以來國學家略傳 全 定價金一圓五十錢 郵稅金十錢
- 弘田正郎編 ◉ 豪吟集 全 定價金八錢 郵稅金二錢
- 幸田露伴序 村上濁浪譯述 ◉ 鐵血宰相語錄 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 在法科大學 矢田七太郎著 ◉ 江川坦庵 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 水主天姥著 ◉ 石田三成 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 塚原澁柿著 ◉ 山崎合戰 全 定價金卅九錢 郵稅金六錢

塚原澁柿著 ●小牧合戰 全 定價金五十五錢 郵税金十錢

工藤武重謹著 ●孝明天皇御遺德 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

山崎忠和著 ●文久物語（一名寺田屋騷動） 全 定價金二十八錢 郵税金六錢

少年傳記類

文學士大町桂月著 ●少年武士道史傳第一編 藤田東湖 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士工藤景文著 ●少年武士道史傳第二編 山中鹿之助 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士三好物外著 ●少年武士道史傳第三編 上杉謙信 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士笹川臨風著 ●少年武士道史傳第四編 本多平八 定價金十九錢 郵税金四錢

田岡嶺雲著 ●少年武士道史傳第五編 小早川隆景 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士白河鯉洋著 ●少年武士道史傳第六編 立花宗茂 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士太田蒼溟著 ●少年武士道史傳第七編 木村重成 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士中内蝶二著 ●少年武士道史傳第八編 大石良雄 定價金十九錢 郵税金四錢

内國通運株式會社編纂 ●新式大日本里程地圖 洋裝・帙入 定價（各參圓五拾錢） 送料荷造費 廿五錢 同 卅五錢 臺灣 洋 五十錢 帙 四十錢

農商務省御編纂 ●清國染織に關する意匠圖按 大和綴 正價金五圓 送料及荷造費 廿五錢 臺灣 四十五錢

女鑑 (臨時増刊)

明治三十九年 毎月一回一日發行 明治廿五年三月二十日
四月十五日發行 第拾六年第五號 第三種郵便物認可

